戀愛日記

欺かざるの記

戀愛日記

國木田獨歩作

□新潮社出版□

解題

明治二十八年三月、二十五歳の國木田獨歩は、國民新聞の從軍記者としての任を了へて、軍艦千代田を辭し、東京に歸つた。その月六月、婦人興風會の有力者で、國民新聞社長德富蘇峰の友人たる佐々城豐壽夫人の催した從軍記者招待會の席上に於て、獨歩は、はじめて佐々城家の娘信子を見た。而して、その十六七の娘ざかりの楚々たる風姿に動かされた。明治文藝史上に名高き挿話（エピソード）なる獨歩の戀はこゝにはじまる。その戀が遂げられ、結婚が成り立ち、新しい家庭を湘南日麗かなる海のほとりに作ると間も無く、哀しい破局が——獨歩に死を思ふ迄の大打擊を與へ、その人生觀を一變せしむるに至つた破局が來た。それまでの徑路を、仔細に語つたものが『欺かざるの記』の後半部である。獨歩の人と藝術とのすべてに、深大な影響を與へたその戀の始終を知る事は、獨歩を解し味ふ上に極めて必要であると共に、一つのすぐれたる魂が、いかにしてこの烈しき試錬に苦み、而して堪へ得たかを知る事は、人生の大道に勇敢な

る歩みを進めんとしつゝある若き人々にとつて最も意味ある事であらうと思ふ。

今こゝに『欺かざるの記』の後半部を刊行するに際し、前編の『青年時代』と別つ爲め、假りに『戀愛日記』の名稱を附した。紙數限りあり、『青年時代』と同じく少なからぬ抄略を加へねばならなかつたことを遺憾とする。

編者識

欺かざるの記

事實――感情――思想史

後編（抄錄）戀愛日記

國木田獨歩

六月（明治二十七年）

二十六日。

吾に神なし。

嚴肅なる、偉靈なる、美なる、善なる神吾になし。

されど吾宇宙にこれあるを思ふ。未だ吾が心の眞の信仰のこゝに至らざる也。

吾たゞ善、美の神の信仰を求む。

今朝ウオールズウオースのハイランドガールを讀む。

今井氏に與ふるの書を作る。

國民之友二百三十號來り、讀む。「一代の風雲と文學の題目」は讀んで感ぜざるに非ずと雖も、到底民友子流の言語に過ぎず。

民友子のオーソリテイはジョンモルレー位のものに過ぎず。

海水浴をなす。

朝鮮の風雲益々危し、支那と吾が國と戰端今にも開かれんず樣子なり。

嗚呼世界人類の大勢は如何。

自然！ これ空言に非ず。嗚呼決して空稱に非ず。

二十七日。

嗚呼見よ蒼空の蒼々を。白雲の漠々を。水光山色の翠、これ夏日の美に非ずや。元越山上の雲霧の白光を見よ。

嗚呼自然！ これ空言に非ず。

二十八日。

午前サルトル、レザルタス Natural Supernaturalism, の章を讀みぬ。

昨朝はウオールズウオースの Olde Immortality の章を讀みたり。

共に深く感ずる處ありたれども、筆と口のあらはす能はざるものなり。哲人の觀る所、痛感する所、信念する所、蓋し深し。吾少しく其の消息を解す。

たゞ言ふ、吾をして信ぜしめよ。

海水浴を試む。

雲漠々、天茫々、美なる哉、人間の世界。否神の天地。

二十九日。

幻影よ去れ、諸々の幻影は實に我人の迷ふ處なり。

時の幻影、空間の幻影よ來れ、記憶の幻影よ去れ。

嗚呼茲に於てか問ふ、嘗て在りし吾が友は如何になりしぞ。

眞理を以て滿足するものは誰ぞ、幻影を追ふ勿れ。

七月

二日。午後七時半記す。

一日は日曜日、此日午前、

坂本氏を去りて桂港の濱に宿を轉ず。蒸汽問屋なり。

一日三時間の授業となる。

國元より小包郵便到着、浴衣、かたびら、絽の羽織を送らる。

昨日港頭に水雷艇二艘來り、今日猶ほとゞまる。見物大變たり。

今日三回海水に浴す。

昨日午後富永、尾間等の諸氏來遊、昨夜教會に出席す。感話す。

炎熱甚だし、人力車にて登校す。

日清の關係日に迫る。內外の政界多事なり。海濱を散步するは吾に新しき自然を見せしむ。

轉居まぎれにて、讀書と、沈思と、執筆の閑を得ず過ぎぬ。

たゞ一つの突然として吾が胸裡を往來する光あり。

曰く、「哲人は眞理に滿足す」てふネルソンの句の意なり。

時間、空間、名稱、習慣のイルージョンを去り得たりと假定せよ。然らばイルージョンならぬものは何ぞ。爾、何に滿足するとはするぞ。眞理！

三日。

事實！　言ふ勿れ、輕ろ〳〵しく言ふ勿れ。事實と、此の意義は長し。人に依りて其の看取する處の事實異なり。時間に依りて其の注意する處の事實異る。其の異なる處を見て、其の人其の時代の精神を知るに足るなり。

四日。

午前ウオールズウオースの一不死のオードを讀む。再讀三讀愈々其の妙諦を感得す。

彼は小兒のインノーセントを、及び其自由にして自然なる喜びを信じぬ。此の「信」を通じて靈の不死を見たり。

昨日長田氏西京に上る。蓋し祕行なり。少年の妄想は憐れむべし。

外交問題愈々急なり。

「實利實益」の迎代的妄想、愈々其の聲を高め來り、今や教育界も全く此の爲に支配せらるゝに至りぬ。

「今井氏に與ふ書」「竹取物語」「景時」の三編悉く中止の姿なり。筆とるの餘裕なきが如し。一言す「努力せよ」。

勞働は成程、神聖の法なり。

「信じて爲す」、これ余のクリードなり。

信ずるとは火の如き信仰を意味し、爲すとは神の活動の法を意味す。「信じて爲せ」、余のすゝめなり。

人生は眞面目なり。

七日。

夕暮舟を海に泛べて漫航す。

嗚呼美と愛と、義務と希望との信仰よ來れ。『爲す』是れ實に人が此地上の義務の法に非ずや。されど要するに凡ての法則は神聖者を信じて始めて其の力をあらはす。

吾神を視んことを希ふ。

『嗚呼神を視る』是れ吾の望む處なり。

今の吾は盲者なり。

神何處にある。心からして問へ。大なる答は來らん。

人は何を爲しつゝあるか。

日清事件は如何、嗚呼人間は此の天地間に何を爲さんとはする。

吾をして神の永遠のうちに勞働せしめよ。

神！　永久！　不死。然らば勞働は人間の法に非ずや、時間と空間とのイリユージョンを去りて、而して後吾は何を爲す。曰く勞働作爲す。之れ『今』の法なり。『今』の意味なり、『今』の心なり。

『吾今茲に在り』凡ては此のうちより來る。

八日。

神は『今』在り。今の裏面直ちに永遠に非ずや。幻なる哉、視る可からず、たゞ思ふ、これ「過去」なり。故に此の宇宙の現象はこれ幻なる哉。幻直ちに之れ實也。

吾人は流星の如し。光は暗黑のうちに在り。暗黑に向つて走れ。光、爾をめぐらん、然り、而して無窮の光に入らん。

吾人は動かざる可からず、――これ活動の眞理也。

嗚呼詩は信仰なり。

十日。

昨夜新月に乘じて舟を滿潮に泛べ放流す。

肅然として天地の無極の壯麗に對す。

行動十分宇宙に刻せられて、「時間」之を消す能はず、一擧手一投足悉く神に達す。

人生は幽玄にして神祕なり。行動を現在に眞面目にせよ。吾これを信ず。

「時」！　これ實に不思議の幻なり。

「昨日」は千年の昔と同じ。

信仰なる哉。「時」と「死」と「愚」と「薄弱」と悉くこれ不信の迷暗の對する處の幻なり。

神を見よ。

昨日德富氏より來狀。

十一日。

吾尙ほ眞理を以て安ずる能はざる所以のもの如何。未だ眞理ならぬものに安んずれば也。人は何ものにか安んず。安んぜずんば眠ることすら出來ざるべし。

吾未だ眞理を信ぜざる也。否、眞理を見るに至らざる也。吾が眼は眞理より被はれ居るなり。

されど吾はたゞ吾が生命の聖を信ぜずんばあらず。故に何れの時か神の眞をみるの時あるを信ぜずんばあらず。

されど尙は記憶せよ、「今」なり。「今」を記憶せよ。

宇宙は不思議なり。故に人間は不思議なり。人間は不思議なり、故に人間の行爲、信仰、言語は不思議なり。

ゲーテ、クリスト、カーライル、王陽明、ウオールズウオースは不思議に非ざるか。

吾、直に不思議に非ざるか。吾の感情、歷史、此の熱情、これ不思議に非ざるか。嗚呼神よ。

故に吾神の前に個人の傳記を嚴かに學ばんことを欲す。

これ人間の不思議を學ぶ也。則ち宇宙の不思議を學ぶなり。則ち神の不思議を學ぶ也。吾ウオールズウオースてふ詩人（人間！）を考へて實に自然の不思議を更らに痛感せずんばあらず。

嗚呼ヒーロー！　また無名の俗人！　大なる不思議よ。

十二日。

個人樣々に此宇宙に繫がれ各々其の命運に驅られて、夢の如く、疾風の如く、幻の如く此地を經過す。

嗚呼吾！　此の吾！　不思議なる哉、人の一個！

凡ての個人を見よ、如何。

嗚呼人間の繫がる所は此の不思議の宇宙に非ずや。オヽ恐ろしくもある哉、此の大宇宙！　われ人、此に現はれ玆に沒す。

昨日、太陽已に西に落ちて海島の遠影ほのかに夕陽を帶ぶる頃、家を出でて警報竿の一小丘に登りて遠望す。

暫くして小丘を斜に其の半腹に下り、ふと大入島の方を顧みたり。島と陸とによりてかこまれたる海面、湖水の如し。湖面寂々たり。島端を晩色のうちにかくす。

たゞ見る島の横に當りて遠く江峰の一塊突として立つを見る。口言ふ可からず、筆記す可からず、これ壯麗にして幽冥なる自然の、人しれず其の祕密の美をもらす也。吾之を睇視して眼に一滴の涙をもつて立ちぬ。

カーライル何處に在る？　眞に何處にある！　彼何處にかゆきし。

ウオールズウオース何處にかある。凡て逝きし人々今如何。

此の自然！　嗚呼此の自然と逝きし此等の詩人達と今の關係は如何。

西行は如何、ショウペンハウエルは如何。吾が友は如何、吉川氏は如何。嗚呼友よ、友よ、吾が愛の切なるに連りて爾の死の事實に打たる。

嗚呼默して此の時間空間の無窮の自然と個人とを見よ。

十三日。

吾は未熟なり。實に吾は未だ何一ツとして熟したるものなし。成熟發達は人間が此の地上の自然の情なるに。不思議なる世界に不思議の命はかゝる。『如何に生活すべき』これ人の意味深き省問なると同時に『人は如何に生活せしや』これまた人の深甚なる考究を要す。

『信じたり』是れ哲人達に冠する最簡の言葉なり。されど決してこれを以て其の生活を說明する能はざる也。

『生れて死するまで』彼は『如何に生活せしや』これなり。

『自然と人間』實に然り。決して分離して考ふる能はざる也。故に哲人は天が使したるものなり。

今！　神よ。

吾人の力は過去に不及。過ぎし事は如何ともなす能はず。夫れ然り。如何ともなし能はずとは言へ、過ぎし事も神の無窮エターニテイの懷にありて消滅せざる事實なり。此の故に吾人は時々刻々自己を神の前に宣告しつゝ行くものと云ひて可也。吾人の働作は現在なり。

「現在」のみ吾なり。過去は神のうちに入る。

十四日。

あらためて問ふ。吾とは何ぞや。

英雄崇拜は眞理の信仰に出づ。

宇宙に大道眞神在ます。故に英雄は崇拜するに足る也。自我は空のみ。是カーライルの眞理に非ずや。

バーンス、ウオールズウオース、ゲーテ、孔子、カーライル、クロンウエル、ボーロ、クリスト、マホメット、釋迦、ミルトン、シルレル等の文豪豫言者此の故に學ばざる可からず。彼等を學ぶは地上の神の默示を學ぶ也。天の心と地の人との如何に結合せられしかを學ぶなり。嗚呼吾これを得たり。

故に人其のものこれ神のものに非ずや。

眞の精神は眞の神に通ず。眞の精神これ哲人の精神にぞある。哲人英雄を學ぶとは此の精神を學んで自家の精神となすにあり。此の精神は一つ。要するに神は一つ。

信仰を希ふ。永遠の光を見んことを欲す。

此の命は幻にして神は眞なり。

幻なる地上の吾は眞なる神に入る。信ぜよ、神は善なり、愛なり、美なり。永久の命なり。

現象は幻なり、吾が魂は實にしか感ず。幻は眞の影なり。眞の神は凡てなり。

十六日、朝。

昨日は日曜日、午前中桐確太郎氏に書狀を出す。テニソンのイン、メモリアムを少しく讀みて多く思ひ付く。實に然り、愛！　吾をして或人を愛せしめよ、凡ての人を愛し得るならば、如何に吾が靈の聲を聽き得べきぞ。曰く不死！　之れ靈心の聲なり。

靈心の聲を信ぜよ。否、靈心の聲の外にして吾信ずべきものを知らず。

嗚呼神よ、神よ。

爾は聖なる希望を愛するもの丶心に充たしめ給ふ。

吾、吾が去りにし友を回想悲戀すること愈々深くして不死なる眞理を愈々信ずるに至る！　嗚呼イン、メモリアムを高歌したる詩人よ。吾未だ爾の感想を味ふ能はずと雖も、いさゝか此の消息を解しぬ。

オ丶爾！　上古千百年の昔の偉人、愛を以てすれば今吾が傍に在り。

十七日。

昨夜同志の諸子と舟を明月に泛べて相談す。則ち上京に就ての策なり。

朝鮮の事日に急なり。人間の事愈々意味あり。

十八日。

吾何を爲すべきか。これ昨日來吾が苦心する處なり。

政治か、宗教か、教育か、文學か、哲學か。

吾已に決せり。文學、而して美文、曰く小說、戲曲、好し。神よ。吾は未熟なる憐れのものなり。た

だ宜しきに用ひ給へ。されど吾はたゞ如何にすれば尤も神に服ふかを思ふのみ。而して尤も自由なる法、吾に適する法を欲す。

政治！　然りわれ政治を欲す。宗教！　これ亦實に然り。教育、哲學、皆亦吾が熱血のわく處。

たゞ思ふ。吾が素養と境遇、尤も何れに適するかを。神よ。神よ、吾たゞ爾を仰ぐ。凡て爾に在り。

詩人にもゆるし給へ。嗚呼默せんか。これ義務か。義務義務！　吾文をとらん。

吾源流とならん。吾光明を受けしに之を反さん。神よこれ人間の希望に非ずや。

詩！　詩！　吾魂にものあり。其の爆發の火口をもとむること急なり。詩！　詩！

來れ大絃小琴。宇宙人生の神風吹き來て吾にあれ。嗚呼吾、神に在らん。

世よ！　吾を品評せよ。何かあらん。

詩！　詩！　吾詩を得て古と未來とに住み、凡ての人と交はらん。

嗚呼、詩を以て、夕陽の童歌を描きたるの故を以て、世より捨てられんか。吾喜んで彼の童と共に世の外に埋れん。

神！　います。何かあらん、美と命と、神に在り。愛の在る處、神あり。

世！　世とは何ぞ。死！　死は來らん。

詩は吾の命なり。（午前）

嗚呼吾は何の故に此の平等の人間社會に在りて、平然として其の爲す可き部分を選ぶ能はざるか。極

めて非なる哉。

人間のかゝる事に迷うて苦まざることを得ざるとは。

吾南洋に生れしならば如何。吾は丸木船にのり廻りて、一生を送りたるなるべし。吾若し阿蘇山間の茅屋に生れしならば如何。應に危險なる噴火口に出入して硫黄採集に一生を送りたりしなるべし。

嗚！　人間の命運！　吾は幻のみ。

嗚呼吾凡ての吾に同情す。吾は凡ての吾たらんことを希ふ。凡ての人は神の作り給ひしもの也。

此の故に吾、詩をとらん。美文をとらん。吾若し吾が筆に依りて吾たらぬ他の吾と共に呼吸し得るならば、如何に幸ぞ。

軍人、商賈、農夫、漁師、古人近人、詩人、哲學者、政治家、宗教家、アゝ吾凡て詩神の交通に依りて爾等となりなん。

地上人間の命運。此の自然の無窮不思議。

オゝ神よ。吾これを視てこれを語らん哉。

嗚呼吾一つの神と凡ての人とに住まん。

一つの神と凡ての人！　アゝ然り。（午後）

嗚呼吾は吾がうちに迅雷の轟くをきく。（夜）

十九日。

昨日東京なる一番町教會より來狀あり。教會の現狀を報知せられ、夏日の炎暑を見舞はる。

直ちに返書を差し出し置きぬ。

今朝國元より夏蜜柑到着せり。

事業勞働等の訓言は、倦憊したる心靈には何の力もなし。嗚呼吾たゞ吾が上帝の光と、命と、愛とを信ぜんと欲す。吾顧みて心底に迅雷を聞き、精神浩然として仙化する時あり。

吾は盲目なり。見る能はざるなり。

あゝ凡ての人よ。

ひとりの神よ。不思議の自然よ。

二十日。

時！　嗚呼不思議なる哉時。吾が友は逝きぬ。

時は、彼と吾とを隔て行くなり。彼は如何に成り行きしぞ。昨夜之を思ふて痛感し、今朝今また「時」を思ふて迷はんとす。

時。ミルトン何處にある。吾が樂しかりし少年の時代、何處に行きしぞ。過ぎしものは消えしか。

嗚呼。過ぎたるもの消滅したるか。

「時」と「行爲」とは……

嗚呼吾不知。

カーライル曰く「時」のイリユージョンを拋てと。

然り然り。されど如何にして拋つ可き。

戸外を眺めよ、吾かく幽思哀感俯仰沈想する時に當りて、人々はおのがじゝ罵りさわぎてある也。

嗚呼。人とは何ぞや。人とは何者ぞ。

時とは幻ならば、地上の生命は幻のみ。

「永遠」は時の外にあり。「行爲」は消えず。一擧動、われは宇宙にきざむ。然り永遠に刻むに非ずや。

神よ信仰を與へよ。

たゞ信仰を。——嗚呼此の吾！　凡ての吾、人類は幻のみ。地球も何時か消えなん。消えよ。消えよ。

凡て形體持續の幻よ消えよ。自然これ幻か。

神、凡て神に在り。

嗚呼神よ。

二十一日。

昨夜月を斷崖の上に迎へ、悠々たる蒼空の色、寂々たる海面の光、凡て吾をして瞑想して止まざらしむ。

今日水谷氏より端書來り、其の三角港に遊びしを報じぬ。返書し置きたり。

吾は到底瞑想を續けざる可らず。

故に吾は到底讀書思考の生涯を送らざる可らず。

故に吾は到底文筆を執る業をなさゞる可からず。

希臘の歷史、ゲーテの文學。シェクスピーアの技術。

哲人義士個々の傳記。自然。印度の思想。「時」「愛」「不死」紛々として吾が感想を激昂す。

二十二日。

息想、信仰、豈に此の朽つ可き肉體に包まれたる一種の風にして止まんや。

神の美と愛と希望と。之を永遠の靈なる眞理として呼吸せざる可らず。個人を學べ。歷史を知れ。

二十三日。

天の下、地の上、ソール、各國各時代、人は樣々の形をかりて、其の魂の聲を放ちぬ。其の口により

て、其の筆に依りて、而して實に其歷史によりて。嗚呼人　一つの神に凡ての人！

何故に美術はよろしきか。

吾之を得たり。左の如し。

想は意のまゝに情を動かすものに非ず。

深遠幽玄の神境は天來なり。

然るに人直ちに自然に對して此の神境を得、人も欲する時は却て神境來るものに非ず。

然るに靜に他人の想を通じて再現せられたる美術に對する時は、却て俗思のまどはすなく、想像の翼

を張つて飄忽として神境に往來することを得る也。

術は吾人に不用意の際に美を示す。故に吾人は自由に其の美に打たるゝ也。

昨夜雨あり。今日雨あり。人再生の思あり、青稻蘇生の色あり。

昨夜凉風に乘じて宿處の主人等と語る。夜更けて雨をきゝつゝ一文を草しぬ。

二十四日。

暴風雨にして登校を止む。

放浪として一日を送りけり。

激浪を破つて游泳せり。

一休諸國物語を讀む。

過去現在未來！　嗚呼不思議なるは時かな。人は時の海に浮沈す。此の海や底もなく際涯もなし。時はイリユージョンに過ぎず。人間は全體なる宇宙の神の宮に在り。過去の人を懷ふ故に神を懷ふ。個人々々、深遠なる感想と別殊なる命運とを思ふ。

釋迦は如何、クリストは如何、ソクラテスは如何、若しくは秀吉は如何、將たまた大島尙三は如何、古川は如何。

夫れ個人を深感す、故に歷史を趣味す。

吾は吾自身已に奇異の思ひあり。

二十五日。

余が思想感情の世界が、其の絕えざる欝勃の聲を人知れず天地に向つて擧げつゝある時に、吾が周圍の世界は如何なる紛々の塵を擧げつゝあるか。

二十九日、日曜日。

吾が歸國の期は迫りぬ。

對淸事件にて開戰說紛々、朝野騷然たり。

二十七日の薄暮坂本氏にて馳走せられ、夜日置、關谷、高橋の三氏吾が爲めに送別の宴を開かる。夜やゝ更けて車に乘り歸宅。市街より桂港に至るの間里程殆んど一里。四方まことに寂然。車上瞑想して人生の流轉を思ひ老翁の事など思ひつゞく。

吾が職分は詩なり。吾は詩人の外、能はず。吾は偏へにたゞ天と人生とを思ひ、吾が凡ての感想は皆玆に歸着す。吾實に凡ての他の吾を懷ふ。懷うて或は涙潸然。故にたゞ〳〵此の他の新に同情をそゝがんために客觀の詩人たらんことを欲し、而してまた吾が胸間の信念欝勃たり。故にまた堂々立論、以てカーライル的文章を傳道の法に用ひんと思ふ。吾此の二途に迷ふ。迷ふを要ぜざる事なるに！

三十日。

昨日少年生徒九名を招きて晝飯を馳走し、半日を海水に遊び、少年等と共に面白く送りぬ。

夜教會に出席して感話す。

感話する處は此のタイムと人間の行爲との關係なり。

曰くタイムは幻のみ、吾人の行爲は實なり、宇宙はホールにして過去、未來、現在、凡てを包藏す。故に吾が一擧一動は宇宙に刻まれて存す、神は無窮の命にして吾が凡ては神に在りて現在なり。紛々として吾俗に迷ふ。瞑想して此の生と神とを思ひ、反みて衝心す。神にあらずして眞の友は誰ぞや。小我を捨てよ。嗚呼吾實に凡ての他の吾の地上の生命に同情す。神よ吾をして此の同情に適したる事業を執らしめ給へ。

八月

五日。

八月一日佐伯を出發して二日の午後三時半頃三ケ濱に着し、其夜は玆に一泊せり。

薄暮松山を見物す。

出兵の光景を目擊せり。

三日の午前十一時三ケ濱を出發して午前四時廣島に着し直ちに乘りかへて九時歸國す。

戰場の報しきりに到る。

ユーゴーのミゼラブルを讀み面白く感じぬ。

六日。

人默想する能はざる時は、不幸なる哉。

人實行する能はざる時は、不幸なる哉。

七日。

昨日朝吾家を出でて麻鄕村なる吉見氏を訪問す。恰も此近在の村社祭禮に會す。河手の老母、小川の老母等來客あり。夜に入りては男客數名あり。

此夜一泊す。

今日も吉見と東の兩家にて日を消せり。

實にこれ別天地なり。

否これ正しく眞個普通の生活的人類の狀態なり。

玆には日月眞に長し。否、玆に住む人はタイムを感ずること少なし。たゞ夕陽靜かなり。

玆には人類の歷史あることなし。否、玆に住む人は吾等の如き歷史變遷的感想あることなし。故に天地は彼等の天地なり。

玆は、眞に吾が瞑想のうちに形づくる世界とは自然に別天地をなす。吾蟬聲を聽いてこれを感ず。

此の別天地を主觀して、更らにこれを想像中に客觀する彼に於ては眞に人間生活なるものゝ、深遠幽玄なるを感ぜずんばあらず。

此の別天地は吾よりして別天地のみ。普通の狀態なり。

而して其の普通の狀態中には、其の實宗教的、哲理的煩悶もあることなし。たゞ夫れ日々夜々生活を

續けて生命に驅られつ生命を驅りつす。夕陽のうち、嘆聲長し。祭日笑聲高し。池邊の蓮花、朝な朝な開く。勿論此の世界は是、肉あり血ある人間の世界のみ。

罪もあり、不幸もあり、不德もあり、暗黑もあり。嗚呼然り、然れどもこれ歷史家、宗教家、哲學者の世界にあらざるなり。

されど不思議なるは人心の作用なる哉。吾若し眞に此の別世界の人民ならむには、吾決して是等の言を知らざるもの也。是等の感を懷く能はざるもの也。

然らば吾は要するに此の世界を詩的に視たる也。詩的に視る、是卽ち主觀的客觀的視するの謂ひ也。

玆に始めて吾が靈に於て視る也。

オ、人類！

八日。

佐伯出立前、數日以來、今日に至るまで十數日。淡々たる俗累に繫がれて、吾が胸底激昂の感慨は靜まりぬ。俗思俗情は吾を圍みぬ。炎々たる猛火消えて跡なし。

靜かに神に對し、徐ろに自然を視るの幽懷何處にか去りぬ。

時々の電光なきに非ざれども、要するに夫れ餘りに時々なり。

嗚呼願はくば吾に瞑想の時と場所とを與へよ。

十日。

事實は宇宙より消え去る者に非ず。

宇宙は全體なり。神は主宰なり。故に靈魂は不死なり。

これ吾が確信の一つなり。

昨日は今井君に與ふる書の第一節（二十枚）を淸書し了りて送付す。

怠惰！　嗚呼吾程怠惰を惡む者あるか。吾怠惰ならむよりも死せむことを欲す。怠惰の時間は吾にありて毒杯の如し。夫れ斯の如し。而かも不思議なる哉、世にも吾程怠惰なる者あるか。吾始ど怠惰に日を送る、而かも或者に魅せられたる如く、常に苦悶して安んずる能はざるなり。常に或る見るべからざる書籍を讀み居るが如し。

吾が精神は斷の活動を爲す。然れども吾が精神は吾を勉學に靜止せしめず。

十一日。

デイトン氏註釋ハムレットを讀み始め序文を讀む。

伊武雄氏の境遇、及び富永德麿氏の家庭などより、一編の小說を考案中なり。

玆に青年あり。貧しきなかを繰り合せて、東京に留學したり。留學中父歿しぬ。學費の道殆んど絕えたり。されど母は百方周旋して依然少しづつの學費は送る事を得たり。

母と一人の妹とは、極めて貧しく暮せども、住む家屋はさすがに昔ながらの門構へなり。母は青年の成業をたゞ一つの希望と爲せり。彼女は青年卒業の曉は直ちに月給を得ることゝ心得居たり。

青年は文學に志しぬ。彼の思想は次第に世の普通より遠かりて遂に多少厭世思想を養成したり。されど尙ほ彼は青年なり。母と妹とを思ひては斷腸せり。

其のうち彼は病を得たり。病は肺患なり。不起の病なり。

彼は遂に養生の爲め歸國せり。母は殆んど絶望せり。されど尙ほ母は愛の母なりき。

貧は次第に迫りぬ。而して青年の病も次第に迫りぬ。

青年は遂に狂せり。文稿を抱きて、狂死せり。吾ならぬ自然の不思議なる程、此の吾ぞ不思議なる。

人生！　實に不思議なる哉。

山中の日月長くして生活いとゞ平和なり。されど人々互に生れつ死につす。人生は如何なる時、如何なる場所にも不思議なり。ピラミッドは過去の人代を回想せしむ。過去の人代何處にある。否、吾が人代遂に何處にあるぞ。

實に願はしきは人生の不思議を明瞭に解したきことなり。

億萬の人此の願に死するとも、他の億萬何處として此の願を續けざらむ。これ最初の事實なればなり。

信仰なる哉、信仰は知る能はず、されど唯一の慰安なり。勇氣なり。希望也。

人生は不思議なる哉。

十三日。

人生に不思議を感ずるの情は屢々色々の事情にて減ぜられたりしが今や凡ての事實、事情、見聞は悉

く此の不思議の念を增さしむるのみ。

嗚呼人生、人間の天地に於ける生活！　實に不思議なり。不思議と思ふ程愈々不思議にして不思議と思はぬ人あるによりて益々不思議なり。

十五日。

人は境遇の支配を免るゝ能はざるなり。

到底人は神ならぬ魔力の支配の下にあるなり。

嗚呼、人生は不思議なる哉、血涙なる哉。

盂蘭盆に際す、昨夜坪井町に盆をどりを見物す。

昨日今日ハムレットを讀む。

見よ見よ、彼等は踊りて暮すなり。彼等の世界は一村落、一市街なり。今夜盆をどりを見物す。

嗚呼斯くの如くして幾多の時代は經過せり。

人生は轉換したり。嗚呼人類夫れ自身不思議なる哉。

嗚呼全智全能の上帝、愛は君のものなり。永遠は君のものなり。

人生！　美、愛、戀、善。

十六日。

人生は不思議なる哉、嗚呼人生は不思議なる哉。

イエス、クリストあるが故に不思議なり。カーライルあるが故に不思議なり。而して盆をどりに夜を明かす人あるが故に更らに不思議なり。たゞ〳〵不思議といふ外あらざらしむ。

嗚呼此の不思議を解くよしもがな、とくよしもがな。

十七日。

昨夜岸の下に盆踊りありて、夜更けまで、村女達のはねくり廻るを見物したり。

朝、忽ちにして午後、而して夜。此頃の一日は矢の如く空過す。

昨日午後一時少し前、收二と共に琴石山麓の山家點在せる邊りを散歩す。溪流に沿うて山路を辿り、松林に入りて山腹を横ぎる。サコンタを止めて水に浴し、路傍に沿うて棗を盜む。山寺に入りて僧の眠りを驚かし、犬に吠えられて笑つて石を投げつく。田をめぐり、森を望み、遙かに海水の漂渺たるを眺めなどして、盛夏日中思ふまゝ吾が愛する夏を樂みたり。

ハムレットの第一齣を讀み了りぬ。

無窮の時間、無窮の空間に包まれたる人生は實に不思議なり。無窮の時間と空間が人間の思想に不思議と認めらるゝ限りは人生は不思議なるなり。

嗚呼タイム。凡てのもの此の永劫の海に浮沈生滅す。

嗚呼幻なる哉、時！　昨日昨夜何處にある。凡ての過去何處にある。吾！　これ幻なる哉。嗚呼吾の生存を感ず。

此の現存する吾！　此のタイム。此の無窮！　知らず、相關するの深意は如何。

此の不思議に光明を投ぐるものは何ぞや。吾之を欲す。實に之を欲す。

十八日。

嗚呼日淸の間に戰爭は起りぬ。

東洋に於ける二大國民は殆ど生死の衝突を始めたり。

血を異境の土神に供する兵士あり。涙を茅屋の隅に呑む寡婦あり。嗚呼戰爭は開かれたり。

知らず歷史の眞意、上帝の攝理の存する處如何。吾知らず、吾知らず、たゞ上帝の知識を信ず。歷史の眞意、上帝の攝理の存する處如何。吾知らず、吾知らず、たゞ上帝の智識を信ず。

吾は此の國民のために必ず深遠雄大の聲を放たざる可からず。これわれの義務に非ずや。

嗚呼吾等同時代の人間！　百年の後皆墓中の人たり。

ウォートルローの英雄たち今何處にかある。カーライルも何處にある。嗚呼皇天！　無窮無限の皇天！

皇天！　皇天！　希くは吾に心底透徹する光明をなげ給へ。吾反射せむ、吾反射せむ。

人は動く。見よ人は動く。國民は叫ぶ。民は戰ふ。

而して人は踊り、人は笑ひ、人は生活す。何ぞや。何ぞや。

人類！　此の無窮に包まれたる人類！　爾の生存はこれ何ぞや。吾存す。嗚呼此くの如く呼吸して此く感情を馳せ、思考を馳せ、此くの如く此くの如き天地に生存す。而して此の天地のうちに死して土

に入る。

皇天！　此の天火の不思議をとき給へ。此の永劫の不思議をとき給へ！　知らず、吾知る能はず。信ぜよと吾は叫ばん。浮動して輕轉する此の感情！　嗚呼吾は怒り吾は泣き吾は火を呑み水をくゞり地を蹴る。

來れ無形のあるもの。語れ過去と將來にすむ無形のあるもの。

幻か幻か。皇天！　凡ての幻か。戰爭も幻か。

現在！　神よ、救ひ給へ。此の苦悶を。

嗚呼神よ、吾は此の聖なる寶を信じ此の生存を確信す。否な吾生存す。國民人類生存す。これ幻にして神の事實なり。不思議なる事實なり。然り實に幻の如き事實なり。されど事實なり。

神よ御身が投げ給ひし人の心の光を信ず。嗚呼人の情の光を信ず。永遠の命を信ず。萬法の御心を信ず。

嗚呼皇天！　此の一身一靈を爾の光榮ある用に供へ給へ。吾此の用を信ず。義務！　と吾は叫ばん。

神聖なる永遠の神の宮に天の光を享く。

皇天、感謝す。吾に希望あり、慰安あり、勇氣あり、活動あり、滿心の元氣あり。

嗚呼、吾は知る能はず、故に吾は信仰に立ちて戰士の如くに進まん。嗚呼此の一身一靈の命運は、凡ての人類の命運に非ずや。人！　決して差異なし。

一身一靈の生命其のもの吾口言ふ能はざる神聖と不思議とまた恐怖とを感ず。

二十二日。

十九日は河手忠氏より端書來り來遊を促す。すなはち大野村にゆく。此の夜一時過まで談話す。河手氏問ふ、宗教の必要とは何を意味するかと。吾これに答へて人生の不思議を語る。二十日は伴武雄氏の宅に暮しぬ。其夜一泊。二十一日は伴氏と共に瘤郷村にゆき、余は吉見を訪問す。女主人不在。薄暮われ歸宅せんとす、たま〳〵河手氏來り。女主人も亦歸宅す。則ち一泊す。

本日は吉見氏の宅にて伴氏布浦氏等と語り、午後六時すぎ漸く歸宅したり。

不在中、今井、富永、大久保氏等より來狀。

德富氏より端書來る。

伴武雄氏の宅にて早稻田文學の一冊を繙きしに、たま〳〵吾が友金子馬治氏がものしたる、「新文豪」てふ文章ありて、其のうちに米國詩人ホイットマンの詩想を紹介せり。吾之を讀みていたく感じぬ。憶に吾が意を得たるもの也。上京後は金子氏に面して此の詩人に就き更らに學ぶ處あらんとぞ思ふ。

人生は神聖なる不思議なり。かく感じ得るは幸なる哉。而して哲人詩聖巨く其の精神に於て此くの如きこれ也。

二十三日。

午前九時十七分筆をとる。

久しぶりにて曇天雨模樣、少しく降りてまた止みぬ。降れかしと人を祈るものを、降るなるべし。

過ぐる四日外出の間の事を猶ほ憶ひ起しては玆に書きつけ置く。

昨日午後、綾孃（八歳）春孃（十二歳）を伴れて八海川の潮さす處の深みに游泳せんとて出でゆき、面白き無邪氣なる一時間を愛しぬ。

一昨日の午後、日已に西に傾きて野に夕陽みつる時獨り吉見氏を出でて、近傍の山路をたどり野邊を行き、遂に高伊山に登りぬ。三年の昔玆に多感の月日を送りし事もありきと思へば、また多少の感なきに非ず。女郎花を摘みて歸り、一束にして吉見氏の池にさし置きたるが忘れて歸宅したり。

吉見の庭に白萩咲き亂れ居たり。

河手氏の庭の蜜柑累々として實り居たり。

山より落つる用水の筧の水へりておつる音かすかになりぬ。棗亦實りて已に半ば熟し居たり。葉鷄頭の葉已に其の美しき線をかざせり。柿も今年は今より後風さへ吹かねば豐かなるべしと思はる。嘗て餘りに朽ちたりし湯殿新築せられぬ。

せつ女今年は二歳（去年の正月誕生）、已に言語を解して亦自から廻らぬ舌にて何か言ふ。小兒は觀察すればする程愈々面白し。小兒は如何なる小兒も實に天使なり。實に天使なり。決して無智と言ふ勿れ。哀れ氣の毒なるは伴君の母びとにぞある。聞く、伴氏に嫁して間もなく破産し其の後夫婦非常の節儉をして漸く産をなしたるに復も夫なる人すなはち武雄君の父なる人の突然なる疾に斃れて後に負債山の如く遺されたり。玆に再び破産したり。武雄君の留學費は兄なる良輔氏が小學校の教師をつとめて

得たる俸給をさき、また親族より幾分の補助を受けて僅かにこれを給したりし也とぞ。然るに今や武雄君將に專門學校文學科の業を卒へんとして遂に肺疾にかゝりぬ。母びとの情如何にぞや。あゝ此の哀れの母の心いかにぞや。吾母なる人を見るに其の面色土の如く言ふ可からざる憂愁の色を帶びたり。河手氏曰く此の婦人の憂色は今に然り、以前より然りと。然らば今や憂の上に憂を加へて更に深く色にこそいでしならめ。嗚呼世には斷腸の人多し。武雄君と語るうち、ふと心に思へらく、われ今、此の友此の病める青年と語れども、此の人は殆んど不治の病魔に其の爪端の一角を打ち込まれたる事ゆゑ、何時生別の外の悲慘なる別れを告ぐる事も或は一兩年のうちにあるを保せられず。

然らば此の語る吾が友今は生くと雖もこれ土となる可きもの也。かく感ずる時、友愛生死さま〴〵の深き魂の激動起りたり。

志ある青年の病みて貧しき程哀れなるはなし。嗚呼青年！　其の前途の希望をもつて其の熱血の奔流を懷きて、すなはち墓中に入る。吾泣かざらんと欲しても得ず。

吉見春孃は地上の人にあらざるが如し。山林の女神特に野花の露をあつめて此の少女の胸に吹き込みたりと見ゆ。玲瓏として玉の如く、決して塵間のものに非ず。妹なる綾孃に對して親切友愛注意周到なる、實に傍より見ても涙のこぼるゝ程なり。曾て僞を知らず、曾て飾を知らず、曾て虚榮を知らず。

綾孃今年の春より始めて小學校に通ふ事となりぬ。校舍は山路をたどりて十數丁の處に在り。春孃よく妹をつれていたはりはげましてゆく。春孃今年高等二年となりぬ。席順は常に一二の間に在り。吾

傍より此の少女が事を務むる樣を見るに常に靜平にして常に主一なり。成就せざれば止まず。自から學ぶ時に當りては傍に姉と妹とが嬉戯するも更らに頓着せざる也。

二十四日。

「吾が知る少女の事を記す」てふ文を草す。家庭雜誌に投ぜんとてなり。吉見春孃の事を記したるもの也。

海水に浴す。

薄暮より今十一時四十八分に至るまでの吾が時間を空談に費す。

吾は馬鹿氣たる境遇に適せず。

二十五日。

昨日水谷氏に返書す。家庭雜誌に投稿す。序に塚越氏に送書す。石崎ため吾に訪問の難きを報ず。

今日國民の友來り夏期附錄あり。

流寶錄。靴師、司馬江漢の世界觀等を讀みぬ。

嗚呼人生の不思議天地の玄妙なることを感ずる時に當りて此の心魂を衝動せしむるものは何ぞや。涙と共に瞑想默契の慰安に至らしむるものは何ぞや。戀愛もこれなるべし。されど吾未だ其の眞消息を解せず。美景は是なり。歌聲はこれなり。

吾未だ忍耐の眞味を知らず。

不思議なる哉吾！　吾は吾に最初最大の不思議に非ずや。

二十九日。

無限てふ不思議に包まれたる人生は如何に思ふとも不思議たるをまぬかれざる也。

天地萬有も不思議なり。生死の法も不思議なり。否、日々の普通の生活も不思議なり。

吾は不思議を感ずる事愈々痛くして、神聖の感次第に加はる。樂天か厭世か吾これを知らず。

只生命存在其れ自身を神聖に感ぜずんばあらず。

吾が年齡も已に二十四歲、一日一年は矢の如くゆく。未だ生命のうち眞に無窮の命を痛感する能はざるが故に、吾が前途の次第に切迫するが如くに感ず。不變永久の絕對なる神吾に在りて甚だ不確なり。

一秒一秒そこに神あるを感ずる能はず。

されど吾は遂に進歩す。

三十日。

昨日今井忠治氏より來狀、佐伯なる少年生徒の中より來狀。

吉見氏より來狀、今井氏は特に「富山行」を送る。一昨日攻壘てふ小軍歌を作りて讀賣新聞に投ず。

九月

一日。

本日午前伊保の庄なる黒島に散歩せり。

黒島とは名のみにて、今日は島に非ず、一小半島なり。されど曾て島なりし事明かなり。松樹茂り斷巖白砂の風景を兼ねて夏日の游泳には最好の處なり。

風景絶佳、而白き散歩なりき。歸りは小舟の便をかる。

何故に直ちに此の神聖美麗なる天地にすまざる。これ吾が痛感する處なり。

神に依りて、故に神のために。

『怠慢』。これは最後の惡德なることを知る也。

經驗とは何ぞや。

人間の過去は上帝の現在なり。

吾は沈思瞑想の時を愛す。吾は沈思瞑想するを得ば幸福なり。活動！　沈思瞑想は、靈なる活動ならずや。

二日。

佐伯より電報來りぬ。彼等は出立したる也。明夜は吾も上京の途に上るべし。遲くとも明後夜は。

吾心の中に期して曰く、已に是等の青年を率ゆ、如何なる事ありとも失望的言行ある可からず。如何なる事ありと雖も薄志弱行なる可からず。嗚呼神よ。大なる全能なる神よ、常に汝の前に在りて是等青年を率ゐしめ給へ。

彼等をして剛健なる義人たらしめ給へ。

嗚呼吾をして人を愛せしめ給へ。神よ。

四日。

汽船中にて此の筆を執る。

昨夜岸の下港に乘船して今朝宇品港に着し宇品に於て富永、山口の兩氏と會し、再び乘船して大阪に向つて發す。

今は午前十時其渡航中に在り。

同行約束者の中尾間、並河の兩氏は故ありて吾等におくれたり。

昨朝伴武雄氏來遊し終日滯在、岸の下港まで見送られて、吾は氏と埠頭に別れ、氏は吾が家に一泊の都合にて去る。

昨夜吾を送りたる者十數名。

送るものゝうち女子二人あり、嗚呼他生の緣！

一樹の緣は永久の涙、一着の天は無窮の色。一昨夜吾此の二女に關して幽愁の涙をふるひぬ。事實は左の如し。

吾が父母、吾が兄弟の未だ佐伯より歸省せざる殆んど一箇月の前姫田なる家を去りて、柳井町を少しく隔たりて海に近き宮本てふ處に轉居したり。此の借屋の本家は隣家の餅屋なり。

此の餅屋は宮本の三角餅とて名物なり。

此の餅屋は主人夫婦に老母一人、他に二男二女ありて七人の家族をなす。されど此の二男二女共に主人夫婦の子女に非ずして悉く姻姪に當るものなり。然るに此の二男二女も亦兄弟姉妹には非ず。二男は兄弟なり。長は二十歳ばかり次は十五歳。二女はいとこ同志なり。一女は岩と稱して十九歳、一女はきぬと稱して十六歳。共に此の家族に加はりて勞働するもの、其の父母たちは或は死し或は破産し、彼女等は不運のうちに叔父叔母の世話を受けつゝあるもの也。

此の混合家族は不思議なる程好人物の集合なり。彼等も義理的關係なれども、血緣的同感を有し、互に愛交す。孫に主人夫婦はめづらしき好人物、主人は品格ある四十前後の丈夫なり。一家族悉く勉勵なる勞働者、一人の老母を除きて。

此の如き家族を本家とし隣家となす事ゆゑ、吾たちまち親しき交を結びぬ。夏の夕暮吾は談話の主人となりぬ。盆踊は二女と共に見物したり。

若き男女の間には言ふに言はれぬ緣を來たすものなり。其は明白なる擧動に現はれずして一言のうち一笑の際に已に永久の涙を價ひするの緣あらしむ。

吾此の二女等と一度別れんか、決して何時遇ふとも期し難き互の境遇なる事を知れり。

天地悠々として轉じ、人生日月と共に逝く。相遇ふ何の緣、相知る何の緣、相思ふ何の緣、吾は彼女たちの戀愛の呼吸をさとりぬ。嗚呼これ可憐の極に非ずや。

せめてはと思ひ、ハンケチ二枚を求めてひそかに彼女等に送らんものと、一昨夜其の機をまちぬ。夜更けて機失す。獨り燈下に人生逢遭の緣、愛戀の情を思ひ、悠々の天地を感じ來れば幽愁の涙止めんと欲して得ず。此夜風荒くして雨戸笛の如く響く。これ悲しき夜なり。

吾已に此の二女に別れぬ。哀れのソールよ。永久に榮えよ。神よ彼等を守り給へ。神の宮に永久に生きん。

昨日午後に及びて石崎ため孃來訪す。自らの身の上の不如意を訴へ、且姉なる霜氏の目下の不幸を語る。此の世は涙を飲みて生くる處なるが如し。

吾この孃のため、上京の上は盡力して見んと約束せり。

午後五時再び筆を取る。

人生愈々經驗して愈々不思議と感ずる也。近來吾が見聞實踐したる處吾が心に映じて互に相對照し來るが故に、宇宙の不思議（ミステリアス）の愈々幽玄神怪の色彩を帶び來るを覺ゆ。

六日。

東京の旅館に於て此の筆を執る。

五日午前三時大阪川口に着船し、それより直ちに待合所に到りて、夜の明くるまで休息したり。

夜明けて人力車にのり、中島なる旅人宿に投じ、玆にて朝食を了り、直ちに四人相伴うて大阪城を見物せり。

其日の午後一時四分發の上り汽車に乘じて彦根まで來りて茲に下車し、大久保氏を訪ひ氏に誘はれて彦根城を再見す。蓋し此のたびは收二等のためなり。

六日卽、今日の午前三時上車、東上の途につき、午後六時半着す。雨漠々。人々を導きて銀座街頭を歩み歸り之を記す。(十時三十五分)

七日、雨漠々。

本日午前、吾獨り車にて麴町に來り、今井氏を訪ひたれども不在なりし故、下宿屋を定めて歸館し直ちに三人を伴うて茲に移轉す。茲とは麴町三番町九番地なり。富永氏を伴うて神田を散歩す。夜再び今井氏を訪ひ、久しぶりにて談話面白かりし。

八日。

今朝只今德富猪一郎氏を訪問したれども不在なりし故歸宅して直ちに此の筆を採る。人生は不思議なる哉。

見よ見よ、吾も亦生活の道に迷はんとするなり。紛々として大都の生活を見よ。

紛々茫々として宇宙暗し、たゞ信仰あらしめよ。

吾が在る處此の無窮不思議の宇宙にして而して吾が住む處は此の紛々たる人の世なり。嗚呼道は何處に在る。光何處にある。希望何處に在る。吾何を苦心するぞ。何故に苦心するぞ。

十日。

吾が身自身が則ち人生の不思議其のものなるを感ず。吾が身自身の見聞、遭遇、經驗は悉く悉く吾が心に再現せられて、煩悶瞑想感慨の種となる。

昨日午後、牛込を散歩し、貸家を探す。

昨夜亦德富氏を訪ひたるに不在。

今日午後金子馬治氏來る。伴ひて氏が宅に行く。

今夜中桐氏に書狀を出す。

十二日。

十二日は一時間を餘すのみ。

吾等六人は昨日を以て茲則ち牛込南榎町に轉居したり。パンを以て自炊の生活を始めたり。今日は昨夜の暴風に引きかへて晴天白日なりき。德富氏より電報來り、六時社にてまつと申し來りしかば直に車を飛ばして到れば德富氏未だあらず、漸くして來る。曰く直にこれより社員一同と共に馳走すべしとて某西洋料理店に導かる。

滿室社員なり。

今夜の光景及び吾が感想は、明日の記に書くべし。德富氏と相談の上、兎も角も民友社に出社して手傳ふ事に致しぬ。

氏は明朝の一番汽車にて廣島に向けて出發すべし。

久しぶりの明月、山間の茅屋に在りて眺むるを吾は幸とすべし。都の月は虚榮の月となるべき恐あれば。

十三日。

冷然たる批評よりすれば、今や吾が靈は何となく其光明の力を失ひたる心地する也。

されど然らす、吾は進みつゝあるなり。

嗚呼此の我。此の人生。吾は徒らに激昂す。吾は希望なき道を歩みつゝあるが如く、又或者に鼓せられて進みつゝあるが如し。

吾は昨夜新聞記者たちの意氣軒昂の情況を見たり。彼等は脇目にも活世界に躍りつゝあるが如く見ゆ。彼等は全世界の歴史が日清戰爭に關するものありとして論じ、全力をこめてはたらく可しと誓へり。活氣、殺氣、和氣、室内に滿ちぬ。

德富氏は立ちて演說したり。

吾が血は燃え立ちぬ。活世界！　活世界！　大丈夫將に大に手腕を振ふの天地！　當時當代、今玆ぞと思ひぬ。かく思ふ時に、上帝の眞理と、人生の意義と、活世界の活動とが互に相和せられたる如くに感じぬ。火の如き感情は泉の如く、吾が心に流れ込みぬ。

ガス燈の光は燦として室内晝の如し。吾が前面に倚るものは人見市太郎氏。山路愛山氏。中村修一氏等なり。

吾が左に山川氏を隔てゝ直ちに德富氏あり、德富氏の左に金子斬馬氏あり、其左に竹越與三郎氏あり。竹越氏に對して久保田金僊氏あり。社員はのこらず集められ、其數恐らく三四十人ありしならむ。談笑の際階を昇りて入り來るものあり。

拍手を以て、人々之を迎へぬ。顧みれば、これ深井英吾氏なり。面目秀麗身に黑の質素なる洋服をまとひぬ。

是れ實に年少氣鋭前途有望の好青年。

彼は今夜送別せらるゝもの一人なり。

彼は聖輦に先だちて西、廣島を指して發途し、道々の光景を報ぜんとするもの、今夜九時五十分の汽車に乘り込まんとす。

吾は彼を羨ましく思ひぬ。彼は中村修一氏の右に座を占めたるが故に余と斜めに相對せり。余は彼を熟視したり。彼はそは〳〵として足をふり體を動かしなどして其のとがりたる鼻とキヨロ〳〵したる眼とを敏捷に回轉しつゝ居たり。

信なる中村修一氏！　めづらしくもなき修一氏はめづらしくもなき無頓着、沈默にしてとぼけたるが如き顏つきにて始終皿のうちのみ見つめ居たり。

宗教！　信仰！　ウォールズウォース、此の如き題目は此の如き室内には冷笑し倒されんず光景なり。

宴散じて家を出づれば街頭車馬の音は將に日本の中心京橋市街の喧轟なり。月皎々として天上にかゝ

りぬ。

民友社樓上、客散じて余と德富氏と愛山君と金子氏と湯淺氏とのころのみ。愛山氏机によりて高談す。昂然として壯語すらく、天下英雄なし。然り眞に英雄なしと。

德富氏と應接間に談じて別る。

歸路の月寒し。車上の秋風已に身にしみて氣しきりに昂る。

されば吾車上に山林の生活を想ひて淸き情風の如く吾が懷に充ちたり。吾豈に人生の外に立たんや。世は活動す。吾もまた活動す。生活！　生活。人間の生活を離れて豈に別に政治、宗教、哲學の題目あらんや。

嗚呼人生！　人生。此の吾は大なる吾なり。

天は我をして種々の經驗を積ましむ。

八月一箇月の柳井村宮本の生活！

昨年十月より今年七月まで佐伯十箇月の生活。

今またパンと水との生活！

今朝　天皇を宮城の前面にて其の新征を送り奉りたり。帝者の壯！　ナポレオンを羨みたり。嗚呼帝王！　帝王！　これを羨むの吾は亦山林の生活を羨む。吾は不思議の心を有す。

嗚呼神樣と自然と人類。吾は此の外の警句を知らず。都もひなも貴きも賤しきも吾に等しかれ。

クロンウェルは吾に解すべからざるか。ウォールズウォースは吾には解すべからざるか。テニソン、トルストイ、吾に解すべからざるか。ルーテル、ダンテは吾に解すべからざるか。

直ちに此の人生を解する、これ哲人を解し得る途なり。されど哲人を解し得んか、人生の眞趣も亦自ら是等の明鏡を通じて吾に來らん。吾は直ちに此の自然と人生を觀、同時に前哲を觀んと欲する也。

十五日。

吾哀々として人生を思ふ。

世界觀は哲學者の說明を得て吾其の偉靈に打たる。

されど悠々たる人生を思ふ。茅屋の戀の少女を思ふ。遠島の孤兒の運命を思ふ。夕陽に眠る山村の生活を思ふ。宮本の二少女達を思ふ。嗚呼人生々々。吾は哀の情に堪へず。

生活は義務なるか樂しみなるか。咀なるか。生活々々、人間の生活の眞趣は如何。

『宇宙は不斷の進步なり』哲學者と詩人とは言ふ。されど人間の生活其のものを痛感する吾には未だ活泉の如き命を有せず。生命其のものこれ神聖に非ずや。吾は神の終極の愛を信じて始めて此の生命を此の不思議の天地に保つを得。

嗚呼吾が靈は神の靈と人の靈とに通ずるを感ず。

十六日。

人は人と天とに對す。

昨日午後の事及び今日の事を記するに先だつて此の感を記しおく。

（午後八時三十六分トルストイめをとを讀む時）

何故に人は此の天地の玄妙不思議に對して無感覺なるに立ち至るだらう。

（八時四十五分）庭に出で月を見て、月の前に白雲の自ら浮動するを見て感ずらく、

嗚呼吾は人と自然とに對す。吾は人と自然とに關す。見よ自然を。これ爾の上下左右過去將來を包むものに非ずや。自然は何者ぞ。

昨日午後民友社に至り人見一太郎氏と相談の上愈々明日則ち月曜日より出勤することゝなりぬ。

今日午前教會堂にゆき松村介石氏のわけの解らぬ說教をきかされ、會堂にてパンを食うて晝食をすませ、午後は神田なる基督教青年會館にて開かれたる松村氏の講話をきく。事は朝鮮支那に關す。

明日より愈々民友社に出席して活動世界に入り布衣の宰相を以て任じて以て「政治」を知らんと欲す。

吾は此の際、山林獨立の生活の自然、神聖なるを感ずるなり。

昨日父上より來狀、直ちに返書を出しおきぬ。

今日市山に書狀を出す。

吾は詩人たる可きか、實際家たる可きか。民友社にありても我は眞面目につとめん。吾は到底詩人たるの外能はず。つら〳〵思ふに吾は新世界の豫言者たるべき任を有す。

十七日。

本日始めて國民新聞社に出勤す。

本日、平壤陷りたる報に接す。

吾既に新聞社に入る。つゝしみて其職に當るのみ。

已に新聞記者の仲間入りす。將に理想的新聞記者たるべし。

三十日。

昨夜中桐確太郎氏に發書す、氏が父君俄に病みて死したればなり。愛は不死を敎ふと申しやる。

河手忠氏に一書を出したり。

今朝少士官の一文を草して國民新聞に載す。

今朝忠治氏を訪ひしにあだかもよし氏の弟なる右次氏、出陣のため暇乞ひに歸宅したるに遇ふ。晝食を氏の宅にて馳走せられて出社す。海軍大勝利の報に接しぬ。（民友社樓上）

路傍の人、凡て見接する所の人に對して、何故に兄弟！　てふ感情起らざるか。彼の天、星、空、若しくは地上の山川草木に對して、何故に嗚呼吾が大なる自然よとの感情起らざるか。

小我、小我。人は小我の頑迷に陷りたる以上は容易にこれを逸脫し得るものに非ず。若し夫れ天を指しては弘大無邊なる吾が自然と呼び人を見ては吾が兄弟よと言ひ、而して全能の父よと叫び至らば如何に彼は幸なるべき、大なるべき、全かる可き。一生を此く送り得るならば其の事業とか職業とか方法とか凡て何の關はる處なけん。

嗚呼吾常に如何に禱る可き。

曰く、自然に眼を注がしめ給へ。曰く、凡ての人を兄弟と呼び得るに至らしめ給へ。

二十二日。

昨日は社用を以て海軍省に至る。

社用を兼ねて德富氏に書狀を發す。

昨日國元より書狀來り母上負傷せられし由、昨日民友社の發送掛りに富永尾間の兩氏を推擧したる處、直ちに採用せられて昨夜より執務。竹越氏より支那論一部をもらふ。

嗚呼人間の一生！　森を友として送るも一生！　編輯樓上に送るも一生！　文壇に立つて筆を採るも一生！

一生！　生れたるものは死す。吾は死す。而して凡てのもの死す。而して天地に生命充つ。

昨夜の雨晴れて今朝、見よ、秋空透徹、灝氣空にみつ。綠色猶美なり。思を岩城山麓高叫山に馳す。

嗚呼父と母、彼等は子を愛するの外に此の生命の希望を有せず。而して若年の少壯は野心の爲に苦悶す。愛を命となすものは幸ひなる哉。

二十四日。

街頭の雨蕭々と秋冷身に沁みて冬の近きを覺えぬ。

二十二日の夜は當番なりしかば民友社樓上に眠る。電報しば〳〵來りたり。されど遂に號外を出すに

も及ばずして止みぬ。

半夜忽然夢さめて頭を擧ぐれば秋の夜半の月漸く昇りて其の青光を塵にまみれたる玻璃窓になげ、おぼろに吾が枕頭を照らしぬ。東京大都の中心、京橋區も今や寂々として聲なく、たゞ隣室の柱時計の秒聲のみ響く。風窓外の桐葉を鳴らしては止み、止みては鳴らす。

昨日は日曜日、午前九時二十分民友社を出でて一番町なる教會堂に出席して植村正久氏の演說をきく。今日の時勢の意味に就き說く處あり。日本をして再び精神的大潮にむちうたしむる今日、支那との戰鬪、我が國大勝利の時にあり。日本をして日本の傳道をなさしむるも今日なり云々。

午後牛込より麴町區三番町二十六番地に轉居す。今井忠治氏の隣家なり。

時勢！　歷史！

二十五日。

時勢歷史。

されど吾山林を忘るゝ能はざる也。

二十四歲！　碌々として朽ちなんとす。信仰あるにあらず、學識あるに非ず。嗚呼吾は此の吾は空しく老いんとはするは也。

今夜今井氏と共に久しぶりに綾之助の義太夫をきく。美感にみたされたり。

プルタークの英雄傳を讀まんと欲するの念起りぬ。

理想的天眞の美少女を詩歌に詠まんことを希ふ。

戀の深き消息をくみたし。

人生は徹頭徹尾不思議なり。

二十七日。

昨夜は田村氏同道の積りにてアームストン曲馬を見物に出掛けたる處、田村氏不在なりしかば獨り行きぬ。切符は國民新聞社の通用切符なるが故に費用はいらず。

今夜は今井君と共に行きたり。

今朝はアンナカレンナを讀む。

昨日並河半吉氏吾等より別居せんことを申出づ。爲めに吾も彼との交を絶つに至りぬ。

二十九日。

昨日は風邪の上に頭重かりしかば民友社を缺席せり。

昨日並河氏終に去りたり。

昨夜祈禱會に出席せり。

昨夜アンナカレンナを讀みて夜半に至りぬ。

昨日は大に「自然」を考へ、「自由」を懷ひ、終に自由の歌を作りけり。而して又ウオールズワオースの「チンテルン」精舍の詩を讀みたり。

十月

二日。

午前十時二十分より今此の筆をはじむ。

今日は一昨日昨日の秋雨そぼふりて不快なりし天氣に引きかへて、一天晴れて蒼空すみ渡り、日うららかに輝きて、心身の暢び〳〵する心地する也。

一昨日は日曜日、(九月三十日)午前十時教會堂に集まり、植村正久氏の說教をきゝぬ。說教の題は「祈禱」なり。クリストイエス、ケツセマの祈りを引證して大に祈禱の靈界に重き所以を說きたり。吾甚だ此の說を贊す。正久氏曰く、祈禱なくんば宗教なしと。眞に然り、眞に然り。宗教の意義だに明かにするを得ば、祈禱を拒むべからざるを見る也。

此の日午後田村三治氏來訪せられたり。四時頃民友社より手紙來り出社をうながしぬ。

蓋しこれ、吾を招きたるにあらずして尾間氏にあてたりしもの、されど宛名は吾なりしかば吾も直ちに出社したり。

德富氏歸社して在りたり。

其の夜、社樓に一宿せり。半夜電報來ること頻々、半眠半醒のうちに冷衾を被りて一夜を明かしぬ。百感胸にみちたり。

昨日は全く社樓に費しぬ。夜編輯會議ありたり。德富氏曰く、本社の運命を此の先十箇月に睹し、思ひ切つて金錢を用ひて見んと。

夜やゝ更けて歸宅の途につき途上百感むねにみちぬ。

昨日人見氏と語りたる時、人見氏の曰く、君海軍の通信者となりて軍艦にのり込まずやと、吾これを諾しぬ。百感胸にみちたり。

「生と死と信仰と運命と事業と」

嗚呼人生の問題は吾が此の際の經驗のうちに解かるべし。

吾何故に軍艦に乘込み、生命の危險を冒して迄、吾が目的ならざる新聞社の用に應ぜざる可らざるか。また吾何故に生命を自然にまかして安んぜざるか。まかしては如何。吾が天職とは何ぞや。

何時死するも可なるに非ずや。

山林自然の自由を攫むは吾が權利に非ずや。

一死、如何にして死するも可！

嗚呼吾が心底の不屈なる意地强き主義は、此の世界に不平にして寧ろ吾に死の自由をすゝむるに非ずや。バイロン！　吾が血はわかざるか。ウオールズウオース！　吾が靈はまた戀ひ慕ふ。

吾が一生何ぞや。

戰爭に死したる軍人は如何、

死！　宇宙は生死に轉々發展す。嗚呼此の宇宙！　嗚呼神の宮！

死はうれしき言葉に非ざる乎。

嗚呼自然！　自然！　如何なる場合にも吾が靈の自由を守れかし。吾如何なる場合にも汝の無狼なる蒼空を仰ぎて、爾の無限無窮の呼吸に呼吸せんことを希ふ、つとめん。

神よ、神よ。

三日。

昨日水谷氏より手紙來る。これ尤も悲なる文字なり。

今日も昨日も出社してまた陸軍省に出頭しなどしたり。

富と功名！　是實に誘惑なり。吾は日々此の誘惑に出遇ふ。

吾は進歩しつゝあるなり。

吾は人生に就て大なる信仰と知識に達せんことを欲す。

今朝山龍堂病院に至り、左肩の痛みに就て診察を受け、藥をもらひて歸る。

今夜義太夫をきく。

人は人の奴隷に非ざるかとは、梅川、忠兵衞の義太夫をきゝて打たれたる感じ也。

嗚呼人間、互に墜落す。然り互に墜落す。互に奴隷たり。互に束縛せられて知らざる也。

五日。

昨朝德富猪一郎氏を訪ふ。收二、今井忠治君同道す。

今井君は暫時にして歸りたり。

德富氏收二の爲めに英語英文修學をすゝめられ、月謝及び書籍費を一箇年間支辨すべしと言はれたれば有難しと承諾したり。

午後家庭雜誌の原稿を作りたるため出社せず。

夜雨降る。アンナカレンナを讀みたり。

今朝の聖書朗讀會は例の如し。

今朝德富氏再び廣島に向つて出立せらる。新橋まで社より送りたり。

六日。

昨夜祈禱會に出席す。植村正久氏之れを司どる。會するもの十數名。吾祈禱し感話す。感話の題目は「恐怖」に就ての佐伯沖の父に於ける試驗なり。

軍人あり、大尉なり、此の人亦た感話す。

植村氏感話す。曰く祈禱は抽象的なるを危險とす。事實實際の上に祈れ。

今朝の集りは例の如し。

吾今(午後十時十五分)編輯樓上に在りて、獨り電燈の下、机に對して默座す。

或は車を馳せて陸軍省に到り、記載禁示の事項を聞きて歸り、或は社を代表して內外通信社の樓上に、

各新聞社の代表者等と今度廣島に於て、開かる可き議會に關する電報送達聯合の事に就て相談する處あり。余は印刷所なる秀英舍と電話にて印刷事務を掛合ふなど、吾今や眞に世務紛々の中に入りぬ。

世務紛々何かあらん。

されど吾山林の自由を想ふ時に於て吾が血は昂る。

嗚呼人はすべからく自由なるべし。何を苦しんで自から流俗に陷ることをなす。よしよし、よしや如何なる場合、如何なる境遇に在りとても、吾決して吾が自由なる靈を忘れざるべし。

八日。

一昨夜は當直なりしが故に社樓に泊しぬ。

昨日は日曜日、午後は眠る。夜田村三治氏來る、洋服にて來る。曰く中央新聞社に入りたりと、得意の樣なりき。世は彼を呑まんとす。否な、彼は到底世の子なり。

昨夜强震あり。

今朝例の集を開きて感話す。靈の要求なかる可からず。靈は靈の自由、權利、義務を求めざる可からず。されど吾が心切に悲しむなり。氏は信仰薄くして徒らに自ら苦しみつゝある也。

貧苦吾に迫り來りて、信仰は來らず。

人生人生。吾には人生の意義暗し。

九日。

此日國元に書狀を發して移轉の斷行一日も早きを望む由申しやる。
吾が父母山林の人に非ざるは吾に取りて絶大の不幸なり。
吾が父母の家、山林に安んじてあらば、吾如何に心强く感じて世に立ち得べき。
今日出社して電報の繙譯に半日を從事したり。
午前は家をさがしてあるく。
伊庭雄氏より書狀來りたり。

十日。

本日三番町より平河町五丁目一番地に轉居す。經濟上の都合なり。山口行一氏都合ありて吾が仲間を去り、食客となる。吾等の貧は次第に貧なり。
パンと芋とを食ふのみ、肉一片を食はざる也。
德富氏に書狀を發し、海事通信依托の決行をうながす。
今夜の月の美なる哉。
吾は如何なる境遇にも安んじ能ふに至らんことを期す。山林にも自由存す。されど都會にも自然あり。要は吾果して眞に自然と醇眞の交通をなし、自由の氣を呼吸し、美の信仰にうたれ得るかにあり。神の信仰は不死の信仰なり。不死の信仰果して吾にありや。否不死の信仰の必然の要求を吾が靈は感じたるか。

生死、大なる事實。
人間と自然との關係、人間と人間との關係、而して人間はまた自然と人間とに關係を聯絡す。此の係を忘る可からず。
吾は實に今何を求めつゝあるか。

十二日。

朝認む。
昨日は弟を伴ひて出社したり。水谷眞熊氏より書狀來る。此の書狀は人生の涙なり。今は今井君の手に貸しぬ。掲載し置かん。
田村三次氏氏友社に來り應接所にて語る。
金欠缺乏したる故に栗原氏に願ふて給料の先き拂ひを乞ひぬ。
軍艦に乘り込むことに付き國元より不安の由申し來り辭退をすゝめらる。今朝只今、一書を裁して決心を申しやる。
昨夜は舊曆の九月十三夜と今井氏云ふ。共に散步して九段に至り義太夫を聞きぬ。人生の事、生死の事、古今英雄の事蹟、ローマ、ギリシヤの古英雄、昔時の文明、千古の人情など思ひつゞけて義太夫をきゝぬ。終りて場を出づれば、明月皎として白晝の如く、秋風夜氣をこめて天外より吹き來る。共に靖國社内より濠の堤を散步し、人情を談じ、詩を談じ、舊遊を談じ、自然を語り、生死を語りて、

月光と共に逍遙すること多時、別れて歸路につき、路にそば屋により酒を飲む。自から、何のために飲みしや知らず。

吾元來酒を飲まざるに、計らず飲む。蓋し此の夜の餘りに愉快なりしかば心思はず放漫に及びしならむ。馬鹿の事してけり。

昨日昨夜は宇宙にきざまれたり。

今朝集りを開きたり。

水谷氏は書狀を認めたり。

自然のうちに更生しつゝある也。（午前認む）

吾何故に好みて軍艦に乘り込みて生死の間に突入するか。曰く吾を自然のうちに更生せしめんがためなり。更に言ひ換ゆれば愈々シンセリティなる自然の兒とならんことのため也。また他の言を以てすれば、吾が靈性をして一段の進歩あらしめんためなり。

今夜は祈禱會。祈禱し感話す。其言ひし處は吾が永生の希望を此處の乘込に就て更に深く得んこと也。新らしき傳道師を見たり。

十三日。

吾默禱し得るか。獨り月下、密室に熱涙を以て祈り得るか。祈りたる事幾許かある。

嗚呼吾は自然の兒にあらず、故に信仰ある者に非ず。嗚呼自然吾に遠く神吾に遠し。

明治二十七年十月。

十六日。

西京丸の船室に於て此の筆を採る。

十三日は土曜日、吾收二を伴ひて出社したり。

廣島より電報來り艦隊乘込の都合首尾能く出來たるを報じぬ。直ちに用意に取り掛りて其の夜九時五十分新橋發の汽車にて出發す。秋雨蕭々、人見、收二、富永、今井、尾間、かき田氏等見送らる。

着廣したるは十五日午前八時過ぎなりき。直ちに大手町なる福井方に到り、社員諸氏に會す。久保田金僊氏と共に市中を奔走して用意す。大本營に出頭して、從軍免許證等を得たり。

昨夜金僊君に送られて、宇品港に來り、端舟を傭ひて本船に乘り込みぬ。

今朝士官に就いて、砲の事、過日の戰の結果たる本船破損の跡などの事をきく。

只今入浴したり。

以上はたゞ事實の大要のみ、左につまみがきせん。

端舟に乘じて本船に達するや、已に一小舟船梯の下にありて荷物など運ぶ樣なり。われつゞいて上る。

これ時事新報の宮本芳之助氏なりき。昨夜更けて甲板に上り、水夫等と語る。此の會話の如きは陸上にて出來ぬ事なり。

十八日。

十六日朝六時過字品を發して十七日の朝佐世保に着し、同日午後五時拔錨して大同江に向つて出發す。只今は仁川沖なる由、或人の語るをきゝぬ。時間は午後一時頃なるべし。明日正午前には大同沖に着すべき都合なる由。

昨夜大に荒れ波高うして船體の傾く事三十度位の由、某氏の語るを聞きぬ。今朝未だ五時に至らぬ頃、甲板の上に出づ。月皎々として中天に在り、東天やゝ白みぬ。波濤漠々四圍たゞ雲と波とのみ。斷雲の走ること矢の如く、星影點々、其の間にきらめく。壯大なる光景なりき。昨日佐世保に於て通信文を發送し、また牧二及德富氏、父上、都會に書狀を發す。

佐世保に上陸したり。

二十日。

夜十時三十六分軍艦千代田の船室に於て筆をとる。

十九日午前十時過ぎ大同江に着したり。同日薄暮千代田艦に乘り込めり。

士官諸子と共に談じ共に食ふて今日も空しく經過したり。空しく經過したりと云ふよりも未だ嘗て經驗なき時間を送りたるため、今日の一日の日の長き事よ。

昨夜は艦長並びに士官諸氏と共に士官室に於て十二時過ぎまで談話し且つ飲む。吾はのまず。

今日午前少尉諸氏と共に談じ晝に及びたり。

吾は政治上の談を試み、諸子よりは軍艦の事をきゝぬ。昨夜は何故に今日まで海軍を攻擊したるかの

詰問に對して、詭辯を揮ひたり。境遇の激變せるため反省の時間少なく、精神的發明なし。

馬鹿になりたる心地す。

二十二日。

午後二時四十二分此の筆をケビン艦長室のテーブルに採る。

今日通信し置きたり。

通信の方法は弟に與ふる書となしぬ。

今朝上陸したり。昨日主計長牛を求め置きたる故受取りにゆきたる也。

朝鮮人の住宅を見たるは是がはじめてなり。

朝鮮人の生活を實見したるも始めてなり。

小丘と疎林と、畦道と、海澤と、岩礁と退潮、滿潮と夕陽と、白衣と、野牛とは更らに一段の光景を加ふに似たれども、寧ろ吾をして此の民の生活其のものを憐ましめたり。

彼等は現今己れの國の如何になりつゝあるかを知らざるが如し。人民、政事、戰爭、相關する幾何ぞ。

大同江畔の此の光景は吾をして後年決して忘るゝ能はざる印象を與へたり。

昨夜士官室に於て艦長をはじめとして互に集會雜談し政事談尤も盛んなりき。何故に軍艦製造費をこばみたるかとふ問は切々吾に向つて發せられたり。

生活の變化は人をして自然を忘れしむ、宇宙の不思議を忘れしむ。

人は實に人の奴隷なり。人の人に對する關係を思ふ毎に實に驚嘆に堪へざるものあり。

嗚呼吾をして如何なる境遇に在らしむるも常に根本に着眼せしめよ。嗚呼常に爾の蒼天を仰げ。

戰爭。流血。軍艦。人生の事實なり。されど宇宙これ爾を包む大事實なるに非ずや。

二十四日。

支那地に上陸して見物したり。

二十九日。

依然としてバカ島の北隅にたゞよふ。蓋し陸軍の上陸未だ了はらざれば也。

二十四日には陸軍上陸に艦長と共に上陸したり。

陸軍は二十四日の微明、十五六艘の運送船に乘載せられて大同江より來着し、直ちに上陸の手續きに及びて上陸にとりかゝりぬ。

午前八時艦長吾を伴ひて共に見物かた〳〵上陸したり。此の日晴朗、殆んど小春めきたる天氣なり。

皇天常に吾が軍神を祐け給ふに似たり。上陸して民家に至りぬ。土民悉く逃亡して有らず。戯れに豚一頭、家鴨二羽及び婦人用のくつ二足を掠めて歸艦す。これより先き吾が艦の陸戰隊、陸上の模樣を探らんため其の朝の三時半頃本艦を出發して已に上陸し、斥候を放ち哨兵を張りたるなり。水兵五六十名許り。

吾今にして婦人用のくつ一個を特に吾が手もて携へ歸りたるを悔んで止まず。吾何の權ありて此の民

の家庭悦樂の一品を掠めたるか。

餘人は兎も角、吾の如き天の民を一視同愛すべき信仰を懷き乍ら出來心のたはむれとは言へ、反省もせずして此の害惡を行ふ。

吾實に後悔して止む能はざる也。

丘陵起伏、耕野茫々、所々高樹あり、高樹の小蔭に民家四五の簇をなす。牛、豚、鷄、家鴨、驢馬等、自在に逍遙す。

嗚呼皇天の自由の民！　吾これに一害を加ふ。

後悔の一詩を作らんと欲して詩想成り、文字成らず。

二十五日の夜突如として一警報を耳にす。曰く定遠、鎮遠、靖遠、濟遠、平遠、廣丙の六艦及び水雷艇二艘威海衞を出で東方に向て航したりと。これ偵察艦として兼て威海衞近傍に出沒したる浪速、秋津洲二艦の報告なり。

二十六日。

午前五時半上陸地を拔錨してバカ島の北方にたゞよふ。本隊及び第一遊擊隊第二遊擊隊なり。

二十七日。

旗艦なる吾が艦に向ひ、海洋島と馬鹿島の間を偵察せよとの命ありたるため出發したり。

此の時一報に接す、曰く昨夜吾が水雷艇大連灣口にて敵のマインボートを捕獲し歸りたりと。マイン

ボートとは水雷伏設用の小蒸汽なり。海洋島の一灣に入りたる時一漁舟を飛ばして支那人來る、たち魚とビスケットの屑とを交換したり。

島民の狀を望遠鏡にて望み得たり。

島を去りバカ島の間に來りまた漁舟と交換す。

二十八日。

昨日はバカ島の邊にたゞよふに過ぎず。

昨日三輪少尉病を以て退艦し小貫候補生來艦す。

本日も亦已に午後三時、而して艦隊は空しくバカ島のほとりにあり。一報を耳にす、吾が上陸軍已にビーフー河を占領したりと。

艦隊空しく玆に碇泊するは、陸軍上陸を了へざれば也。

悠々として日月經過す。

乾坤吾を包み、吾を被へども、吾自然を忘る。

自然の悠々無窮の不思議を忘るゝの吾は神明を忘る。紛々として到る處に心靈の束縛を受く。

十一月

六日。夜八時四十分此の筆を採る。

今、吾が艦は大連灣口を去る遠からざる邊を漫航しつゝあり。これ明朝を待つなり。

十一月に入りて以來、始めて此の筆を採る也。

一、二、三日も空しく過ぎぬ。四五日も亦然り。

五日、昨日は通信文を認むる爲め、一日を暮し盡しけり。

今朝漸くの事に Baka 島を出發して大連灣攻擊に出掛けたり。

十一月一日は、小主計等と共に島に上陸して、牛、豚、鷄、家鴨を求めて歸りぬ。二日は艦長大主計等と小長島に上陸して午前半日を暮しぬ。是等の事は詳記せざる可し。吾が頭腦より脫出し得ざる事なれば也。三日は天長節。

四日は實にぼんやりして暮しぬ。

月漸く美なり。

吾大に自然を忘れ、吾殆んど放逸に流れたり。戰爭に從事し乍ら、吾殆んど無感覺なり。大に自然の壯觀を極め乍ら、吾全くこれに無頓着となり了はりぬ。

吾、自から吾を此の天地に忘れたり。吾、自から吾を小となせり。

放逸！　これ實に吾の敵なり。吾彼に勝たずんば彼吾を殺す。

嗚呼人心程、不思議なるものはあらじ。吾自から吾を知る能はず、吾自から吾を支配する能はず。

人は人の奴隷なり。人は人の顏面をのみ見て、自己の頭上を見ず。

八日。

昨日大連灣を取る。

昨朝吾が艦隊大連灣口まで進む。第四遊擊隊に命ありて攻擊にかゝる。筑紫以下の三四艦進んで灣口の信號等の立てある山頂に向つて發砲す、五六發にして止みたり。

本隊續いて入る。直ちに千代田に向つてこぎ寄せんと試むる二艘の小舟あり。吾が千代田より之れに向つて小銃を發す。二艘引きかへし去りて止む。旗艦より四五發を放ちぬ。敵なし。

忽ち嚴島より信號あり。前面和尙島に日章旗飜へると。數時間はこれをたしかむる能はざりき。水雷艇と小蒸汽と往復して漸くの事に其の全く日章旗なるを確め得たり。報じて曰く、吾が陸軍一昨夜(五日の夜)金州廳を攻擊して昨朝これを陷れ、今朝また除家山の砲壘を陷いれ、遂に和尙島砲壘を奪ひ了はりぬと。萬歲を呼ぶ。

餘りに容易に大連灣の陷りしにはたゞ呆然たるのみ。支那人は吾が國民の敵にあらず。

機械水雷等掃除方のため吾が水雷長司令となり、各艦の小蒸汽を以て昨夕本艦を發したり。

吾が艦隊付水雷艇、來襲を戒めて昨夜より沖なかに漫航し、今再び大連灣に歸る途すがらなり。

十四日。

午後三時四十分此の筆をとる。今は大連灣內ヴュクトリヤ澳內にあり。

昨はジャンク澳に在りき。十二日。和尙島に上陸して西砲臺を見物したり。

日々夜々、同じ事をくり返すのみ。明日は旅順をさして進擊すべし。

何故にわれ、自然を思ひ、人生を思ひ、歷史を思ひ、戰爭を思ひ、生死を思ふ能はざるか。

十九日。

十五日の薄暮。大連灣を拔錨して威海衞に進發したり。

本隊、第一遊擊隊、第二遊擊隊、及び八重山艦なりき。

目的は先づ第一遊擊隊をして威海衞の前を巡航せしめ、港內の敵を誘ひ出し、本隊と第二遊擊隊は他に隱れ居て、敵艦、われの少數をあなどり港內より出づるや、八重山をして直ちにこれを本隊に報ぜしむ。本隊乃ち第二遊擊隊と共に急馳して、第一遊擊隊と合し、再び敵を港內に入ることなからしめ、玆に一大決戰を試みんと云ふにあり。且つ若し、敵にして出で來らざる時は夜、水雷艇を放ちて、直ちに港內を襲はしむるにありとの事なりし。

而して敵艦威海衞に在りし事は佛國軍艦の報告したる處なる由。

敵は威海衞より出でず。

風强くして水雷艇襲擊を試みず。

敵に望樓あり。定めて本隊以下の潛伏せるを知りしならん。

此くの如くにして十六、十七の兩日は過ぎたり。

十七日の薄暮、威海衞の前面に觀兵式を行ひて歸る。觀兵式とは冷評なり。

十八日の朝、大連灣に歸れば、千代丸佐世保より來る。もたらす處何ぞ。曰く、敵艦タークーに在るの電報佐世保より達したるが故に石炭をも積まずして急航し來ると。

馬鹿な！　敵艦の太沽に在ることは旗艦已に數日前これを知り居たるなり。而して空しく敵の威海衞に遁げ込みたるに及び觀兵式を行ふ。

馬鹿な！　此くの如き冷評は士官室に於て發せられたり。

昨日朝十一時頃より午後一時頃まで旅順の方に砲聲をきゝぬ。

昨日午後二時頃より上陸して牛豚を買ふ。實は半ば奪ふなり。但し彼等は土民にして、吾を疑はず吾が求めに應ぜんか、彼等もまた利する可かりし也。

昨日午前十一時頃通信文を認めて送る。

數日前德富猪一郎氏より來狀あり。其の老婆心はうれしけれども吾何となく卑下せられたる心地す。否な否な、われ實に、人の前に自から卑下したり。

われに此の女々しき根性あり。

宇宙に俯仰して千歲相望むの雄心何處にか生ずるぞ。

昨日聞く。英艦陸兵六千を舟山群島に揚げたりと。

これ舟山列島を占領したる者にあらずや。衆評英の下心を惡む。英は機敏なり。

舟山列島は上海の沖に在り。

今朝ウオールズウオースの逍遙遊の最後の編を讀みかけたり。

新朝野新聞にて松陰の七生說を讀みぬ。

哲人善士は必ず其の信仰を有す。

凡て宇宙觀と人生觀を有たぬ者程其の見識の卑しきは非ずとは、軍人と交はりて感ずる處なり。

ボンヤリして居てもすむぢやないか。到底わからんからよす。ひまがない。

是等の言語はわれ、人間確信する處の宇宙人生觀無かる可からざるを說くの際、往々憐む可き人々より聞く處の言葉なり。

自殺を思はざるに非ず、未だ決心うすし。

一死萬事休するに非ずや。

戰爭も兒戲に非ずして何ぞ。

自然の自由を希ふ。死はこれを與ふる者か。

嗚呼人の此の宇宙に呼吸する道も亦難い哉。

吾！　此の宇宙にたつ。

吾を信ぜよ。

吾玆に在り。一生一死神の則なり。吾自から重ず。

十二月

一日。午後八時十五分此の筆を採る。

十一月は筆とりたること僅かに五たび、則ち六日に一度筆採りたる割合となる。吾も亦惰けたる哉。十二月とはなりぬ、二十七年も已に逝かんとするなり。

碌々たること依然たり。幾度自から反省するも人間は薄志弱行なる哉。されどこれは已に無益の繰り言たるを免ぬかれざるなり。

吾は碌々を以て此の生を終らんことを欲せず。また決して終らざるなり。

旅順口は二十一日に陥りたり。二十四日か五日に一寸と上陸して饅頭山砲臺附近を見物したり。

初めて支那人の死體を見たり。いま尙ほありゝと眼底に印象せられ居るなり。

「戰死者」の實見は、吾をして「戰」なる文字の眞面目なる消息を直感せしめたり。

二十六日の午後までは旅順口の港外に碇泊してありしが、風生じ波高まりしかば、避けて大連灣に歸りぬ。今日まで尙ほ大連灣に在り。

二十七日は初めて雪ふり、艦上顧みれば大連灣内雪紛々、サンプトンス峰頭已に白し。二十八日も少しく降る。

沍寒の時節とはなりぬ。

二十八日の夜伴武雄富永德麿の兩友より書狀を得たり。伴氏の書狀は幾度か吾をして涙あらしめたり。

「此の故に僕、皮下注射の療法ありながら之を施すの資なき匪運を悲まず。同窓の諸子連りに氣焰を吐くをも羨まず」云々の句は却て吾をして此の青年の匪運不幸を泣かしめたり。

また、「如今日中は天暖かく人收穫に忙はし。尤も田家の趣味ある時なるべし。紅葉、濃淡林邱を點綴し、叢菊糾紛流れを擁するあり」の句は吾をして魂天涯の山林に飛ばしめ、うたゝ白然の自由にあくがれしめたり。

嗚呼自然！　自然！　吾に親しかれ。吾、爾と友たらんことを希ふ。友！　これ言葉に非ず、空言に非ず、形容に非ず。嗚呼『友よ』爾を呼ぶを得ば如何に吾は幸福なるべき、高尙なる可き。偉大なる哉。不思議なる人類の歷史！　不思議なる個人の生命！　不思議なる個人の生命！

嗚呼吾が思は千々に走りめぐるなり。

クリストの時代と、生涯と、行爲と、運命とを思ひ、羅馬を思ふ時は、其の古跡を想像し、カーライルを思ひ、ウオールズウオースを思ひ、バーンスを思へば其の時『吾が心は丘上に在り』の詩を思ふ。過ぎし少年の時代を思へば夢の如し。岩國の生活は如何、今道小學校の生活は如何、龜山、山下の生活は如何。

佐伯の生活は吾をして自然に近づかしめたり。中の谷を思ひ、元越山を思ひ、尺間山を思ひ、銚子の

瀧を思ひ、黑澤の櫻を思ひ、蕃匠の月を思はしむ。麻鄕村の生活を思ふ、雪夜の靜寂を思ひ、高塔山の夕陽を思ふ。舊友今如何、古川駒造何處にかある。

嗚呼過去！　時！　不思議なる哉、過去とは何の事ぞ。

過去とは空乎。

四日。

宗教は愚民の信ずる者なりと放言し、肉情の外、更らに高尙なる感念なき一個の海軍大尉は、何の權ありて、天に屬せんことを熱望し、自然の眞兒たらむことを熱望し、自由ズキたらんことを熱望する一個の青年を罵り得る乎。

高上なる聖者は吾を此の衆俗のうちに見捨つるか。

カーライル、ウオールズウオース諸君は此の目に見ゆる世界には何の權をも有せざるか。

天は吾をして人間の弱點を自覺せしめ給ふが如し。人間の弱點は何處に在りや、其の最大なる弱點は如何。

曰く、

天地人生に就て眞面目なる感情を常に絶ゆることなく保持する能はざることなり。

一言以てこれを斷ずれば、シンセリテイならぬことなり。

更らに言ひ換ふれば、生命其のものゝ不思議なることを感ぜざるに在り。

一方よりこれを言へば、

日常周圍の肉情的慣習に感染せられたる也。然らば一個彼の海軍大尉と吾との差は如何。曰く。

吾も大尉も此の弱點を有す。たゞ大尉は未だ此の弱點を少しも自覺する能はずして得々たり。吾は深く之を自覺して脫出するに熱心なるものなり。則ち已に此の弱點を自覺する者なるが故に、天地人生に就て已に多少感得し確信する處を有するものなり。大尉に於ては全く然らざるのみ。

故にわれ彼の罵詈を恥とせず、却てかれの無明を憐憫せざる可からず。兎も角も此の弱點こそ最初最大の弱點に非ずや。

嗚呼吾！　たゞ聖賢哲人を慕ふ。

故に如何なる權勢ある人にも一寸一分たりとも避退すべき事ある可からず。

昂然として獨立獨行す。

社交的得意は人をして其の靈性的失意に陷らしむる者たることを忘る可からざる也。

今日將に沈まんとする初月を甲板より望みて、歸室此の語を認む。

十日。

夜更けて人眠れり。北風激しく、灣內浪高く、風寒し。夜沈々、天上月皓々、地理學考の日本部を讀み終はりぬ。

嗚呼此の大自然、此の人類、此の歷史。

不思議にして眞面目なるは人生なる哉。

地理學考は牧二より送りし書、五日これを落手せり。これ地理的哲學なり。若しくは宗教詩歌的地理なり。或は豫言的地理學なり。

十二日。

吾が目下の戰は、われを誘ふて止まざる周圍のアイドルなり。カーライル曰く、此の世界に於てアイドルこそ最大の怪物なれと。吾は此の怪物の怪力に破られつゝあるなり。苦戰しつゝあるなり。

日々夜々、空々然として逝くなり。

朝起くる時八時、夜眠る時十二時、或は十時、若しくは一時。昏々としてアイドルの支配の下に在り。

觀察する處、何物ぞ。曰く、なし。

大連灣！　吾には見慣れたり。

停春氏の「近松門左衞門」を讀みつゝあり。

二十一日。

今年ものこり少なくなりぬ。

艦隊は大連灣に在り。威海衞攻撃を待つあるのみ。

伴武雄氏、引頭百太氏、河村正雄氏、今井忠治氏等の書狀來り返書を認めたり。

河村正雄氏は山口中學校同窓の舊友、一別以來已に七八年なり。吾が國民新聞紙上の通信に依りて吾

を知り、則ち書狀を送りしなり。

引頭百太氏は朝鮮に在り。

伴武雄氏の書狀は最も吾が情を動かす也。左の俳句に書添へて送りぬ。我が宅傍に於て、

水宅を谷ほのぐらく紅葉ちる

我が宅にて、

しぐるゝや破れ障子の山つゞき

こがらしの我が影を吹く障子哉

碁の音にまぎれても聞く落葉哉

麻里布浦にて

潮みちて漁村影あり夕紅葉

和歌即吟、

みるまゝに鹽やく煙りなびきけり

沖のしぐれを誘ふ浦風

馬島にて、

島蔭や時雨れて落ちし三日の月

是等の俳句、和歌の善惡は吾知らずと雖も、兎も角もこれ皆吾が熟知せる林丘濱海の間に成りしもの

故、吾をして哀吟幽懐措く能はざらしめたり。

十九日に一度、和尚島の下に上陸し、今日また上陸す。

見聞する處少なからず。

二十二日。

今日午前ウオールズウオースのエキスカージョン最終の卷の讀みかけを讀みたり。多感多涙、憤恨痛悔措く能はざりき。

通信文を認めたり。

山口中學校舊友に出遇ひぬ。卽ち浪速の小主計□□なり。

小說「紫」を讀みたり。

船長より千代田一寸と歸國の事をきゝぬ。但し未定の由。一昨夜と記憶す、小說「用達會社」を讀みたり。

これホウソーンの作を思軒居士の譯したるもの也。

欺かざるの記を書き始めて以來實に多くの事を感じたり。多くのストラツグルを經たり。而して君が信仰と知識は依然たる也。進歩進歩と稱す、進歩何處にかあるぞ。寧ろ退歩には非ざるか。

或は虛榮を戒め、或は過去は神の現在なることを語り、或は他の吾を感じ、或は自然との活ける交通を希ひ、而して眞神に對する活ける信仰を望みたり。シンセリテイなる事をつとめたり。

今や如何。今や如何。

天地、人生の話、これ吾をして凡てを感得せしむる警句なり。而して歴史、人物、自然、人心の不思議の更らに不思議ならんことを希ひき。然れども吾が地位の社會水平線に上ぼるに從つて次第に此の熱誠はさめんとするに非ざるか。

一言す。

ウオールズウオースの語をかりて一言す。曰く、希望の食物は沈思の働きなりと。而して吾はこの沈思を缺きつゝある也。吾が境遇は次第にこの「沈思」を奪ひつゝある也。

吾は境遇の奴隷たる也。冷靜は吾を救ふ可きに、却て吾に此の冷靜を缺く。

吾道行きを知れり。如何なればわれ更らにシンセリテイたるを得るや。如何にすれば吾今夢の如く望む神聖自由の地に達し得るかの道行は、吾これを知れり。

吾實に一歩、一歩、行かんとぞ思ふ。切に思ふ、一歩、一歩、一歩、然りたゞ夫れ一歩、一歩。

然れど吾常に躓くのみ。躓きては徒らに激昂するのみ。

嗚呼たゞ一歩、吾はたゞ一歩の確實堅固ならんことを希ふ。

二十七日。

嗚呼狹隘にして窮屈なる哉、人間の思想、感情、想像の天地や。吾日々何を思ひ何を感じ何を想ふぞ。

今日の吾は昨日の吾に非ずや。

日々夜々、空々漠々たる頭腦の車輪は回轉しつゝあるなり。道行も定まれり。輻員も廣狹も長短も明

ちかなり。新鮮濶大の天地の變化少しもなきなり。人たれか倦まざらんや。

除夜の記

三十一日。明治三十七年も已に逝きたるか。新年は來れり。年齡また一つを加ふ。一年また一年、吾も已に壯年に達したり。この一個獨立の靈の命運は如何。

吾が前に吾なく、吾が後に吾なし。われ星の如く宇宙に立つ。知らず吾が存在の意味は如何。

神聖なる宇宙、不思議なる人生！　吾をして歲月と共に愈々此の神聖と不思議とを直感せしめよ。吾が願はこれなり。

明かに言へば吾今進歩なし。

明かに言へば吾シンセリテイの度に於て退却せるを覺ゆるなり。

これ戰慄す可き退却なり。何となればこれ自滅なればなり。シンセリテイの度は退却する時に於て一歩、三歩、七歩の恐ろしき比例を以て退却するものなり。

見聞遭遇する處のもの、若し或は吾がシンセリテイを殺すの利器とならんか、吾が歲月は吾が自滅の道行と言ふ可し。

われ人と語りて其のシンセリテイならざる心靈の痲痺に戰慄す。人間何者か不シンセリテイなる程恐る可き事やある。かれは自殺の人なり。吾が存在の不思議を直感し能はざるに至らば吾が靈已に痲痺したるなり。

嗚呼われ祈念を神にこらさん。

二十八年正月十四日。

吾は孤獨のうちに神と親しむの經驗を有せざる也。獨立獨行と寛容自適とを包擁せしむるもの、實に此の貴き經驗のうちに生ぜざる可からず。「神に對するの義務」てふ絶大の德もまた玆に發す。

區々の憤激を止めよ。爾は此の經驗に缺乏する者なり。

社會は時々刻々吾を奴隷となさんとす。吾が心は神を望み、神と親しみ、神の愛による事をつとめずして吾が眼は社會の我が儘の權勢を仰ぎ見んとはする也。

吾が薄弱は内より吾を陷いれんとし、吾が周圍は外より吾を奴隷となさんとつとむ。

薄弱に對しては悔恨的痛苦あり。周圍に對しては冷笑的反抗の苦鬪あり。此の不可思議なる宇宙に吾が心魂は狂はんとする也。

十五日。

昨夜は士官次室に於て山路少尉と衝突したり。山路は飽くまで吾を嘲罵したり。しかれども彼は酒を被り居たり。かれは自家の淺薄なるを知らざる也。彼は一種の好漢なれども要するに才子に似たる愚物なり。士官次室に於て其の人物を推せば野村少尉を第一となす。其の次は藤木少尉なり。

何故に山路は吾を罵りたるか。嗚呼山路と言ふ勿れ、吾を知らざる者、徒らに吾に向つて吠ゆ。

萬犬をして虚を吠えしめよ。

水兵は吾を高慢なるやつと思ひ居る也。高慢なる水兵よ。

吾威海衛攻撃の後は一と先づ歸京せんかと思ひたり。然れども、吾は尙ほ何時までも、社より歸れの報のなき限りは何時までも艦上に留まるべし。

外水兵及び士官をして正當に吾を解せしめ、內には自家無限の苦悶を此の世外波上の別天地に放任せんことを欲す。

否な否な、吾はたゞ吾が品性の上達を希ふ。此の故に艦上の狹苦るしき遲鈍なる生活を以て吾を鍛鍊せんことを欲す。

嗚呼齷齪として自から小にす。天地の無限窮りなきを知らざるか。

大なる文章は大なる品性なり。大なる詩は大なる信仰なり。而して大なる經驗は大なる品性と大なる信仰を養ふ。

目下の吾が心の不穩を靜めんが爲めに、吾が過去快心の事を誌して左にならべ、暫らく「過去」てふ懷かしき故鄕の女神と遊ばんと欲す。

吾が尙ほ丁年に達せざる十八九歲の頃、長門舟木の驛に、暫らく父母弟と共に住みし事は、吾が知る所なり。忘るゝ能はざる所なり。

弟と共に、家を出でゝ丘山に逍々奔馳し、咲き亂れたるきゝやうを集めたる事あり。瞑目して回想し來れば、吾も弟も浮世の者に非らざりけり。

弟及び一少年と共に數里を遠行して釣を垂れしことあり。小川の淸冽なる流れ、今猶ほ眼前に在り。

歸路淋しき谷底にて驟雨に遇ひぬ。白き雨、頭上の靑山を壓して來り、寂寥の感に打たれぬ。白雨靑山今猶ほ眼裏に存す。

彼の山、彼の水いま依然たるべし。彼の少年の運命は如何。

吾が家を後門に出でゝ、溪流に沿ひ、谷を上ぼり行けば、兩山の相合はんとする谷間に池あり。弟と共に薄暮此の邊に來りて無心寂々たる水面に對し、時に波紋の起るを見て、如何なる魚や住むとのぞき込みし事もあり。

岩國の時代を回顧すれば夢の心地す。

父と共に秋の小春時、近山を漫步して小松を引きし事あり。父上も尙ほ壯んなりき。今は老い朽ちぬ

吾は十一二歲の少年なりき。

無心の自由魂なりき、今は世の重荷に苦しむ。

樋口左文今は如何、嗚呼竹馬の友よ。君が池の金魚は如何に羨ましかりしよ。君が机上の源平盛衰記の畫は何十度ひもとかれしよ。君と共に野に出でゝ、小鳥を欺かんと試みしこと、吾忘る能はず。いせが岡の郊野は吾が夢想にぞある。

吾が初戀の少女今は如何。

若し夫れ佐伯、或は麻鄕村の「自然」に近き生活を思ひ起すも、此の時代也。自由魂は已に半面苦悶の

影を捕へたり。回想の快事は無心にあり。

二十二日。

昨日内村鑑三氏の「流寓錄」を讀んで、突然一つの恐ろしき決心吾が胸間に浮び出でたり。吾此の決心と共に無限の憤慨を感じ熱涙をのみたり。

十九日、大連灣を發して榮城灣に向ふ。二十日午前六時午前六時榮城灣到着、陸兵上陸をはじむ。降雪紛々、山岳ましろなり、北風烈し。

二十一日、(昨日)本隊及び第一第二の遊擊隊威海衞の前に示威運動を行ひ砲擊を受けたり。本日正午榮城灣へ歸り碇泊。

天氣晴朗氣候溫暖、

英國艦隊來る。

敵艦依然威海衞に在り。

此のごろ少しく用ひそめたる酒と煙草とを嚴止せり。

二十七日。

榮城灣に在りて此の筆をとる。

一昨二十五日通信文を國に送りたり。

明日威海衞の沖に漂泊して警戒せよとの旗命ありたり。

榮城灣に於ける陸兵の上陸は已に了はりたる樣子なり。

支那艦隊の運命は已に迫まりつゝある也。

英國軍艦は常に一二艘づゝ榮城灣に碇泊し居るなり。

日本國、前途の希望と共に經營すべき事多し。

一度近づかんとしたる自然、今や日々に遠ざかりゆく也。一度び燃えんとしたる信仰今や日に零落しゆく也。

有望なりし此の一個の青年は、將に俗界に俗了し盡さんとはする也。

かれの高潔なりし感情も日に冷却せんとはする也。

はかなきは人心なる哉。

人間肉體のもろきを嘆ずる勿れ、人間靈性の更にもろきに驚く。

自然、人間、人生、に就て嘗て燃やしたる驚異心は今や水平線下に沒し去りたるの感あり。

靜かに一室に歸りて默坐沈思し、日々の吾を反省し來る時は、眼に映じ來るたゞ一個、無邪氣なると共に無學無信にして自重自信なき少年を。

かれが熱情昂揚し來りて、神明に祈禱する時に如何に獨立自由自信にして高潔なる男子の如きよ。

されどこは其の時のみ。彼に、宇宙の不思議と人生の眞面目とが忘却せらるゝ時に於て、神に對する義務の決心が忘却せらるゝ時に於て、汝は一個の俗物のみ。

二月

五日。

欺かざるの記を記しはじめて以來已に二箇月を全うせり。

碌々たる吾は、依然として碌々たり。狂氣じみたる吾は依然として狂氣じみたり。信仰なき吾は依然として信仰なき也。日月轉ずれども吾たゞ老ゆるのみ。情神の進歩に於て一も見る可きあらず。

人生は暗黑なり。人間は薄弱なり。吾は「薄弱」の種を播いて「絶望」を刈りつゝあるなり。

されど吾、吾如何に墮落し、如何に失望すと雖も、希くは僞善者となり、世俗人となりて、吾が獨立不羈の心靈を沒了する勿れ。

薄弱の惡鬼よ、來りて吾を殺せ。「痲痺」の妖怪よ、來りて吾を捕へよ。されどされど、吾斷じて世と人とに盲從せじ。飢餓とひんせきと吾を咀ふと雖も、吾斷じて吾が自由を失はじと誓ふ。

絶海の孤島に埋もれんことを希ふ。而して吾が自由を全うせん。斷じて日本國東京の榮華を夢みじ。

見よ。吾が蹈まざる世界は廣し。吾と同じき人間の住所は到る所に在り。

南米の森林、北米の原野、到る處吾が短かき〳〵五十年を送るに足る。

吾に一個の自由なる心靈を與へよ。然らば吾は足る。

救世！　愚人の夢のみ。人須からく自由に我が儘に勝手に生活すべし。

花、月、雪、山、水、悉く我が心靈の自然の友ならぬはなきなり。

愛！　まゝよ。戀愛のはかなき夢に迷はゞ迷へ。戀愛に死なば幽冥に生きん。

此の一個の青年、其の流るゝにまかさしめて春の水の運命に等しからしめよ。一個此の吾、何物か一指を加ふることをよくせんや。されど凡てこれ狂者の言か。

嗚呼區々愚痴の言を止めよ。自暴自棄の愚者默せよ。小我の狂暴者よ、默せよ。

見よ、見よ、自然は依然として自然なり。無限壯大なる宇宙は少しも其の莊重偉大の象を失はざる也。

爾の眼を此の神祕なる自然に轉ぜよ。此の不思議にして神聖なる自然に轉ぜよ。吾が耳を人情自然の音に傾けよ。

嗚呼無名にして無限、偉靈莊重なる自然大宇宙よ。吾玆に立つ。

人生！　此の不思議なる世界に於ける此の不思議なる人生！　爾は其の幽玄不思議を思ひて敬虔の念と共に一種の恐怖の念は起らざるか。眞理、眞理、不思議にして神祕なれども、宇宙の生命なる眞理。

愛なる神よ。眞理と善德と愛情と美麗とを立て給ひし神よ。永遠の生命を立て給ひし神よ。

嗚呼强かれ、信仰に由りて强かれ。

『なんぢら目を醒し、堅く信仰に立つて、丈夫の如く剛かれ』

人生は現實也。眞面目也。宇宙は全體也。神は不朽永遠の主宰者也。人間の行爲は不磨の事實也。「勞作」は人間が「永遠」(エターニティ)にきざむべき「義務」也。煙と雖消えず。宇宙に消ゆるものなし。靈界の法則とても然り。

著作者の書籍は朽ちん。ゲーテのファウストもシエークスピアのハムレツトもウオールズウオースの

詩集もカーライルの著書も、朽ちはつるの時は來らん。其の名は丘山の牧童の名の如く、早かれ晩かれ忘れはてられなん。

永久の時間、人間は物質に於て、凡ての死を見る。されど心靈！　永遠（エターニティ）は「今」のうちに在り。

神聖なる法則は時間と空間とに經緯せられざる也。

六日。

威海衞の攻撃も已に了らんとせり。敵の定遠、威遠、來遠、外一艘は一昨夜、及び吾夜を以て吾が水雷艇のために破壞せられたりと旗艦は報告せり。

吾が千代田は本日本隊より獨立して威海衞東口を斥候したり。本隊は蔭山口に碇泊したり。

支那の艦隊餘す處幾何もあらずなりぬ。降るに非らずんば全滅する事遠きにあらざる可し。

薄暮甲板に立ちて望めば、天晴れて月色青く、西天なほあかねをのこし、明星兩三點、百尺竿頭にかがやき、海波茫々として北天遠し。宇宙はたしかに美也。

十六日。

夜十時四十分此の筆をとる。

士官室の煖爐の前に椅子に坐して吾獨り在り。

明十七日は愈々支那の殘艦を受取る可き日なり。支那北洋艦隊全滅の日なり。

支那軍艦廣丙は吾が千代田艦々員が捕獲すべき配置となる。而して其の配置に當る者は臼井二分隊長

司令となり。野村勉少尉等之に屬す。

かれとは何ぞ、われとは何ぞ。

此の吾を憂ひ、此の吾を思ふの心靈は、彼の吾を憂ひ彼の吾を思ふ能はざるか。

二十四日。

十七日を以て威海衞港内に入りたり。

夢の如くにして一週間を經たり。

昨日二十三日西京丸にて祝勝の大宴會開かれたり。

一昨夜二十二日の夜野村勉少尉の歴史を聞きたり。

吾が現今及將來は暗黑なり。

人間が此の世界に於て各々受く可き運命を思ふて止まず。

所謂る「官」なる者の消息を解したり。「社會」と「官」との關係を解したり。「個人」と「官」との關係を解したり。

三　月

三日。

今對馬竹敷に碇泊す。一日午後入港したる也。威海衞を發したるは二月二十六日午前十時也。

途中風強く浪荒らく、廣丙のために遂に玆に立寄りたる也。

到着の日直ちに嚴原(いつがはら)に到り電報を打ち、其の夜は一泊して昨日正午本艦に歸り、直ちに水交社倶樂部に至る。これ當地海軍將校諸子より千代田廣丙士官一同を招待したる也。

横田大尉に導かれて水雷布設部を一見したり。

薄暮、倶樂部にて牛を煮て食ふ。直ちに中山大尉の招待に二少女の踏舞を見物し、夜十時歸艦す。

忘るゝ能はざる者は、

對馬の風景、小馬、九歳の舞踏少女、更らに詳記せんと思ふ。

吾は如何なる事ありとも吾が存在を自己自から賤めすつべからず。吾、必ず勝たざる可らず。世!世を支配せよ。如何なることありとも「同等なる人間」の世界をして吾に勝たしむ可からず。

九日。

五日に港に歸る。其の日直ちに退艦して廣島に歸る。廣島は大手町四丁目福井方本社特派員の宿所なり。玆には德富猪一郎氏平田久氏横澤三次郎氏茂木啓次郎氏塚越運八氏等ありたり。塚越氏は六日出發從軍す。これを宇品に送りぬ。昨日(八日)茂木君を吳港まで送り軍艦嚴島に乘らしめて今日午前廣島に歸る。

今日河村正雄氏來り訪ふ。

十四日。

東京麴町區平河町五丁目一番地なる現住所に於てこれを認む。

三月十九日。

夜十時靜坐默思此の筆をとる。

周圍の感化を逸脫して獨立獨歩の天地に入らざる可からざることを感ずる益々切なり。

平凡なる周圍は吾をして情と想と共に平凡ならしむ。

吾が今日の周圍は日本今日の普通なる社會に比して數等優れたるに相違なし。されど鬱勃たる吾を滿足せしめざる也。

紛々たる政治世界は吾をして力を玆に致し大に人民のために爲さんと欲するの情を高めしむ。

されど吾が心から希望する處は、天よりのインスピレーションなり。深遠なる學識なり。消えざる火の如き信仰なり。

冷やかに言へば吾に信仰あるなし。吾に確信あることなし。吾に絶對の眞理と善德と美妙とに對する確信あることなし。

吾に全能全智聖愛なる天父の現存する信なし。

吾が目前にはたゞ紛々たる世間現存するのみ。

吾が心にはたゞ此の目前の世間が映ずるのみ。

已に信仰なし。故に義務に對する勇氣も自任も忍耐もあることなし。されど吾決して自暴自棄せざる

ことを期す。何となれば吾遂に信仰を得べければ也。吾遂に發達進歩到着せざれば廢せざれば也。
吾、決して人生と自然との不思議を無感覺に措く能はざる也。
人生は確かに不思議なり。吾は人間なり。此の不思議に對して獨立獨歩の默契者なり。
吾は人間なり。吾は吾の最初最後なり。此の吾が生は吾の全體なり。吾に古人なし、吾に來昔なし。
故に吾は自然の兒なり。故に人生の不思議は吾に最初最後の事實なり。
吾、眞面目に信仰を求めざる可からず。

二十日。

吾が知る人、知らざる人、道に出逢ふ人、共に語り共に爲す人、彼の人も此の人も、愛慕に堪へざる人も、憎く思ふ人も、凡ての現在接着する人悉く死す可きを思へば不思議なる哉。
愛と死と、撞着する如くにして兩立和合するが如くに感ず。
彼の人も吾も共に何時かは死の關門の奥の世界に屬す可き者なることを思へば、吾が彼の人に對する情は更らに眞面目に赴くなり。
藤形死すとの事實を今夜父母より聞き、吾が心はいたく動きぬ。其の妻の貧困窮迫なるを思ひ、其の周圍世間の刻薄なりしを聞くに及びては、實に神のみ知り給ふ不遇の如何に多かる可きと。

二十五日。

朝記す。

昨日は日曜日、われ當直。終日國民新聞社樓上に在り。李鴻章狙擊の飛電馬關より來る。號外發兌の爲め夜十一時漸く退社、十二時歸宅す。李已に傷つく、今後の形勢果して如何。李にして男子ならば此の事を口實の一端に置き政略の一助となすの卑劣行爲を試みざるべし。されどかれは窮鼠なり。

四月

五日。

二十五日より五日に至るまで日本の歴史より言ふも實に多事なる日なりし也、
されど余は今日始めて「困難」に對する「打ち勝ち」の快感を感じ得たり。余は「困難」なる文字を冷笑するの一種言ふ可からざる快事なるを感じたり。
已に一度かく感ず。世に最早や「困難」と云ふ程の事、則ち吾が爲さんと欲して困み艱むが如き事の消滅したるが如くに感ずる也。

八日。

昨日は日曜日、
櫻花已に咲き亂れたり。吾が庭前の桃は已に散りそめたり。今朝の春雨、花のためには敵なり。
昨日大久保、水谷の二氏と共に金子馬治氏を市ケ谷に訪ひぬ。昨夜は一番町教會に於て乘艦の談話をなしたり。

昨日、中島貞子孃より書狀來りたり。これ吾が兩日前書信したる返事なり。余と此の孃との交際はこれより始まらんとす。余は此の交際を實に樂しく、またうれしく思ふ也。

○讀書　（昨日）

福音新報、三百十號。――基督教徒の德　（三）　有神新論。

余が情念を高上ならしめよ。諸々の疑念、憂苦、區々のなやみの上に在らしめよ。

余は神に賴りて自由ならざる可からず。愛と美と、これ余を救ふ神の力にぞある。

十日。

嗚呼諸々の人々の生涯、同情に堪へざる也。

吾が日本に於ける幾多の人々、爾は山林に生れて山林に死したるならん。爾は陋巷に生れて陋巷に死したるならん。嗚呼同情に堪ふ可けんや、諸々の人々の生涯

天の下、地の上に於ける諸々の爾等。其の一生の命運、境遇、出來事、それ如何。

荒れたる情に任かす可からず。

深く觀察せよ、靜かに修養せよ。

爾のシンセリテイを養へ、耕せ、培へ。

恐るゝ勿れ、憚かるなかれ、惑ふ勿れ。

小我に苦しむなかれ、博愛の自由に入れ、上帝の愛を思へ、たゞ上帝に依賴せよ。博く人生を思へ。

中島貞子孃に書狀を發す。家庭雜誌を送る。昨朝母上銚子に歸省せらる、これを小網町河岸に送る。收二と共に直ちに上野公園の櫻花を見る。

出社して、午後三時に及び退社。歸路、嵯峨のや君の宅を訪ふ。露西亞文學を語りぬ。

一昨日は出社せざりき。

夜、靖國神社にて校正す。歸路、大久保君の宅に行き兼ねて氏より聞き置きたる井伊家公子教育の事を諾し、氏の推擧を賴みたり。何故に新聞社を退きて此の退隱的生活をえらびたるか。曰く世に暫時分離して讀書生とならんがためなり。

我が詩人たる可き使命は已に決したり。嗚呼如何に高潔にして自由なるか、詩人の職。

讀書錄。

シルレルのウイルヘルム、テル、國民之友、家庭雜誌、有神新論。

十二日。

昨日の夜、大久保氏を訪ふ。金子馬治氏あり。三人共に語る。金子氏より、氏の友なる某青年の自殺せし事を聞きたり。

本日午後今井君と共に向島の櫻花を見る。

吾が希ふ處は獨立の生活なり。自由の生活なり。われ實に農夫の生活を取りたくなれり。言ひ換ふれば山林田園の生活を送りたくなれり。されど決して自から高うし自から淸うして自から世とはなれた

る平安をのみ願ふには非ず。

余が知り、學び、思はんことを願ふものは、

自然及び人間の事實なり、眞理なり。人の美なる想なり、信仰なり。言ひ換ふれば自然及び人なり。

十三日。

午前八時前家を出でゝ麻布區霞町なる竹越與三郎氏を訪ふ。其の用事は國民之友編輯の事なり。中村修一氏入牢したるため、われ其のあとを受けて國民之友編輯者となりたればなり。與三郎氏不在、出社ときゝ直ちに出社して相談を遂げ事務を引きつぐ。

夜、富永德磨氏來訪談話。

中島サダ子孃より來狀。

吾より直ちに絶交狀を送る。そは彼の女の書狀中共に同情の人と思ひて交はりたしとの句ありたればも。

彼の女が此の書狀たるや、吾が溫かき情をして忽然冷却せしめたり。彼の女は思ひしよりも多感眞摯ならず、到底世間通俗の一女たるを免かれずと見えたり。

嗚呼高潔多感、多情、眞摯、無邪氣にして且つ同情に富み、學と文とを兼ねて、戀愛の幽邃、哀深、悲壯にして春月の如き消息を解する女性何處にあるか。

十七日。

媾和談判成りたりとの報あり。

國民之友の編輯を昨日よりはじむ。

昨日の大久保氏の話ぶりにては公子教導の一件は不成功なるが如し。一昨日午後、山路、宮崎の二氏及び收二と共に散歩を試み薄暮宮崎君の宅にて牛肉を煮て食ひ快談十時に及びぬ。

直往前進、大に實際界に戰ふ可きかとも思ひ、または詩人たる素思を行ふの便宜をとることを計らんかとも思ふ。

詩人豫言者の爲す處は敎ふるにあり。されど英明、德實、高尙、偉大なる爲政家は余の理想なり。

十字架のクリストを思はゞ、凡ての事献身的ならざらんと欲すと雖も得ず。

文章を以て立つと、行爲を以て立つとに論なく吾が終生益々シンセリテイなるを得ば可なり。

一生五十年已に半ばを過ぐ。起て、爲せ、醒めよ。

人生は眞面目なるぞ。

爾は宇宙に生ける永久の靈なるぞ。

天の星なるぞ。

○十字架上のイエス。

嗚呼イエスキリスト、君は千八百九十五年の昔には此の世に吾と等しく肉を持ちて空氣を呼吸せられしなり。

今やわれ如何に君を此の地上に見んと欲すと雖も得ず。
されど君が骨て地上に居たまひしは事實なり。
十字架に縣けられしも事實なり。
君が人間の罪惡を救はんが爲めに、一生をさゝげ給ひしも事實なり。これ詩人の作り事にあらず、吾等の妄想の一隅に存する事にあらずして、此の天地間に實現したる事實なり。
吾もまた此の生を此の天地間に享けて今已に二十五歳の日月を費したり。
天地てふ不可思議なる連續の間に君と吾とは現はれたり。
此の事實に眞面目に對する時に於て、吾は人間の愛、人間の義務を感ず。

二十三日。

朝まだきより春さめそぼふりはじめぬ。
二十日の夜より發熱したる風邪、今朝は大にこゝろよし。されど未だ全くはぬけず。
伴武雄氏より一片のはがき來り氏のほそ〳〵たる息のねのうちにこもる炎々たる青年の熱情をもらして筆底涙あり。吾をして泣かざるを得ざらしむ。これは數日前の事なり。昨日われ一書を出し置きぬ。
金子馬治氏、吉見チエ氏、石崎松兵衛氏に音信す。
庭の若葉、雨に濕ひ、翠滴りて玉をなす。

二十四日。

此の吾が身が宇宙不可思議の理法に驅られつゝあるを思ふ時は悚然たらずんばあらず。

二十九日　月曜日。

昨日父及び收二と共に大久保村につゝじを觀にゆき、郊野を散歩して歸る。
露國干涉は愈々事實となりぬ。人心これがために激昂せるが如し。國家の前途愈々多事ならんとはする也。
國民新聞に掲載せんと欲し、山林の友に與ふるの書を書きつゝあり。

五月

一日。

本郷なる大學病院に並河平吉氏を見舞ひて今歸宅す、夜十時なり。
富永德磨氏を同伴せり。
富永氏と行く〳〵人生の不可思議を語りぬ。
並河氏は脚氣病なり、枕頭に在りて暫時ものがたりぬ。
富永氏の家庭の不幸をきく。
シルレルのウイルヘルム、テルを讀みつゝあり。
所感多し、

露國との形勢迫れるが如し。若し破裂して一大決戰を惹起し來らんか、實に世界史上の一大變動たらずんばあらず。

かれを思ひ、これを思ふ、實に所感多し。

此の世界、人間の世界は不思議なる哉。

幻影の如き哉。

六日。

昨日は日曜日、午前十時、會堂に出席し植村正久氏の演說をきゝ午後二時より富士見小學校同窓會なるものに出席して艦隊從軍の談話をなしたり。

今日午後出社す、當直なり。

平田久氏と共に氏の下宿にゆき、晩食す。

薄暮下宿屋を出で、再び民友社に至り雜談の後銀座街頭を散步して平田氏に別れ歸宅すれば十時なり。

吾は必ず非常なる進步を今後兩三年のうちに見る可しと信ず。

兎に角に感慨多し、激昂する也。

已に二十五歲！　泣きたくなるなり。碌々たる一書生！　恥づ可き哉。

されど吾は吾を信ず。

天地、人生、社會、人間、是等のものは新らしき光もて照らされんことを吾に待つなり。

國家多難なるが故に實際的活動を吾頻りに望めども、また一方を顧みて詩人の職を重んず。斷乎、われ詩人たる可きのみ。

冷遇せらるゝとも關する處に非ず。自家の本領は自家これを信ずるの外なし。

七日。

所感あり、左に錄す。

人の尤も戒嚴す可き時は則ち世に立ちたる時にあり。言ひ換ふれば讀書生として理想界をのみ瞻仰し年少淸爽の意氣に充ちあふれたる時より、實際社會に突入して世の風潮に浸染せらる可き時に遷りたる間際に在り。

反省するも此の時なり。

戰ふも此の時なり。

健全なる發達の長途に上ぼるも此の時なり。學ぶ可きも此の時なり。然るに滔々たる靑年を見るに殆んど此の時に直に社會水平線のうちに沒入し始むるなり。今井を見よ、田村を見よ、其の他社中の人人を見よ。たゞ吾は斷じて然らざる可きを誓ふ。

斷言し且つ自信す。吾はこれよりして始めて大成の途に上ぼる可きなり。

故に如何なる社會的困厄をもあへて辭せざる可し。

如何なる試驗をもあへてさけざる可し。

戰爭！　戰爭！　吾は戰爭を歡迎せん。

苦戰を歡迎せん。討死すらも解せじ。

自由なる自然の兒！　何を齷齪たる可き！　人間將に自由なる可し。自由なる精神を鼓舞して行くに於てまた何の沒落ある可き。

然るに一度び彼の今井氏の如き田村氏の如き水谷氏の如きを思ふ時は、默々たる人生の悲戲此の上もなきを見る。

水谷はコンモンセンスを缺きたり。今井、田村は俗界に陷いりたり。彼等は始めより不完全にてありし乎。或は然らん。されど兎に角に年少なる讀書生としては彼等は世の普通の青年と異なりし也。

今や、月日の轉ずると共に、波瀾なき悲戲、墓中の悲戲とも言ふ可きは彼等の運命なるを見るなり。

山路愛山は、英靈なる青年の夭死を哭しなり。されど、人若し泣く可くんば默々として世の波に洗はれつゝある青年の身の上を泣く可し。一度び友の爲めに哭し、一度び自家激勵して玆に所感を誌し置く。

十二日　日曜日。

國民之友未だ發行解停にならざるが故に社務は至つて閑暇なり。

社中小品に「豐後國佐伯」の題にて十日、十一日、十二日の三日間を連載したり。吾が哀感これに由りて、深く佐伯生活の當時の回想のうちに動きぬ。

昨夜は吾が宅にて青年會を開きたり。比較的に盛會なりき。吾が宅にて青年會を開きたるはこれが最初なりとす。

今日午前教會堂に出席して植村正久君の說教をきく。午後は富永德麿、尾間明、山口行一の三氏と共に並河平吉君を本鄕大學病院に訪ひぬ。それより上野に出で遂に道灌山の方まで散步したり。

春日麗らかに輝き、新芽綠葉、風にざわつき、吾をして春の光のうちに融化せしめたり。

歸路、藪そばに至りてやぶそばを食ふ。

歸宅し見れば野村勉少尉の書狀ありたり。

昨日市山たき孃より書狀あり。兩三日前われ母の意を受けて上京來遊の旨を傳へたれば其返事なり。

たき孃は目下橫須賀の親族に在り。昨日、銚子なる叔父來宅せられ今朝歸られたり。これ母の弟なり。

占領地盛京省の部分を支那に返す事に決したるものゝ如し。蓋し露國以下の干涉の結果なり。

就ては今度出づべしとの噂ある占領地返却に關する詔勅に於ては十分事實を明記して露國等干涉の結果遂に此の大屈辱を被るに至りし事を全國民に宣言するを急務とす、との意見を起しぬ。これを同志の人々に通ぜんと思ふ也。

「豐後國佐伯」に就ての執筆は、吾をして次の如き發見を得しめたり。則ち、作れ、然らば成らん。作れ、然らば發明する處あらん。作れ、然らば自から情熱觀察の發達を見ん。

今はわれ大に苦しみつゝあり。則ちわれ政治家たる可きか。詩人たる可きか。實際家たる可きか。豫

言者たる可きか。これなり。

國家の多難なるは吾をして前者たらしめんとし、人生の觀察は吾をして後者たらしめんとす。

生きて肉體に由りて事情を作り、互に隔離せらるゝと雖も等しく一死の必ず來る可き命運に由りて、不知深酷の國に合一すべきを思ふ時は、路傍の人にすら猶ほ握手せんことを欲するの感ある也。

吾は自由なる天地の靈の一なるを自認し得たるが故に詩人たる可し。

十四日。

昨日愈々遼東半島返還の詔勅出でたり。

これ吾國外交史上の大失策なり。

歐洲諸國が東洋に干渉するの端これより發せん。

露國が日本を侮るもまたこれよりせん。

日本膨張史もしばらくは中止なるべし。

嗚呼世界國民の歴史は如何なりゆく可きか。

人見市太郎氏のユーゴーを讀みて今日午後を消したり。ユーゴーよりもカーライルは大なり。眞なり。深し。ウオールズウオースはユーゴーよりも更らに豫言者なり。

無限なる蒼空の下に、過去の見る可からざる人も、隔離して逢ひ見る能はざる人も、悉くわれと等しく此の無限なる蒼空の下に生活呼吸せしを思ひ、またするを思へば一種の平等親和の感起り來るなり。

古も今も。

十六日。

爾若し心さわがしくして情澄まざるを苦しむ時は、爾聲を靜かにして愛讀の詩を唱し來れ。これ神の聲をなくの道なり。爾は爾の哀感を以て充たされなん。

二十一日。

人生夫自身は此の不可思議なる生命その物に對して必ず眞面目なるもの也。

二十二日。

數日來の事を記し置かんと欲す。

國民之友未だ解停にならず、至つて閑散なり。

十九日（日曜日）午前は教會堂を訪ふて植村正久君の說教をきく。「淡白に祈れ」の語、神を父と思への意、吾を動かすこと少なからざりき。午後、富永、尾間の兩氏と收二同道にて牛込より小石川の郊外を散歩したり。關口の水道の樹蔭の美、西の空より湧き出づる夏らしき雲の光、平野綠蔭、凡て皆由談話のうちに看得、瞑想したり。

歸路、富永氏等を顧みて曰く、吾等天國の郊外に在りてまた手を携へ散歩したきものならずやと。吾自から斯く語りし時に無窮の愛、限りなき希望を感じぬ。

二十日の夕暮、これを大久保余所五郎君に語りしに氏の曰く、何ぞ夫れ舊信仰なるやと冷笑一番す。

吾れの曰く、然らず。これ絶高なる人情自からが敎ゆる詩的眞理なり。眞理なり、形容に非ず。
されど實際的にして且つシンセリティなる能はざる大久保氏の如きには到底此の消息を解し得ざるなり。

How I became A Christian を讀みつゝあり。著者は内村鑑三氏なるべし。感ずる處少なからず。

昨日はわれ當直なりしため午後出社して夜十時歸宅したり。歸路神田區の方にめぐり、書店にて露伴氏著「葉末集」の古書を求め歸りぬ。

昨日午前は池田米男君來訪。氏は鹿兒島の人なり。氏より鹿兒島に起りたる二三の悲慘なる事件をききぬ。

兩三日前伴武雄氏に書狀を出したり。見舞狀なり、氏は死につゝあり。

十八日の夜「ローラン夫人とカンネーの姉妹の交り」を譯して家庭雜誌に送る。

心に平和なし。徒らに自から苦しむ。

曰くわれ何を爲す可きやと。これ古き〳〵疑問なり。歲度か決して已に幾度か打破りたるものなり。

曰くわれ全然美文を草する人、物語りを造る人、人情を說く人、自然を歌ふ人たる可きか。詩人たる可きか、一言以て言へば「文學の人」Men of letters たる可きか。

曰くわれ實際の政治界に縱横奔走して今日の吾が國を政治的方面より救ふ可きか。曰く斷然、傳道師たる可きか。

耳に私語く聲あり。汝は一農夫、一樵夫、にして足るに非ざるかと。吾が今日の境遇は其の何れを選ぶもあへて窮する處に非ず。

されど吾が人生に於ける信仰は果して何を選ぶ可きか。

否な吾が性は果して何れに適す可きか。

神樣、希くは判斷を與へ給へ。神の道に曰く、たゞ誠實なれ、たゞ熱心なれ、たゞ同情あれ、たゞ勇氣あれと。若し夫れ此の如くんば爾何れに向ふとも可なり。何を選ぶとも可なりと。

然り、然り。されどわれ常に誠實なる能はざる也。同情ある能はざる也。熱心なる能はざるなり。勇氣ある能はざるなり。

故に此の感あるなり。

われ吾が直感の深きを知る。われの文筆の能あるを信ず。われに敎ふ可き眞理の光あるを知る。吾は「見る」なり。われは見能ふなり。感じ得るなり。

然らばわれ遂に詩人たる可きか。

神よ判斷を與へ給へ。吾は吾が心を信ず。吾が心の見る處は神の眞理にして人の命なるべきを信ず。

われ詩人たるべし。

われは自由の靈なり。故に詩人たるべし。

二十三日。

吾は吾が神を、より明白に見たく、より親しく接したく、より強く愛したし。

神の愛をより深く感じたし。宇宙茫々たり。感情紛々たり。神自づから朦朧たるを免かれず。

われ玆に在り。深夜獨り坐す。

たゞ夫れ獨り在り。此の世界に於て今獨り坐す。

二十四日。

吾は吾が、不信仰と不シンセリテイと愚昧無學とに慚愧苦悶しつゝあり。吾が罪にもだえつゝあり。

吾はクリストイエスの如く神を明白に見て眞實に戀慕信仰する能はず。吾はウオールズウオースの如く自然の生命、力、感化を感得する能はず。吾はカーライルの如く此の不思議なる宇宙人生のミステリアスに就てシンセリテイなろ能はず。ゲーテの如く自然と人情とを博大深遠に抱擁感銘する能はず。

是等は皆な人なり。而して吾は自から是等の人々の崇高なるを信じ乍ら其の如くなる能はず。

二十七日。

先づカーライルを打ちたる光と等しき光を受けてシンセリテイの域に至らんことを務めん。次ぎにウオールズウオースに依りて自然の至大と人情との交通の眞理を學ばん。最後にクリストイエスの十字架に依りて、神を父と呼び得るの大信仰に達せん。

これ已に吾が多少の經驗なり。更らに進んで此の道によらんことを欲す。

夜一時記す。

眞理を求むるに熱心、義を行ふに嚴格、神の愛と智とを信ずるに確實、人情の圓滿を期するに誠實、美を享くるに眞面目、これ吾が目下の題目なり。

六月

十日。

筆をおきし以來忽ち二週間を經たり。

其の間吾に關する重なる事は左の如し。

國民之友二百五十二號及び二百五十三號を編輯したる事。

德富猪一郎氏吾に非常の侮辱を加へたる事、由て退社せんと決し父母の同意を得たるが故に時機を待ちつゝある事。

内村鑑三君と書信の交を結びたる事、われ非常に此の剛毅なる人物を慕ふ事。

佐々木豐壽女史夫妻の招きにより國民新聞社及毎日新聞社の從軍記者と共に晩餐の饗應を受けたる事（其の時はじめて其の令孃を見たり。宴散じて既に歸らんとする時、余、携ふる處の新刊家庭雜誌二册を令孃に與へたり。令孃曰く、また遊びに來り給へと。令孃年のころ十六若くは七、唱歌をよくし風姿楚々可憐の少女なり。）

田村三治氏と共に山本繁子女史を訪問したる事、女史は年若き畫工なり、

吾が宅にて青年會を開きたる事、われ「忘るゝ能はざる會」てふ題にて感話したること。
水谷眞熊氏より來狀、返書差出したる事（氏は病氣にて目下福岡病院に在り。）
眉山川上亮氏を訪問して國民之友夏期附錄を依頼したる事。
煩悶また煩悶、失望と希望相戰ふ。
失望は「われ果して爲すあるの人か」の自問自疑より來り、希望は「神います」の信仰より來る。

十九日。
少しも讀書せざるなり。
信仰は依然として進まず。
社務多端なり。（國民之友編輯）
文章を草すること少なからず。
佐々木豐壽氏を訪問す。（石崎ため氏の事を依頼す）
森田思軒君を訪問す。
內村鑑三君より書狀ありたり。
藥師寺育造氏より來狀。（海城より）

二十一日。
國民之友、二百五十四號の編輯を昨夜終結したり。今日以後五日間は多少の默思、讀書あるべし。

夏は來りぬ。
樂しき夏は來りぬ。自由の異名なる夏は來りぬ。

二十三日　日曜日。
神よ、吾が罪をゆるし給へ。
神よ、人の前に恐るゝ事なく、
　先づ神の前にひれふす事を敎へ給へ。
人に仕ふる前に神に仕ふることを敎へ給へ。
神よ。全能の神よ。愛の神よ。
　此の苦しめる罪人に慰安を與へ給へ。
　爲す可きを敎へ給へ。
神よ、あなたの御前に、常に眞實謙遜せしめ給へ。
常にあなたの御前に在ることを感ぜしめ給へ。嗚呼此の不可思議なる「神の世界」に、
　吾は「人の世」のみ見て苦しむ。
神よ、神よ、神よ、
　淺薄にして不眞實なる吾を敎へ給へ。
就眠の前。此の筆をとる。

此の人間の世界。人間の生涯。其の不思議なる事は依然たる也。爾決して、其の不思議になるゝ勿れ。不斷、此の不思議に痛感せよ。

爾の常に思ふ處は此の人生の如何に不可思議にして幽玄なるかにぞあるよ。

區々の事に思ひ煩ふ勿れ。

不思議なる哉。此の紛々たる人の世。人の生涯。人類の歷史。此の天地萬有。此の吾、凡てこれ不思議なる哉。

二十五日。

近頃、北海道移住、農業を營み、獨立獨行したしとの希望起りたり。其のために、參考として數日前、弟收二は國民新聞社より左の三書を携へ歸りぬ。

北海道農業手引草

拓地殖民西錄

北海道地質略編

而して、われもまた、友人小谷弓彥氏より左の二册を得たり。

北海道移住之栞　一編、二編

小谷氏は北海道協會の役員なり。

昨朝、社用にて竹越氏を訪問したる節、氏より北海道移住の事を多少傳聞したり。

午後佐々木豐壽氏を訪問して傳聞するを得たり。

文學者を訪問し、新聞社員と交際し、近來益々獨立自由の生活を望むに至りぬ。

雇はるゝ者は如何なる口實と體裁とを以てするも多少の奴隸たるを免かれず。

寧ろ自然と戰ふ可し。勞苦を選んで自由を取るべきなり。

土曜日（二十二日）の午後一時過ぎより築地なる府立尋常小學校生徒のために厚生館の一室に於て乘艦中見聞の演說をなす。五百餘名集まる。此の演說を了はりて後、直ちに紅葉山人を訪問し國民之友夏期附錄を託す。辭す。小西氏の譯文を改作することを諾す。夜小西增太郎氏を訪問す。此の事を語る、氏もまた諾す。トルストイの一作を得。昨日午前、竹越與三郎氏を訪問して此の事を語る。

晝飯を竹越にて食す。歸路、塚越君を訪問ず。また內田千代猪夫人を訪問す。また佐々木豐壽氏を訪問す。晚食を佐々木にて食す。歸宅は夜八時過ぎなり。

今朝露伴を訪ふ、午後齋藤綠雨を訪ふ。また紅葉山人を訪ふ。皆な附錄に關する用事なり。

二十七日。

神に祈る、

天にまします神よ。愛にみち給ふ神よ。吾が心の苦しみを取り去り給へ。凡てを神にまかさしめ給へ。

古より今に至り、生より死に至り、凡ての法を治め給ふ神よ。死せる吾が友伴氏をめぐみ給へ。幽冥をたどるかれをあはれみ給へ。吾等生けるものをめぐみ給ふと等しく、死せる吾が友をあはれみ給へ。

いつまでもかはる事なく吾等友を愛するの眞理を確く信ぜしめ給へ。

吾等兄弟が目下企てつゝある、自由獨立の道を宜しきに導き給へ。希くば吾等をして凡て世の束縛より脱して高潔自由に生活するの法をとらしめ給へ。

自然の兒たらしめ給へ。山林の兒たらしめ給へ。人情を自然のうちより見出すの敎をとらしめ給へ。

勞働の貴きを學ばしめ給へ。

北方の荒野に辛苦艱難を忍ばしめ給ひ、以て眞の生活に入らしめ給へ。吾が老いたる父母をあはれみ給へ。願はくば兒等の愛情を以て、其の愛情を一致せしめ給へ。

兒等を父母の誤解より救ひ給へ。

堅實なる覺悟、斷然たる決心、周密なる用意を以て此の道を着々行はしめ給へ。必ず吾等を北海の陸に送り給へ。

三十日。

吾が求むる處の者、何ぞや。

吾が信ずる處の者、何ぞや。

吾が爲すべき者、何ぞや。

名と利とこれ吾が求むる處に非ずとせば、吾が此の世に於て求む可きもの何ぞや。吾は何を得んとて斯くまでに悶くぞ。

否、否、吾果して名と利との誘惑を感ぜざるか。

吾が求むる處のもの、戀か。

七月

三日。

夜更けて此の筆をとる。

一日の朝、津田仙氏を麻布本村町に訪ひ、北海道の事を尋ねたり。

二日の朝、女子學院校長矢島かぢ子女史を訪ひ、石崎ため孃の事を依頼したり。午後、千屋氏に贈品の事に就て奔走す。

昨日より今日にかけて、小説に執筆す。未だ成就に至らず。

北海道行は自由獨立信仰のために必ず實行すべきものなりとの意愈々熾なり。

昨夜、熱涙神にいのる。

吾が心は苦悶を脱する能はず。刻々自から問ふ「吾何を爲す可きや」と。

反みて自己の短才、無學、下劣、浮薄なるを痛嘆し、神に仕ふる人に非ざるを泣く。

嗚呼神に祈る事を怠る勿れ。

四日。

今後、朝毎事をはじめ、業を行ふ初めに於て、第一に神に祈禱する言葉を此の「欺かざる記」に記すべし。文字は心の印象なれば也。

在まさゞる處なき大神よ。わが弱きを憐れみ給へ。愛に富み給ふ神よ、希はくはわが罪をゆるし給へ。

わが爲す事を敎へ給へ。

天にいます父よ、天地の主なる神よ。御心のある處に從ふの勇氣を常に祈りの中に得さしめ給へ。われは父の子なり。神はわが父なり。

わが情の自然を信ず。其の自然の發露に從はしめ給へ。

神よ、あなたによりて强く、正しく、清からしめ給へ。

神よ、善を限りなきあなたの法律に歸せしめ給へ。善に依りて望を有たしめ給へ。

不思議にして神聖なる世界に於ける人の靈を導き給ふ神よ。限りなき人の望を確かに有たしめ給へ。

あなたの眞理に從はしめ給へ。

多くの暗き靈を憐れみ給へ。吾が母の靈の暗きを照らし給へ。父を救ひ給へ。

吾が行によりて、神の愛と、美と、眞を證するの榮を得せしめ給へ。死にし伴武雄氏の靈の救を得さしめ給へ。

夜、記す。今夜吾が宅にて青年會を開きたり。會するもの吾等兄弟の外に四人ありしのみ。

今日午後出社したり、福池源一郎氏を訪問したり。不在。下宿屋を探したり。

目は目を招き、口は口を引く。

月の美は神の美なり。花の美は神の美なり。これを感ずるは人間の靈の美なり。

迷ふて苦しむ人の靈は、月を拜して且つ慰めを求む。これ自づからの人情に非ずや。

人と雜談する時、神聖の世界、無極の生命を忘るゝ勿れ。

神の義と自由を求めて倦むこと勿れ。

己れ獨自の心中にて描く空想は人に關係なし。故に自由勝手なり。たゞ人に對する時に當つては、須らく一個、神を信ずる男子として徹頭徹尾、眞實正義を以てすべし。靜かに良心の指揮に從へ。

五日。

神よ、希くは世の習慣より脫出して自然の兒として立たしめ給へ。

凡てを汝にまかせ、たゞ決然として、無窮の眞理に從はしめ給へ。北海道移住の事に就き、宜しきに導き給へ。

交友の間をして益々高尙、純潔、眞率ならしめ給へ。

午後芝區兼房町十四番地柴田ツル方に下宿す。

月明に乘じて散步したり。佐々木氏を訪ふ。

六日。

神よ、凡てをなし給ふ神よ。

自然の兒たらしめ給へ。
區々の事に思ひ煩ふことなからしめ給へ。
人の前に正直ならしめ給へ。
善を行ふに率直ならしめ給へ。
倦むことなく、變はることなく、光を求めしめ給へ。
人の靈を賊するの言語擧動を行ふ時に於ては、爾の靈來りて吾を止め給へ。
人の前に恐れざる、神によるの勇氣あらしめ給へ。
内村鑑三氏との交りをして益々眞率深情ならしめ給へ。
父母の靈の暗きを救ひ給へ。
吾が爲さんとする文學の事業を守り給へ。
眞面目ならしめ給へ。

今朝早起、社に到る。内村氏よりの來狀ありたり。
返書を認めたり。

昨日午後野村少尉(房次郎氏)來る。
本夕同道、は印と稱する處にて會食したり。
山口行一氏脚氣衝心のため死去したる旨、午前九時頃尾間明氏より通知し來りしが故に直ちに牛込に

赴く。
茫々乎として夢の心地す。

七日。
一日を正しく送りて安らかに眠らしめ給へ。
山口行一氏の父母の悲みを和げ給へ。
人間の死を深く思はしめ給へ。
此の不思議なる汝の實を感銘せしめ給へ。

九日。
七日の朝、山口行一氏の葬式に會し、落合村火葬場に至る。
國民之友編輯は明日了はる。今後五日間の事を定め置く可し。
How I became A Christian を讀み了はる事。
山口行一氏の事を記して家庭雜誌に投ずる事。
「當直の夜」を成就すべし。
創作と讀書とは必ず並行せしむ可き事、これ決斷なり。今日まで大に惑ひたる處なり。
父母の銚子行を送る。(午後八時)

十日。

神よ、殘に勇猛堅固の氣象を以て突進するのインスピレーションを給へ。

午前十一時四十五分發の汽車にて行一氏の阿兄、骨を携へて歸京するを送りぬ。

十一日。

午前出社、午後退社。

夜、内村鑑三氏の「ハウ、アイ、ビケーム、エ、クリスチアン」を讀む、明日は必ず讀み了はらざる可からず。

神よ、吾が心に有る、有らゆる願ひをきゝ給へ。

神よ、吾は神のみめぐみを盛ずること能はざる者なり。

「神のめぐみ」とは吾に取りて何の意義もなし。

神よ。汝吾を憐み給はゞ、此のかたくなゝる心を和げ給へ。汝のめぐみを感謝するを得しめ給へ。

吾が友、山口行一は死したり。突然死したり。

神よ。死の恐ろしき事實を痛感し得しめて、永久の命なる套語に眞意義あることを敎へ給へ。

われをして、英語と獨逸語とに通達せしめ給へ。吾が勉學を助け給へ。吾が父母を安からしめ給へ。

行一氏の父母の悲しみを和げ給へ。

吾がシンセリテイを復活發達せしめ給へ。

自由獨立の生活を與へ給へ。

人の世界の爲めに吾が盡す可き事を示し給へ。

祈る可き事を敎へ給へ。

心のまゝに祈らしめ給へ。

互が諸友をめぐみ安からしめ給へ。

吾が愛戀を清く、深く、永く、强からしめ給へ。彼の少女の愛を吾に與へ給へ。

自殺の迷ひより吾を止め給へ。

失望より必ず吾を救ひ給へ。

廣く世を愛し、人を思はしめ給へ。

十二日。

吾が靈は光明を望めども、吾が肉は暗きに誘はんとす。世は罪惡に滿たされ、人は主義の肉塊に過ぎず。吾に惡み、そぬむを知りて、眞の愛なるもの何處に存するぞ。

吾は吾を失望し、また世を失望し、他の人の愛を疑はんとす。

自然は冷然たるのみ。人は煙に歸し、灰に解け去る。此くの如くにして希望と平安と光明とを吾は何處に求めんとするぞ。

十三日　朝記す。

昨夜、佐々木豐壽氏を訪ふ。十時まで談話して歸る。

歸路、少しく狂氣せり。或は狂氣に非ざる可し、本氣なるべし。然り本氣なり。

愛なる言葉は虛僞なり。人は悉く主義の肉塊に過ぎず。世界は魔殿のみ。死は消滅なり。

不死とは人をごまかす信仰なり。人は互に食ふ動物の一種、品のよき虎、狼、蛇のみ。これ形容に非ず。事實なり。實際が證明し、歷史が證據立つる事實なり。

人情と獸情とは、科學的に云へば世界に行はるゝ同等の現象に過ぎず。

自然とは知る可からざる怪物なり。

人に威張るは積極的主義なり、人に頭を下ぐるは消極的主義なり。

戀愛、友愛、悉く主義の變形のみ。悉く肉の臭氣なり。土の上に生くるもの、肉に非ずして何ぞ。

余は死を恐れず。何となれば生の貴きを知らざればなり。

人間は天性死を恐る。蓋し動物的作用に過ぎず。

人は忽然として死するに非ずや。山口、伴、古川の諸青年は如何。彼は夢の如くに此の世界より失せたり。土となり、灰となり、煙となりたり。これ吾が目前に行はれたる事實なり。

此の世界と此の人間とは意味もなき盲動に過ぎず。これ幻なり。

青き草も黑き土となりておつ。

曰く朝鮮問題、曰く露西亞の東方運動、曰く英國の外交。何となく意味ありげなり。されど、一個人間の主我的、自利的の作用のみ。

宗教家を見よ、何ぞ醜怪なるや。何ぞ自利的なりや。

これ實相なり。眞相なり。理想は妄想のみ。人間の少數者の夢のみ。

有りし者も悉く消えたり。これ極めて怪しき現象に非ずや。

苦心經營する處は何のため、曰く。利己のため。

苦心經營を避くるは何のため曰く。利己的動物作用。

苦心經營するは何のため、曰く。理想のため。

則ち空想妄想の利己的作用。

理想は人なき時に催す主我的妄想なり、人の面を見れば、世の中に出づれば直に吠ゆるもの也。

不死、愛、美、眞理、吾は信ぜず、吾は冷笑す。光なき處に光を求めてより、暗黑世界に暗黑を被るの更らに眞實なるに如かず。

十五日。

余が吾が感情を悉く逐ひ出し盡さんと欲す。

冷かに見て冷かに考へよ。

人間は利己の動物たるに過ぎず。感情も利己のためには音樂に動き、月光に動き、愛人の唱歌に動く。

宇宙は盲目なり。意味もなく、目的もなし。

人は浮沈の木片のみ。

自殺も容易なることなり。人を殺すも一擧手に過ぎず。

吾は極めて冷かに、極めて眞面目なるべきのみ。凡てが面白くなく運ぶ時に、自殺すれば足るなり。

吾が目前に吾を恥しむるの人立つ時打ち殺すの法を取れば足る。

若し出來可くんば。

されど之れも又感情の言ふのみ。

左の如くなれ。枯淡たれ。

十六日　夜一時過ぎ。

昨夕湖處子君來訪談話。氏吾にすゝむるに佐伯氏滯在中の事を、著作に現はすべきを以てす。

今朝佐々城氏を訪ふ。のぶ子孃と語る。

今夕抱一庵原余三郎氏來宅。

今夜のぶ孃に一書を認む。

二十日。

佐々城信子孃との交情次第に深からんとするが如し。戀愛なるやも知れず。

二十五日。

昨夜佐々城氏を訪ふ。十時まで談話す。今夜も亦た至る。

幽愁暗影の如く吾が心を被ふ。

二十九日。

昨朝佐々城信子孃來宅ありて、一時間半許りを一秒時の如くに過ごしぬ。孃は釘店なる孃が父のもとに所用ありて外出したる途に祕密を以て立寄りたる也。吾等は遂に祕密の交情を通ずるに至りぬ。之れ全く孃の母豐壽氏が邪推よりして、遂に孃と吾れとを驅りて玆に至らしめたるなり。吾等は戀愛に陷らざるを得ざるに强られつゝある也。束縛は却つて戀愛の助手のみ。

一昨夜孃が送りたる來狀は吾をして泣かしめたり。孃は眠り能はざる程に苦悶しつゝあり。神よ我等を善しきに導き給へ、淸き高き深き强き愛戀に導き給へ。

信子孃に向つて、公然言ふ可きか。お互は實は戀愛に陷いりてある事を。

八　月

一日。

わが生涯は更に別種の途に踏み入りたり。われ等は戀愛のうちに陷りぬ。

昨日、信子孃來訪す。北海道生活の事は互に其の夢想を同じくしたり。吾れ等は明言こそせざれ、互に一生を通じて相携ふべしと約しぬ。

吾等が前途は夢の如し。吾等の前途は嶮路の如し。吾等は夢の如くに進まずして、一歩々々、必ず此の嶮路を打ち越えざる可からず。

何の故に嶮難なるか、曰く、信子孃の母は吾等の戀愛に反對なればなり。

昨日正午なり。信子孃の來りしは。

一時半頃まで、一秒時間の如くに語り、相携へて芝公園に至る。孃が歸路なれば也。勸工場に入りて買物す。出でゝ公園の内人影少なき處に至りぬ。樹下に憩ひて凉氣を取り、暫時語る。共に一日の閑旅行を約しぬ。曰く、八王子の方宜しかるべしと。あゝわれは孃を得ざれば止まざる可し。母氏をして承諾せしめずんば止まざる可し。戀するならば全身全心の熱血を注ぐ可し。

孃は吾が著作の成功を待ちつゝあり。夜半まで務むる勿れと言へり。必ず病を得る勿れと言へり。されど吾が成功を待てり。

吾等が戀愛はすべからく公明正大にして大膽なるべし。何物も恐るゝ勿れ。陰影にかくす勿れ。日光にさらすべし。月夜に語るもよし。只だ二人語るべし。されどまた人の前に恥づる勿れ。

嗚呼一生！　何ぞや。今日のわが戀愛も昔語りとなるの日あらん。吾等の愛も何時かは土塊のうちに入らん。

神の永遠の生命を信ずる能はずんば愛戀程儚さものはなし。

嗚呼一生！　前途の夢に迷ふ勿れ。今こそわが生命なれ。

信孃より今夜書狀來る。其の中に曰く、小妹はいま明らかにいふ。大兄と相對してかたらふ其時は實に小妹の本心の現はるゝ時なり。何もかもうちあかして語る、誠によろこばしき限りに御座候、家に

ありて種々な苦痛も小妹は常に大兄と相見る其時の樂みを思ひ出し自ら其時を待つべしと思ひよく心を慰められ候云々。然らば之れ己に戀愛に非ずや。

二日。

今朝信孃來りぬ。八時十五分より十時まで語りて去りたり。孃とわれとは最早分つ可からざる戀愛のうちに入りぬ。たゞ未だ互に其の戀てふ文辭を公言せざるのみ。此の次の對面には吾より公言す可し。最後の言葉を約す可し。

六日。

今朝のぶ孃より來狀あり。筆末に曰く「片時もはなれず候君がおもかげ。」可憐の乙女、爾も終に戀に沈みぬ。よし。然らば、限りなき戀愛の泉をくましめよ。

われは今も猶ほ苦しみつゝあり。何をなす可き乎を知らざる也。吾れは幾度か詩人たり、文學者たるべしと思ひ定めぬ。されど、今は「傳道」を望むの心生じたり、一身然り、此の地上に於ける僅少なる一身の生命を傳道に費す可きを思ひぬ。

されど未だ其の何れにも定むる能はざる也。これ恥づ可きの事なり。吾れに吾を安からしむる信仰なし。神の眞理吾れに未だ明かならず。

何故にわれは自殺し能はざる乎。

われは自殺の罪なる可き眞理を解せざる也。故に罪なるが故には自殺せざるには非ず。

われに希望ある乎。曰く、なし。吾れに平和あるか。曰く、なし。苦惱のみあり。われは何事も面白きを感ぜず。

然らば何故に自殺し能はざる乎。死は萬事休す、最一の平和に非ずや。われに一個の鋭利なるナイフあり。以て胸を刺すに足る。

一擧手の事。十分にして、或は五分にして足る。僅かに五分の苦痛。

わが父母、わが弟、わが戀人、わが友、すべて後より吾を追ふ可し。

彼等も遂にわれと等しかる可し。

僅かに數十年、若しくは數十年の遲速。

遲かれ速かれ、等しき運命。

ナイフ用意せられたり。何故にためらふか。

一擧手の勞。

眼をあげて見る。カーライル、テニソンの肖像、アヽ彼れ等も已に死してある也。死園の民に非ざる乎。かの麥藁帽。之れ山口行一のかたみなり。彼れ今何處にある。死の園には友多し。友多し。行一も在り。武雄も在り。

一擧手の事。何故にためらふか。

嗚呼われはたゞためらふのみ、其の理由を知らざる也。

たゞ一個われを憤激せしむるものあり。曰く自殺は薄弱の行爲なり。平和を得ずんば、得るまでは戰へ。希望なくんば希望生ずるまで苦戰せよ。自殺は薄弱の行爲なり。されど、われ已に此の憤激を彈力なきまで用ひたれば、今は殆んどわれを立たしむるに足らず。欺く勿れ。われは未だ眞面目ならぬなり。自殺もなし得ず。希望もなし。われは憐れの男なり。あゝわれは世にも憐れの一人なり。自殺する事も能はず、さりとて希望もなし。苦悶のみ、あゝ苦悶のみ、名づけ難き苦悶のみ。たゞ此の肉體を古びたる衣の如くにまとふ。しかも脫ぎ捨つる能はざる也。

全世界をも征服せんとの大希望ありたる男子。立てよ。

馬鹿を言ふな。弱き事を言ふな。死する勿れ。斷じて死する勿れ。自殺する勿れ。無窮永劫に生く可し。

立て、立て、立て。戰へ、戰へ。何でもよし何事でもたゞ爲す可し。宇宙は全體なり。自たりとて、吾れは吾れ也。宇宙の外に出づるに非ず。

弱き事を言ふな。まけるな。立て。戰へ。爲せ。打て。殺せ。突け。蹴れ。何者か汝をさまたぐる者ぞ。打て、殺せ、けれ、突け。

決して自から殺し、自から敗れ、自から退き、自から失望する勿れ。眞理を求めて止む勿れ。

神の兒たらずんば止む勿れ。

裸體にして天地に立て。

十一日。

日曜日。記憶して忘るゝ能はざる日なり。

本日午前七時過ぎ、信孃來る。前日孃と共に約するに一日の郊外閑遊を以てす。之れ寧ろ孃より申出でたるなり。余之れを諾したり。而して、之れ互に或る目的を有したる也。孃は此日を以て其心中の戀愛を明言し、余が決心を聞かんことを欲したる也。余も亦た此日を以て余が孃に注ぐ戀情を直言し孃の明答を得て、苦悶を輕うせんと欲したる也。互に默契したる此の閑遊は遂に今日實行を見るに至りぬ。されど勿論之れ祕々密々の事。孃と共に車を飛ばして三崎町なる飯田町停車場に至る。着する時、恰かも汽車發せんとする時なり。直ちに「國分寺」までの切符を求めて乘車す。

「國分寺」に下車して、直ちに車を雇ひ、小金井に至る。小金井の橋畔にて下車して、流に沿ひて下る。堤上寂寥、人影なし。たゞ農家の娘、童子等を見るのみ。これも極めてまれなり。吾等二人、愈愈行きて愈々人影まれなるところに至り、互に腕を組んで歩む。吾れ遂に昨夜よりの苦悶及び吾が信孃に對する一切の情を打明けて語りぬ。

昨夜よりの苦悶とは、昨夜われ國民之友校正のため、社樓に在りて竹越氏と雜談の際、談たま〳〵佐佐城豐壽夫人の事に及び、而して竹越の曰く、豐壽さん今日吾宅を訪ひぬ。其の時の話の模樣によれば、信子孃を汐田某に嫁せしむる積りなるが如しと。此の言は極めて簡單なりしもわが心を刺せしと、如何許りぞや。

吾れ自身も承知の事ならん。果して然らば信孃は吾が愛を弄したる也。と苦悶、措く能はず、一言を裁して信孃に送らんと一度書きて捨て、再び書し了はりて、机上に置き、寢に就きたり。

今朝は信孃に共の豐壽夫人の北行を上野に送り、上野より直ちに二人、飯田町の停車場に會することを約し居たれども、余前夜の事を思ひ且つ天曇りたれば、上野に行かざりし。信孃上野より來り、閑遊を果す可きを促す。

すなはち、兎も角も、人なき自由の林に入りて吾が苦悶のありたけを打明けんと欲し、同意して吾宿所を出發したる也。信孃は吾が腕をかたく擁して歩めり。吾れは一語々々、徐ろに語り、遂に戀愛するに至りし吾が心情を語る時、感迫りて涙をのむ。孃も亦た涙をのむ。孃の曰く、汐田某に嫁すゝ云云の事は全く僞報なり。さる事はみぢんもなし。と、孃は吾が愛よりも更らに切なる愛を吾に注ぎ居たる也。吾等堅固なる約束を立てたり。吾等が愛は永久かはらじと。

余はブライアントの水鳥に寄する歌を語りて人生の永久の平和を語り、永生を語り、愛の無限ならざる可からざる事を語りぬ。

遂に櫻橋に至る。橋畔に茶屋あり。老婆老翁二人すむ。之に休息して後、境停車場の道に向ひぬ。橋を渡り數十歩、家あり。右に折るゝ路あり。此道は林を貫いて通ずる也。直ちに吾等此の路に入る。林を貫て相擁して歩む。戀の夢路！　余が心に哀感みちぬ。孃に向て曰く、吾等も何時か彼の老婦の如かるべし、若き戀の夢もしばしならんのみと。更にみちに入りぬ、計らず淋しき墓塊に達す。古墳

十數基。幽草のうちに沒するを見る。吾れ曰く、吾等亦た然るべし、と。

更に、林間に入り、新聞紙を布いて坐し、腕をくみて、語る、若き戀の夢！　孃は乙女の戀の香に醉ひ殆んど小兒の如くになりぬ。吾に其の優しき顏を重げにもたせかけ、吾れ何を語るも只だ然り〳〵と答ふるのみ。日光、綠葉にくだけ、涼風林樹の間より吹き來る。回顧。寂又た寂。吾曰く、林は人間の祖先の家なりき。今は人、都會をつくりぬ。吾等は今自然兒として此のうちに自由なるべしと。默又た默。孃は其の顏を吾が肩にのせ、吾が顏は孃の額に摩す。孃の右腕、力なげに吾が左腕をいだく。默又た默。孃の靈、吾に入り、吾が靈、孃に入るの感あり。吾れ、頭を擧げて葉のすき間より蒼天を望みぬ。言ふ可からざる哀感起る。吾れ曰く、吾が心何となく悲し。されど悲しきは思ふに兩心相いだく、其の極に起る自然の情なるべし。此の悲哀の感は、吾が愛戀の情をして更らに眞面目ならしむと。孃はたゞうなづくのみ。

林を去るに臨み、木葉數枚をちぎり、記念となして携へ歸りぬ。境停車場にて乘車す。中等室、吾等二人のみ。不思議に數停車場迄は一人の吾等の室に來るものなし。吾等は坐を並べて坐し、窓外の白雲、林樹、遠望を賞しつ、寧ろ汽車遲かれと願ひぬ。余が歸宅したるは五時半なり。（十二時過ぎ）

十二日。朝認む。

孃は吾れに許すに全身全心の愛を以てすと云へり。されど孃は一種の野心を有す。曰く女子の新聞事業。

其の爲めに孃は合衆國に行くことになり居れり。故に孃は曰く、吾等は已に一體たるべし。されど夫妻となりて一家に住むに至ることは何年の後たるを計り知るべからず。われ曰く、ヨシ、吾等は一家に住み得るに至るまで待つ可し。されど夫妻は夫妻なり。われ等は自己の野心のために戀愛をも犧牲にするは酷なり。吾等は何時までも待つ可し。たゞし、「待つ」は「冷ゆる」の意味たらざらんことを望むと。孃また曰く、われ若し戀愛に於て御身に失望せば、斷じて再び戀せじと思ひたり。されど今は互に心も打明けて知られ、之に越したる嬉しき事あらずと。われ曰く、余は御身との戀を成就せずんば措かじと思ひ定めぬ。如何なる事ありとも成就さす可し。戀せば將に死するまでと決心せりと。かく互ひに語りしは未だ櫻橋に到らぬ前、一橋さびしくかゝる寂寞の場なりき。橋に立ち、流に上下を一目にみるを得。水流矢の如く、碧草のうちより走り、また碧草のうちに沒し去る。

信孃の美德は其の剛毅なるに在り、同時に溫和なるに在り。

余曰く、吾等が戀は飽くまで純潔なるべし。高尙なるべし、堅固なる可し、大膽なるべし。此の四德の一を缺く可からずと。純潔なる可きは、男女兩性の德のために、高尙なる可きは、神に向ふ理想のために、堅固なる可きは、互ひの相いだく心のために、大膽なる可きは、世に對して恥づるなきために。

余曰く。御身若し北米に去らば、われは北海風雪のうちに投ぜん。吾等が戀の前途は「悲運」なり。されど「悲運」何かあらん。

汽車、林を貫いて急行す。窓外白雲深く、哀感交々起る。われ孃に曰く、余のために一曲を歌へと。孃すなはち「故郷の空」を歌ふ。悲壯の調、實に斷腸の調なり。われ此の調に應じて悲歌一つ作る可きを約しぬ。吾は唱歌の達人也。

嗚呼戀愛！　戀愛！　若したゞ地上五十餘年の内の生命の香に過ぎずとせば、嗚呼はかなき夢なる哉。吾等青年の時は忽ち去らん。一日再び來らず。あゝ神よ。吾等は永久の生命と愛の無窮を信ぜんことを望む。希くば人間地上の煩惱のために、愛の聖を破る勿れ。高、信、純の德をたてよ。

嗚呼吾が前程は世の謂はゆる幸運に非ず。われは敢へて荒野の試めに遇はんことを願ふ。此のわれの戀愛は悲運なる哉。されどわれ戀愛の德をして此の悲運に勝たしんめと願ふ。否な、悲運を以て戀愛の德を高めんことを願ふ。たゞ此の時、祈る、吾の愛、如何なる時にも、惑はざらんことを。戀愛も永生の信仰も、凡てこれ人間の痴情に過ぎずして、宇宙人生の眞相は冷刻なる不思議なりとせば、生命は分時も堪ふ可きものに非ず。されどわれクリストの敎を信ぜんとするもの也。此の眞理を信ぜんとするもの也。

十二日。

心張りさく許りに苦し。戀愛に永生の確信伴はずんばこれ靈魂の地獄なり。今日午後、孃を訪ひぬ。今夜、孃と吾が前途の世難を思ふて悲哀幽愁に不堪。

青年の年代忽ち過ぎん。戀愛の香忽ちさめん。かく思ふ時靈の氷る心地す。悶き苦しむ。熱涙もて神

に祈りぬ。孃に一書を認めたり。

十六日。

夜十二時、神に祈りて曰く。全心全力を以て爲さしめ給へ、　。

今夜バイロンのチヤイルドデハロルド中のローム（Rome）を讀み、「時」の不思議なる力に感じて涙眼にあふる。バーンスの Ae Fond kiss を讀みて泣く。

此の兩三日新體詩を得ること四五、獨歩吟、沖の小島等なり。昨朝のぶ孃來宅。薄暮來狀、曰く發熱就床、明日來訪を望むと。今朝これを訪ひ午後五時まで居たり。

昨日午後五時頃辨三郎氏來る。收二及び尾間を伴ひ西洋料理を馳走し、新橋に送る。

十七日。

午後佐々城信孃を訪ふ。今日は昨日に引きかへて發熱甚だしく、苦悶見るに忍びず。氷嚢を其の頭に加へ暫時看護す。午後四時歸社す。

歸社、歸宅の後、胸も張りさく計りに苦し。戀は苦しきものなる哉。されど吾が心のこれに由りて深遠高調に赴くを感ず。愛の消息は音樂の消息よりも强し。悲壯なり。わが心を苦しむるものは戀のみに非ざる也。天職に對する苦悶もある也。

嗚呼幻の如き世なる哉。苦しみ、悲しみ、もだえ、泣き、笑ふ。茫然として得る處なし。

自然の無窮は靈魂悶々の無窮を示すに非ざる乎。幻の如くに吾には見ゆ。

凡てを神の慈愛にまかせんことを願ふ。われは未來の信念なくんば生くる能はず。此の現今の地上の肉體の生命の活動受動は、地上ならざる肉體ならざる生命の、永久の光明に入るの源泉に非ざるならば暗夜の絶望なり。

二十日。

十八日九時頃のぶ孃を訪ふ。熱度減じ、たゞ床上に横臥し在りたり。薄暮まで留まりて談話したり。午食を子安等と與にす。

十九日は發熱日ゆゑ如何あらんと案じて到り見れば、幸ひに發熱せず。午食前まで談話して歸りぬ。薄暮再び訪ふ。本支氏歸宅して在り。籐製の臥床に横にたり、吾は其のふちに腰かけ、本支氏は傍らの診察寢臺にて按摩にもませつゝ、かくの如くにして九時に至りぬ。吾等の手は幾度か堅く握ぎられたり。孃は吾がために歌ひぬ。吾はたゞ語るのみ。本支氏は頻りに滑稽の談を投げて吾等を笑はしつ。余が去らんとする時、本支氏は眠り居たり。孃は庭に下りぬ。余は裏門より出でんとす。孃は其の病餘の衰體をかゝへて送り來る、吾等二人、裏門に別れんとす。余孃を抱きて曰く、速かに全快し給へ。孃、余を抱きて答ふるに、キッスを以てす。余、門を出づ。孃、立ちて暗きかげに其の體をかすかに現はす、余かへりみて禮す、さらば。孃もまたかすかに、さらばと言へり。余が手にバイロンあり。余はバイロンを思ひつゝ、孃との戀愛を思ひつゝ、車を驅つて家に歸りぬ。

本日は多忙にして終に訪ふ能はざりしも、心は片時も孃を忘るゝ能はず。

二十三日。

十時頃、信孃を訪ふ。不在。午食を彼處にてなし、假眠一番する時、孃歸り來る。孃は二回われを訪ひたり。

一昨日は殆んど終日孃の家に在りたり。午前九時より午後十時まで。別れに臨んで、庭に送り、また彼の裏門まで！

われは孃を敎導せざる可からず。孃の品性をして更に益々高且つ偉ならしめざる可からず。如何なる事ありとも孃を疑はざる可し。されどわれ日夜、怪しき苦悶になやみつゝあるなり。あゝ嫉妬の魔鬼よ去れ。嫉妬は愛をして濁水たらしむるものなり。火宅たらしむる者なり。昨日は全然われ孃を苦しめたり。口を以て擧動を以てこれを冷遇したり。あゝ可憐の少女、此のひねくれたる吾をゆるせ！

昨夜孃は例に依りて彼の裏門まで送りぬ。されどわれ一握手だに與へずして歸りぬ。

二十五日（日曜日）

孃と同伴、一番町敎會堂に出席す。歸路萱場三郎氏と三人、釘店なる佐々城本支氏の病院を訪ふ。晝飯を馳走になり、午後二時辭して三人共に吾が宅に歸りぬ。また相伴うて四國町なる孃の宅にいたる。本支氏歸り來り、四人與に晩食を同うす。本支氏は直ちに釘店に歸り去りぬ。三郎氏九時頃歸宅するを孃と共に送りて三田の通りに出で、三郎氏と別かれ、われは孃と共に紙屋にいたり、孃のために書翰紙を求めなどしたり。

明記し置く。それより直ちに歸宅(孃の宅に)せんと相携へて歩みぬ。夫妻の如くにして。

余曰く、君は妻、吾は夫、たゞ未だ世間的にこれを公言せざるのみ。精神的に言へば夫婦なりと。孃曰く、勿論なり。今夜のわが裝衣已に細君然たりと、相顧みて笑ふ。

公園に入り、ベンチに腰かけて語る。暗夜、風早く、頭上樹梢鳴り、天上雲走る。慘澹たる光景、吾等少しも頓着せず。低語、溫語、二個の情人は正に戀愛の極に達しぬ。互ひに前途の難を語りて嘆息せり。流涕せり。而して爲す可き事を數へて慷慨せり。而して相抱けり。孃は再び小兒の如くになりぬ、たゞうつう〳〵と戀の香に醉ふて殆んど正體なからんとす。

吾等は非哀の感に打たれ、また歡喜の笑をもらしぬ。夜の更くるを恐れて公園を走り、孃を家に送りて、吾は直ちに歸宅したり。驟雨襲ひ來りぬ。風急に天暗し。

されど幸福の夜！　何ぞ知らん、此の慘澹悲痛を極めたる天使は、吾等が前途のおも影なるかも。

されど吾、孃に曰く、吾等は必ず能くこれを凌駕し去らんのみと。

歸宅すれば十一時半。

二十九日。夜記。

二十六日の夜より三日を經過したり。

此の三日の戀愛史を記すべし。戀愛史の外に記す可き事殆んどなし。

二十七日の夜は不思議なるほど不平苦悶の夜なりき。

例の如くに訪問したり。されど十分談話するを得ず。吾が心には常に萱場氏に對する嫉妬の念あり。氏が孃に對する動作の餘りにラヴ的なるを見るに忍びず、孃が亦これに應ずる動作の餘りにラヴ的なるに不平の血わく。皆これ卑しき嫉妬の炎なり。以て自からこがす也。本支氏は所用にて歸宅せず。由て萱場氏留守居のため宿泊することゝなり、夜更けて余歸路に就くや、孃と萱場氏とは赤門まで送りぬ。余が魂は嫉妬の毒杯をのみぬ。

昨夜(二十八日)は別に變りし事なし。朝は孃來訪せり。樂しく語り、熱きキッスを以て別れぬ。

昨夜佐々城を出でゝ、萱場と二人、芝公園の山に入り、ベンチに腰かけて大に北海道自立策を語りぬ。

今朝早く孃を訪ひ、公園に導き、大に將來を談ず。第一、孃は米國行を止めよ。第二、二人北海道に立脚の地を作らん。第三、しばらく東京に勉學せよ。第四、勉學の方針は余に一任せよ。

孃悉く諾したり。吾等は樂しく別かれぬ。

今夜、孃頗る沈思に陷りたる樣子なりし。明朝其の理由をきく可し。

九月

八日　朝認む。

八月三十一日より今日に至るまで、過ぐる九日間に於てわが生涯の方向は全く一變せり。北海道行を決したるは三十一日なり。

以後引き續きて種々の事起りぬ。信子孃が萱場氏に對つて、われと信子孃との關係を公言して氏の希望を斥けたるも此の間なり。

信子孃が幽愁悲哀に陷り、離別の苦に泣き暮したるも此の時代なり。遠藤よき孃が常に信子孃とわれとの戀愛に同情して、一方に信子孃を慰め、一方にわれと信子孃と相逢ふもなほ人目を引かざらしめたるも此の間の事なり。われと信孃と終夜語り明かしたるも此の間の事なり。北海道拓殖の事に付き參謀者たることを承諾し、萱場氏自らも吾等のラヴを同情視したるも此の間の事なり。われ收二にわがラブを公言したるも此の間の事なり。德富氏に公言したるも、竹越氏に公言したるも此の間なり。月明に乘じ深更に至るまで、佐々城氏の庭園に信子孃及び遠藤よき孃と共に、柳樹蔭に籐臥床を置きて談笑したるも此の間の事なり。

德富氏はバイロン詩集を送りぬ。社中は不思議の思ひをなせり。鹽原行（信孃）の計畫も此の間になりぬ。

孃は殆んど悲痛の樣、傍らに見る目も哀れなるに至りぬ。人なければ泣くのみといふ。六日午後、豐壽夫人を上野に迎へたり。豐壽夫人の歸京はわれ等親話の自由を奪ひぬ。

孃よ。此の普通をはなれたる青年に全心の愛を捧げたるは不幸なる哉。孃よ、吾を許せ、あゝ吾を許せ。

嗚呼神よ。此の足らざる吾をも全心を以て愛する可憐の少女を常に守り給へ。更に祈る、吾等二人の

望、喜、光、は互ひの愛なり。益々清く且つ高く、且つ堅固ならしめ給へ。

十日。

靜に此の一身を顧みれば實に責任の重きを知るなり。

人生は眞面目なり。

神は吾に豫言者の火を求む。

わが愛は自由を求む。

われに全身の愛を捧げたる少女あり。

われ北海風雪のうちに沒せんと欲す。

われの後に父母一族あり。

われの傍にわれを賴む青年あり。

一身の生死失落存亡は恐るゝ處に非ず。あゝ神よ。われをして世人のために、此の國の爲めに、此の世の爲めに、此の五十年を費さしめよ。土地を得て何かせん。富を得て何かせん。此の地球上の生命は唯々靈の修練のみ。

十三日。

昨日（十二日）午前、收二及び尾間氏に送られて上野停車場に到り、六時半發の汽車にて發す。

那須停車場より車にて鹽原に向ひぬ。鹽原は古町會津屋なり。未だ古町に達せざる半里許りの處にて

信孃に遇ふ。車を下り、信孃と共に歩みぬ。吾等の位置の容易ならざる事を語り、大に覺悟して決し、て惑はず、益々高潔親切を期し、一には湖處子君等をして吾等のあとを追はしめ、一には世の瞻仰する處となる可きを言ふ。互に感激して涙をのみぬ。

會津屋に着し、夜半語りて盡きず。前途を語り、人道を談じ、遂によき孃、信孃と三人、聲を呑んで哭するに至りぬ。

佐々城氏突然來り、遂に吾等が今日までの愛史を打ち明けて語らざるを得ざるに至りぬ。われはありのまゝに語れり。

豐壽夫人より信孃のもとに一書飛來せり。吾讀んで思はず寸斷したり。あまりに吾等を邪推して殆んど人を誤解するの極、吾が面上三斗の泥を塗られたるの感あり。憤激措く能はず。本支氏外出の後、痛哭す。二孃の交々慰むるによりて僅に怒情を抑ふるを得たり。

本支氏は吾が凡てを聞きて夫人と相談して後に決答すべしと答へたり。われ豐壽夫人と相談する爲めに一先づ東京に引き回へす事に定めたり。

今朝二孃と共に散歩して源三位洞窟及び八幡宮に詣でぬ。憂愁痛憤、一變して奮激、決鬪、希望、光明の感にみたされたり。

十五日。夜認む。

昨日（十四日）本支氏、信子孃及び余を呼びて人なき處に至り、曰く、吾等二人の約束はこれを承認

す。元來を云へば、豐壽氏こそ信孃の母ゆゑ、十分此の事には權力ある人なれども、若し四人車を並べて歸京歸宅せば自然と人目を惹き、かくては人の口もうるさき故、今本支自ら母の權をも代表し、責任を帶びて此事を認定す云々。

故に豐壽氏若し苦情を鳴らさば責は本支氏に在るなり。吾等二人の喜び如何。直ちに本支氏に對つて感謝したり。本支氏は午後二時過ぎ發の汽車にて歸京するとて午前十時會津屋を出發したり。

本支氏は余をして猶滯在せしめたり。

午後三時より信子孃と共に歩散に出掛けたり。遠藤よき孃は氣分惡しと留守居せり。吾等二人手を携へて源三位洞窟の茶屋を訪ひ、それより尙ほ溪流を遡りて橋を渡り、淋しき谷に至りて止む。秋晴幽谷、太陽滿山、人影絶寞、此の時此の境に愛戀の二人相携へて朝の歡喜を胸にたゝみつゝ歩む。何の不足する處ぞ。一生のパラダイスなり。

今日午後三時少しく前より三人相携へて散歩す。此の度は谷を上りて更に遠きに到る。眼下夕陽山村に滿ちたり。靜景幽景。カーム、エンド、フリー。行く〳〵秋草花を集む。

信子、よき子二孃は野花を採て頭髮に挿しぬ。

十八日。夜。

吾今北海道室蘭港の宿樓にあり。

十六日午後三時會津屋を出發せり。離別の悲哀、涙をしぼりぬ。信子孃の悲嘆見るに堪へず。

信子孃よき子孃送りて福渡の先まで來りぬ。われ强ひて去らしめ車にのぼりぬ。孃等泣く。吾亦車上にハンケチをぬらしぬ。顧みれば二孃立ち止まりて手巾を振りつゝあり。山をめぐりて遂に見えずなりぬ。

那須停車場に午後七時二十分乘車。青森には、十七日午後四時到着せり。

十六日の夜發熱し、二孃水をくみ來りて、頭及び喉を冷やし呉る。十七日夜汽車中にて發熱せずやと心配したれども案外に安眠するを得たり。十七日終日、東北の野を窓外に望んで馳す。野馬の夕陽に立つなど吾が眼には珍らし。

青森にて中島屋に投じ、午後十時出帆、函館に向ふ。睡眠の中、函館に着す。吾が眼はじめて北海道を見たり。午前八時出帆、室蘭に向ふ。途中波高し。午後三時半室蘭に安着せり。丸一に投じぬ。

青森より一通、茲より一通、信孃に發書。牧二に一通茲より發書す。

幽愁、憤激、無念の涙、離別の涙、希望の光、絶望の面影、人生不思議の幽懷、わが胸に往來せり。細雨霏々、夜寂寥。

二十日。

嗚呼吾少しも信孃を忘るゝ能はず。

十九日——午後四時札幌に安着したるが故に五時東京に向けて安着の發電をなし、且つ母の心如何と問ひ合せたり。其の夜、答なし。今日終に返電なし、餘りの事に思ひ豐壽氏夫人に問ひて信子孃鹽原

より歸りしか、直に返事を賴むてふ電報を發したり。時に午後四時。而して今は九時半、尙ほ返電なし。

信孃來りて吾をたすけ、共に小屋に入りて開拓に從事する事に就きては、定めて彼の女の兩親の苦情多かるべしと信ず。信孃は必ず能く之を打破するを疑はず。

昨夜信孃、よき孃、及び牧二に書狀を認む。

今日薄暮實に人生の悲哀を感じたり。人間は何の故にかくまで齷齪たらざる可からざる乎。何故にかく苦心經營せざる可からざる乎。

何の目的ぞや。何の必要ぞや。何の爲めぞや。

今やわれ、語る可き親友なく、遠く戀人を思ふて相見る能はず。孤影落寞として天の一角にあり。且つ苦心慘澹の事に從事す。

人の深き靈を有するもの、誰れか此の生の何の意義たるかに思ひ及ばざるものあらむや。されど吾、神の愛、永生の信仰、哲人の生涯などを思ふて無限の悲愁を追拂ひたり。

二十一日　朝。

ヒロイツクなれ。無益の愁に苦しむ勿れ。

將に北海道に於てなす可き事をつとめよ。信子は今如何にしてある乎。其の母と衝突して苦みつゝあらざる乎。或は病重くなりしに非るか。尙ほ鹽原に在る乎。母の心解けざるが爲めに發電せざる乎。

吾が一寸歸京し居ることを望み居らざる乎。

わが父母は今吾が北行に就て大に悲みつゝあらざる乎。其ため更に老衰を加へざる乎。

凡てかくの如き心配悲愁、吾が心をして鉛の如く重からしむ。

されどヒロイツクなれ。頭上神の愛護あり。凡て神にまかし爾は爾の事に從事せよ。

二十三日　朝。

信子孃より電報來る。「父の手紙讀みて、われのが着くまで返事よこすな」。われ甚だ心配せり。

二十四日。

朝、道廳に出頭す。白仁氏に面談の結果、空知川河岸に出張することに定まる。道廳より歸るや、直ちに小川氏を訪うて相談する處あり。直ちに吉澤氏を訪ふ。吉澤氏在らず。信太氏を訪ふ。午後高岡氏來訪、共に吉澤氏を問ふ。氏と相談の上にて一人出張することに決す。歸路新聞社に安部氏を問ふ。

リンコルンを讀みて夜に至る。

夜、信孃及び本支君より來狀ある可しと思ひしに來らず。芳賀及び依田の二青年來訪。信子孃に一通を草す。

願書を差出したる上にて、一先づ歸京し、大に相談する處ある可きに決す。

二十九日　安息日。

函館港旅館に於て認む。

我が生涯は愈々多端になりたり。

二十五日朝空知太に向つて發したり。空知太に於て雨中の北海道森林を見たり。三浦屋に於けるわが心緒亂れて糸の如く、苦悶措く能はざりき。心を轉じて殖民小屋のうちに住む他の憐れなる同胞の上に思ひ及びし時、主我的幽愁は忽然として晴れ、同情の哀感油然として起りぬ。

空知太よりは空知川沿岸に出づるに不便なるが故に、歌志内に回行したり。歌志内旅舍に於て、篠原熊夫氏と稱する御料局の官吏に遇ひ、此の人に井口某等の所在を聞知し、其の夜は一泊したり。信子孃に一書を出しぬ。

二十六日は午前七時頃より宿の少年一人を連れて、空知川河岸に出立したり。路一山を越ゆ。行程一里强の山中の幽邃なる、紅葉の火を點じたる、皆な北海道の美なり。空知川沿岸に難なく出でたり。難なく井口某等に遇ひたり。土地選定を爲したり。彼等は移住民の小屋に居たり。三間と四間位の小屋にして極めて粗造なる者なり。われつら〳〵内部を見たり。實にこれ立派の者なり。以て獻身者の住家たるに足る。以て勞苦する人の家たるに足る。以て讀書と沈思と祈禱とに足る。以て筆を取るに足る。代價を聞くに、曰く、一坪一圓ならば可なりの小屋を造り得べしと。

寂寞たる森林實にわれを動かしたり。

午後二時頃歌志内に歸りぬ。其の夜また信子孃に一書を出したり。

其の夜獨り散歩す。鐵道線路にそひて歩む。月、山の端より出でたり。

（眞理の追求）。瞑想沈思する多時。仰いでは無限の大空に對し、天地の不思議を思ひ、顧みて吾が今日の境遇を思ひ、決然として覺悟する所あり。眞理の研究、眞理の紹介。これ吾が天職なり。眞一文字に此の天職に從事すべしと思ひ定めぬ。

十萬坪を借金して開拓せず一戸分若しくは二戸分を自作することに思ひ定めたり。

眞理の研究、眞理の傳播、これ吾が天職なり。風吹かば吹け、雨降らば降れ。政治家をして華麗なる舞臺に舞はしめよ。文學者をして、大家連の虛榮を追はしめよ。吾はたゞ此の天職に眞一文字に進まんのみ。今日まで、多くの誘惑來りぬ。吾が薄弱なる、常に眞誠なる能はざりき。嗚呼わが天職定まれり。神の眞理。これ吾が命なり。

信子にして已に吾と一體たる以上は、また此の天職を等うせしめざる可からず。吾等一體の愛の結果を此の天職のためにさゝげざる可からず。

人生幾何かある。迷妄の中に一日を送らしむる勿れ。切に光を求めしめよ。

二十七日午前十一時、札幌に歸宿す。本支氏、よき孃及び收二より書狀來り居たり。

豐壽夫人の吾等二人に對する怒は非常なりき。夫人は全く其の平心を失ひたり。半ば狂氣したり。信子に自殺を勸めたりと云ふ。われ之を聞いて驚かず。彼の女は感情の子なればなり。本支氏及びよき孃、收二の手紙皆信子の亞米利加行を語る。吾全然不贊成なり。吾は信子の夫として之を許さず。且つ吾等一體の天職に對し、斷じて此の事あるを得べからず。

其の夜信子孃の來書あり。全然これ彼の女の理性を失ひたる文字なり。彼の女は自殺を企てたりと云へり。其の書遺きを送りぬ。亞米利加に行くに決せりと云へり。よし、信子をして決心せしめよ。これ全然理性を失ひたる決心なる故吾之を許さず。

吾は直ちに歸京すべきに決したり。

二十八日朝七時二十五分、札幌を出發す。トルストイのライフを携へて。

汽車中、讀書と瞑想と、うたゝねとのみ。

豐壽夫人、及び信子孃に告ぐ可き事を一々思ひ出すまゝこれを手帳に書きとめ置きぬ。

何故に吾等一體は北海道にて開拓せんとの決心をなせしか。何故に信子孃の亞米利加行は、吾等一體が斷じて贊同せざる所なるか。わがこれに對する意見を開陳せんがために、信子孃の苦悶を救はん爲めに。吾が一生の大事を決せん爲めに。成るも、破るゝも。

爾、深く吾等の愛の意味を思へ。戀愛の意義を求めよ。

十月

二日。

麹町區富士見町なる吾が宅に於て認む。

一言一行、一擧手一投足の間に於てすら、習慣先入の薄弱、虛榮、不義、我慾は其の墮力的運動を起

さんとす。已に其の運動を始むる時は、容易に停止することなし。

故に決して輕々しく言動すること勿れ。これまた修練工夫を要する一事にぞある。

三日。

吾が告愛の前途は殆んど暗黑なり。されど吾等は貫かずんば已まじ。吾は如何なる事あるとも此の戀愛は貫かずんば止まざる可し。

最後まで戰へ。根氣の續く限り戰へ。昨夜本支氏を釘店に訪ひぬ。されど彼は全然余を解せざるなり。余を知らざるなり。

昨日午前信子孃とよき孃來宅す。信子孃は米國行を主張す。されど吾、全然之を排したり。吾は暗迷を辿りつゝあるなり。

吾が心裡に信仰の光あるなし。吾が前途に希望なし。吾に薄弱あるのみ。

吾は凡てをさて措き、光を求めざる可からず、薄弱に打ち勝たざる可からず。希望を求めざる可からず。吾をして信子孃を愛することを益々深からしめよ。

父母を愛すること、弟を愛すること、友を愛することを益々深からしめむ。目下の吾には自然は死してあるなり。神は無意義なり。吾を知らず。人を見ず。たゞ暗黑あるのみ。

嗚呼神よ！　涙を以て祈る、感激して祈る。希くば吾が心に光をそゝぎ給へ。吾は弱し。吾は暗し。

救ひ給へ。

人生竟に何の意義ぞや。暗迷をたどる盲者の行列、これ人間の世界か。暗迷其の裡に光を含むか。不可思議なる天地。不思議なる人生。吾が雲は暗し。

かゞやく秋の日も晴れし蒼天の深き色も今は吾に何の力もなし。吾が心はにぶりはてたり。吾が精神は疲れ果てたり。吾は人のうち尤も愚なるもの、惡しきもの、弱き者なるが如くわれに見ゆ。天も地も友も戀人も、われを捨てわれをあざける如く見ゆ。

吾が心は愛の一點の光もなきなり。さりとて、吾が心に他を愛するの念もなきなり。主我的精力もなきなり。吾はたゞ空となりたるが如し。吾は空也。

此の地上はたしかに樂地に非ず。罪惡と慘事との充滿する處なり。

余は今、現代の政治につきても、文學宗教に就ても何の趣味もなし。

道路を行くも何者も吾が注意も趣味も之を惹起することなし。

凡ての者、吾には無意義、無趣味なり。

凡て夢中にあるが如し。否な、夢の方寧ろ趣味あるを覺ゆ。

七日。

三日四日五日六日、忽ち數日を經たり。

吾等一體の事容易に落着せず。母氏豐壽は依然として頑固たり。

德富君に依賴したり。未だ其の確なる見込を聞かず。

本支君に訴へたり。彼は流涕せり。去れど未だ母氏の心を解く程に盡力し呉れず。

遠藤よき孃の母氏及び娣氏、吾等に非常の同情を表し、吾等の爲に盡力するを約しぬ。

八日。

朝、昨夜收二に托して德富君より來狀あり。今にして、思ひ切らずんば男を下げる云々。想ふに豐壽氏はあくまで我を誤解し居るが如し。

彼の女は誤解、不情、頑固、虚榮より出づる決心を以て吾等に當る。願くば吾等をして、高潔なる戀愛、男女の信義、一生の體面より生ずる決心を以てこれに當らしめよ。

事若し全く破裂に了らば如何にす可きぞ。見よ天高く地廣し。爾の心靈は偉大なり。爾の天職は重し。

應に忍苦精勵すべし。世と絶ち友と絶ち、苦學修練せんのみ。

▲▲▲▲▲

天われを召す。

今やわれ、諸々の感情亂れ起る。豐壽氏に對する遺恨憤怒、復讐的惡感。信子孃に對する深甚なる戀愛の哀情。天職に對する熱心なる奮激の情。

されど此の際、われは

一個の男子として、

一個の天職ある男子として、

一個の熱情あり、誠實ある男子として、

一個の信義あり、同情ある男子として、

一個の寛大にして溫和なる男子として、

一個、深き心靈の宿る男子として、

一個の眞なる戀人として、

一個、孝なる子として、

一個、信愛なる友として

此の事を處置するの覺悟あり。

十一月

八日。

今朝德富氏を訪ひ、左の書を得たり。

一、信子等謝罪書に由り豫て御申入に相成候結婚之儀は識認致候事。

一、同人等少なくとも一兩年間は府下を立退き候樣御談被下度候也。

一、父母弟妹間の音信並面會は拒絶致し候事。右本人等に御談被下度候也。

明治二十八年七月

佐々城豐壽

佐々城本支

德富猪一郎殿

右の書を得たるまでの次第を左に錄す。

四日の彼、潮田ちせ子老姉、丹野直信氏の二氏來宅ありて、大に勸告する處あり。潮田老姉の曰く、佐々城にては遂に此の度の件を一任する由公言せられたり。就ては御身達も小老に凡てを一任せよ。然らば兎も角も目出度結婚せしめむ。其の間信子は丹野若くは潮田に寄宿すべし云々。吾之を排して受けず。曰く、御依賴申して、一任致したけれども、愈々如何にして結婚せしむてふ條件を知らし給ふに非ずんば信子をして去らしめ難し云々。

相談まとまらずして二氏去る。

六日朝德富氏を訪ふ。最後の談判を佐々城氏に試み、自から媒妁人となりて目出度く成就せしめやらんと申さる。依賴し歸り、佐々城氏へのわび書及び德富氏への依賴書二通を德富氏に送り置きたり。

今日遂に成就す。

十一日。

午後七時信子孃と結婚す。

わが戀愛は遂に勝ちたり。

われは遂に信子を得たり。

植村正久氏の司式の下に、德富君の媒介の下に、竹越與三郎君の保證の下に、潮田ちせ老婦の世話の

下に、吾が宅に於て、父及弟列席の上、目出度く結婚の式を擧げたり。

二十一日。

十九日、信子と共に逗子に幽居す。以後記する處は幽居の日記及び感想なり。

十九日の朝、德富猪一郎氏より相談あれば來れとの葉書到着せしかば直ちに訪問したり。氏は吾を諭すに、佐々城豐壽夫人及び潮田ちせ老婦に對する態度の更らに親密なるべきを以てせり。且つ曰く、事は爲すは難し。將に眞面目に確實ならざるべからず云々。吾感激する處ありたり。德富猪一郎氏を辭して歸宅するや信子と共に潮田夫人を訪問したり。三浦氏の事、よき孃の事を聞きぬ。潮田を辭して直ちに新橋停車場に赴き、收二及尾間氏の盡力にて首尾能く乘り遲れもせずして乘車するを得たり。天曇り空氣沈靜の日なりき。横濱停車場に着したる頃は細雨來りぬれど大船にては止みたり。逗子停車場に柳屋の主人ありき。柳屋とは幽居のため其の一室を借り受けたる農家なり。今年夏、德富家の借室したるも同家なり。

薄暮信子と共に葉山に至り、厨具を買ひ求めて歸宅す。天曇り風暗し。風濤の音、終夜枕頭に響きぬ。

二十日、午後信子と共に鎌倉なる星良子孃を訪問せり。孃は信子の從姉なり。明治女學校に今夏入校したれど、もと横濱女學校の學生なり。病を養ふて鎌倉なる星野天知氏の別業にあり。

別業を辭して門を出づれば朧なる三日月山の端にかゝりぬ。遠近の暮煙何となく哀れをこめたり。

今日朝まだきより降雨。

十二月

四日。

久しぶりにて筆執り得るを樂しく思ふなり。日々の讀書は、書狀書く時をすら容易に得がたく此の記は尙更ら緣遠くなり行きぬ。されど今夜は雨降りて靜かに、讀書に倦みて閑を得たれば少しく記する處あるべし。

先月十九日の幽居以來已に半月を經過したり。吾等が生活は極めて質素なれども極めて樂しく暮しつつあるなり。質素は吾等の理想にして其の實効は儉約と時間の經濟となり。

米五合に甘藷を加へて一日兩人の糧となす。豆の外に用ふべき野菜少なし。時々魚肉を用ふれども二錢若しくは一錢七りんの「あじ」「めばる」「さば」の如き小魚二尾を許すのみ。粗食といふをやめよ。粗食は美食よりも人を弱くするの實、極みて少なきなり。菜食の利は腦髓の明快にありと始めて知りぬ。

讀書やゝ進みたり。高木のピット、竹越のクロンウエル、敎界十傑、等讀了。今はフランクリンの自叙傳を讀みつゝあり。已に其の過半を終へたり。『フランクリンの少壯時代』と題して、彼の立身の歷史のみを著はし、以て傳記叢書の第一卷となすの豫定なり。

內村鑑三君より來狀あり。曰く、フランクリン（コンモンセンス）は常識の使徒なりと。實に然る可く見ゆ。日本には類の稀なる人物也。

土曜日（三十日）の午後收二東京より來る。日曜日の朝。相携へて鎌倉に遊び歸りて逗子の停車場に下車せし時（午前十一時半）今井忠治氏の東京より來訪するに逢ひたり。共に幽居にかへりぬ。午後三人共に海岸を沿ふて葉山に至る。此日天氣晴朗晩秋の氣透徹にして和適、富士山雪を戴きて相模灣の彼方に聳え。大磯國府津小田原の海岸、微湛の中に隱見し、鎌倉の家屋點々指す可くあかぬ眺めに飽かぬ散步を得たりき。伊豆連山の彼方に沈む太陽を「あぶずり」の崖上に望み地球の自轉を沈む太陽に見たり。

夜は明月、連夜なり。

昨夜九時半過ぎ獨り海濱に出でぬ。玆は御最後川の海に入る口、潮遠く退き去りて跡に海底の岩を現はすが龍の如くに橫たはるを見たり。吾其の上に立ちたる時、月天上に在りて寂寞逗子を罩め、波の音濱にかすかに響き、月影水底に玉を沈め俯仰して立つ吾を直ちに天地介立の淸想哀感に誘ひたり。

吾が勝つ可きの敵は何ぞと吾反省せり。曰く無學、これなり。曰く忍耐の足らざる事是なり。

自ら思ふ。信仰は最初なり。信仰の最初は自然を自然として其の不思議中に吾を不可思議のものとして見出す事なり。

人間社會を見る前に天地を見る事なり。人を見る前に神を見る事なり。事業を見る前に信仰を見る事なり。先づ吾が血に消えざる火を加ふる事なり。

これは頓悟にて來るものに非ず。絕えざる祈禱と沈思と、自然との交通とに由りて次第に來る者なら

ざる可らず。時を以て着たる世間の衣服は時を以ての外、感情一事にて脱す可くもあらざる也。

これ吾が近來の見る所。

五日。

午前六時、床を出でぬ。午前五時が規定なれども、兎角朝は眠たきものなり。されど遂には五時曉起の習慣を養ひ得ずんば止まざる可し。夜は九時半に業を止め、われは直ちに屋外に出で去りて或は海濱に或は「あぶずり」の崖上に散歩を試むる、其のひまに細君室を清め床を敷き、禮拜の用意して待つ。散歩より歸りて直ちに禮拜をはじむ。禮拜は、朝は讃美歌一篇を高唱し聖書一章を朗讀して其の中より簡單なる感話をなし而して後祈禱し、以て會を閉づ。夜は、讃美歌一篇を歌ひ祈禱して止む。これ毎朝毎夜の例なり。

われ思ふ。自然は愛する者に負かずとは眞理なり。其の意味は深し。自然は之を弄する者に其の靈光を示さず、とは此の語に對する反語となすを得ん。世人は弄するを以て愛するとなす。弄して而して自然よりの感化を得たりとなす。われは所謂其の感化なるものに疑なき能はざるなり。何者を愛するにも愛は多少の忍耐を要す。愛とは吾が靈の働きなり。然るに人は肉的感情に支配せられ易し、故に眞に愛せんと思はゞ、此の肉的感情に克たざる可らず。これ愛は多少の忍耐を要すと云ふ所以なり。世人所謂自然を愛するもの、肉的感情を以て自然に對するに非ざるか。これ愛するに非ずして弄する也。自然に狎るゝなり。其の行は一種の道樂に非ずして何ぞ。自然は道樂者と神聖の交通を結ぶ事を

爲すべきか。われ之を信ずる能はず。

月を見る、寒夜水邊に立つの苦を忍ばざる可らず。深夜山路を辿る事も辭す可らず。俄然床をぬけ出でゝよもすがら池をめぐる事も忍ばざる可らず。月に浮かるゝ者は月を愛する所以に非ざるなり。かく言へばとて彼の詩人必ずしも忍耐以て自然に接したりとは言はざるなり。彼等は已に自然の愛を得たり。誰れか愛する者の前に出づるに忍ぶことをなさん。『自然は彼の女を愛するものに負かず』とは彼詩人にして始めて道破し得る妙句なるなり。未だ自然よりの愛を感じたることなきもの決して此の言をなす能はず。而して自然を弄するもの決して自然よりの愛を得べきに非ず。

自然の限りなき力、其のあふるゝ美光。これに對する、先づ嚴肅にして忍耐なるべし。

然らば、自然は自から其の靈相を示し來りて彼と宗教的交通をなすに至るべし。所謂自然の感化なるものは何ぞ。宗教的交通なくして感化なるものありとせば、そは酒精のしばらく人を惑はしたるが如きのみ。道樂者もまた此の感化を受けむ。

フランクリンは宗教的直感を有せず。常識的推理と世間的剛勇と商估的計算と市民的道德とを有する人なり。宗教的天才を以て世を清め人の血を熱することは其の能に非ず。彼は市人の大模範なり。

風雨極めて荒し。海鳴ること高し。

久しぶりに一日を怠慢に送りぬ。甚だしきひが事なり。剛氣の足らざるより致す處なり。神に祈りて悔い悛むべし。

一生再びなし。一日又一日、生命の眞意如何。永生を信ずるは希望の命なり。

罪の眞意如何。

舊約的に天地人生を見るべきか、新約的に見る可きか。はたカーライル的に見る可きか、ウォールズウォース的に見る可きか、フランクリン的に見る可きか。西國立志編的に見る可きか。

兎にも角にも熱心に見よ。確信の上に立て。

人に對し事に對し、自然に對し神に對し、將に忍耐にして誠實に、剛毅にして大膽なるべし。

忍耐と勤勉と熟慮と謹愼とは、成功に達し、眞理に入り、希望を與へ、天職を完からしむ。

二十日。

德富猪一郎氏昨夜養神亭に來り投じぬ。『御來談如何』と。卽ち出掛く。九時まで話して歸る。

人見の文章はあかぬけがしない。山路は日本有數の文章家。余は知識上の訓練より寧ろ德育上の訓練を受けたり。家に在りては儒、外に在りては耶、而して世に出でゝは維新以來の有志家精神。余は病にも壓力を加へんと欲す。回顧せず、將來のみなり。他人の精力盡きんとする頃余の精力加はる。

昨夜氏の口より出でたる言語にして記憶する處は大凡右の如くなり。

二十四日。

野心は人心を壓迫して窮屈なる世界に入らしむ。

信仰は人心を放ちて自由を希望と滿足と勇氣とに置く。

三十一日。

本年は今夜限りとなりぬ。

何の感慨も起らず。また、强ひて起こさんともせざるなり。

父母の膝下に新年を迎へざるを多少の憾みとなす。

佐々城父母と未だ和親する能はざるを多少の憾みとなす。其の他に於て不平もなく遺憾もなし。

明日は二十六歳なり。二十六歳何かあらむ。日又日、勉勵精苦耐久の外、何事も知らず。命に安んずるの道、一日を一日となして滿足するに在り。

去年の今夜大連灣に在り。回顧するに、今年何事をか爲したる。戀愛を成就したり。殖地の志を失ひたり。信仰に於て僅少の進歩も無し。過去をして過去を葬らしめよ。

二十九年の企圖。

少年傳記叢書を完成す。倶樂部を組織す。獨逸語を學ぶ。漢文を學ぶ。四書。五經。佐々城氏と和解す。交際を廣うし且つ厚うす。

日曜日は『號外』のために用ゆ、汽車中に於ては漢文を讀む。

勉强して自然との親交をはかる。

以上を以て二十八年を送る。二十八年去れ！

明治二十九年一月

三日。

一日は池田、今井、宮崎の三氏來訪せらる。池田氏宮崎氏は二日に去りたり。

本日午後三時、今井氏及び妻と共に鎌倉に遊び八時過ぎて歸宅す。

竹越君民友社を退きたり。

竹越君には忠告書を送るべし。

俱樂部の事、池田、今井、宮崎の三氏に談じたり。悉く賛成なり。

俱樂部の事に就ては深く自から經營の勞をとらざる可らざるなり。

今井、池田、富永の三氏には別々に書を送るべし。

四日。

今日は愚かに送りぬ。……（不）（六時半に起）

明日の事を左に。

午前六時に起くべし。……（成就）

直ちに竹越氏に書狀を認む事。……（同）

朝めしの事。……（同）

禮拜の事。……（同）

今井君を送る事。……（同）

新聞、雜誌。……（同）

午後。

多分雜誌。……（同）

プルターク。……（不）

夕めし。

『フランクリンの父母』を書く。……（不）

ジャーマンコース。……（不）

十時業をやめて禮拜。

就眠。

五日。

今日は國民の友掲載の小說を讀みて遂に定課をふまざりき。

明日の定業。

午前六時起。東、三好に書狀を出す。朝めし。禮拜。プルターク。晝めし。プルターク。夕めし。フランクリンの父母。ジャーマンコース。十時禮拜。就眠。

七日。

時は空々の中に去りゆくなり。

不思議なる世界、不思議なる生命。不思議なる人間の世。

習慣と煩惱とは吾をして此の不思議を忘れしむ。されど何者も吾をして此の不思議を不思議と思はざるに至らしむる能はざる也。

凡ての最初は此の不思議を極感するに在り。

十五日。

過ぐる十二日には神武寺（沼間村にあり）に登山す。此の神武寺は其の眺望を以て名あり。三浦半島の西側の海を望み得るなり。相模灣は却て遠く、東京灣の水却て近し。巖頭に坐して遠望したる時の光景は今尙ほ目にあふる。細君同道なり。

神武寺にて晝飯の馳走になりたり。

昨日より時間表を改正して左の如く定む。

午前五時起　聖會。

迄六時　獨逸語（一時間）

迄七時　食事、雜務、運動（一時間）

迄十一時　業務（四時間）

午後迄一時　食事、雜務、運動（二時間）

迄五時　業務（四時間）

迄七時　食事、雜務、運動（二時間）

迄九時　業務（二時間）

迄十時　漢書、聖會

迄明朝五時　睡眠。

右の中「雜務」とは書狀を認むる事、新聞雜誌を讀む事、欺かざるの記を書くこと、文章を作ること、其他の事柄なり。「業務」とは著作なり。聖會とは讃美歌、讀經、祈禱なり。

二月

五日　朝。

一日、歸京、三日歸逗。四日空費。五日は今日なり、今は朝なり。何事をも願はず、自由の靈、獨立の靈、確信の靈たらむことを願ふ。世の煩惱われを苦しめて止まざる也。自然よ。來りてわれを自由になせ。相模灣を隔てゝ望む、伊豆連山の晴雪！　嗚呼われ自然を愛す。

十二日。

詩人ゝ豫言者の自由と平和と高潔とをわれ希ふ。茅屋の民を想ふ。山林の一生を想ふ。

信子は滿腹の愛と信とをわれにさゝげつゝあり。われ已に生活の煩累を感ぜざる也。
信子はわれをして生活の煩累より自由ならしめんことを期しつゝあり。
饑渴だに避くる處に非ず。況んや區々の貧窮をや。
自然兒は飽くまで自然兒たれよ。
詩人に必要の資格は、眞誠（シンセリティ）、信仰、觀察、文章の四つなり。
先達植村正久氏を訪ひヒービー、ブラウンの談話を聞きたり。

十六日。

本日午前散歩。小坪山道に登りて甲州地方遠山の晴雪を望みぬ。午後鎌倉に散歩、薄暮歸宅。小貫小機關士來遊。

二十五日。

一昨、二十三日の夕暮、落日を望んで自然の美に打たる。

伊豆相模、峰の白雪ふかけれど
わがすむ庵は春雨の音
春雨蕭々、閑居の思ひ長し。

三月

三月七日夜記。

二月二十九日午後〇時過ぎ收二東京より來る。池田米男氏其の夜來る。
三月一日、午前横須賀に行き八重山艦の小貫一良氏（小機關士）を訪ふ、收二池田同道。鎭遠號見物、久しぶりにて仙頭大尉に遇ふ。
小貫氏と共に船渠内の露艦アドミラル、ナヒモフを見物す、
三月二日一番汽車にて收二、池田去る。見送る。歸路驚をきく。
三月四日吉田松陰文を脫稿送付す。五日空費す。六日リンコルン傳を書きはじむ。
今日東京より松陰原稿回る。更らに文章に圈點を附し又批評を加ふるためなり。
嘗て德富君が余に對ひ語りし事を今なほ記憶す。曰く「余は極めて幼少の頃より人生の問題を考へはじめ、而して十八歳頃まで熱心に考へたれども、到底わかるものに非ずと知りたるがゆゑに放棄したり」と。余は思ふ。放棄し得べきは人生に就き未だ何も考へざるが故なりと。一言にして云へば渠は自然の兒ならぬが故なりと。これには大に論あり。論に非ず說明なり。
道はしばらくも離るべからず、離るべきは道に非ざる也といふ語あり。恰度此の語の如し。人生其れ自身不可思議なり。故に人は此の不可思議を痛感すべき筈なり。而してこれを痛感せずして尙ほ人生の事を考へるといふ。これ考へざるを得ずして考ふるに非ずんば其の考究や忽ち止め得るの考究なり。止め得るの考究は考究に非ざる也と。

たとへば玆に人あり、捕へられて一室の暗黑中に投ぜらる。かれ頻りにさぐりて出口を求む。玆に人あり、自己の天地の間に介立するを感ずることあだかも暗室内に投ぜられし人が、其の暗黑と室内とを感ずるが如く痛切なり。故にかれは出口を求むること彼の人の出口を求むるが如し。此の如きを人生の事を考ふるとはいふなり。

天地人生は不思議なり。されど人若し其の不思議を忘却し放棄し得べくんば、彼は不思議のとき難きが故に非ずして不思議を不思議と感ぜぬなり。

四月

七日。

東京隼町の父母の膝下に在り。

逗子へは「さらば」を告げぬ。逗子にゆきたるは昨年十一月十九日にして、去りたるは本年三月二十八日なり。明記し置く。

四月一日、潮田ちせ姉の宅にて豐壽夫人と和解の面會を遂げたり。互の感情氷解せり。逗子を去る事に決したるは全く父の病氣のためなり。父已に快方に向ひぬ。

四日の日より余發熱す。終日氷もて冷やし服藥す。五日に至り熱去り、六日に至り殆んど全快し、本日は平常に復したるが如し。

八日。

昔日の高潔なる感情何處にかある。吾は次第に卑屈に成りつゝあるなり。

吾が苦悶は肉の苦悶に非ずや。此の頃の此の身ほど下品なるは非ずと感ず。

天上の星、其の光なく、樹梢の星、其の色なし。光なきに非ず、色なきに非ず。吾が心痲痺したるなり。心眼閉ぢたるなり。

三月三十日の夜、潮田チセ姉、佐々城愛子を伴ひて來宅す。愛子は信子の妹なり。

ちせ姉の曰く信子獨りを伴ひて今夜ひそかに釘店に歸りたしと。釘店には佐々城豐壽夫人あり。

余此の事を謝絶す。其の主旨に曰く信子一人の面會は不可なり。二人ならざる可からず。潮田姉去りて後、余信子をなじる。信子大聲を放つて泣く。「泣く」これ今日に至るまで引續く余が苦悶の原因となりぬ。

凡てを天父の指導に任かす能はざるよりして苦悶愈々甚だし。

十四日。

一昨日信子の失踪以來、吾が苦悶痛心殆んど絶頂に達せり。信子失踪行衞未だ知れず、爲めに我が苦痛我が筆の盡し得る所に非ず。余が肉體の健康の保有が不思議なる位なり。

一昨夜、昨夜共に僅少の時間を眠り得しのみ。今は詳細の事實を記する能はず。

以上は今日午後五時頃潮田より歸宅しての記なり。今は午後九時四十分なり。吾が心ほとんど平靜に

ふくしぬ。今井忠治君薄暮來宅。わが心は眞友、十年來の眞友に依りて其の健康を恢復し得たり。吾が決心は左の如し。

今日の難局に當るには、たゞ一路あり。曰く尤も正直眞實にして人情と道理とに適合するの道を踏むことなり。

如何にしてか。

信子の心願をよろこんで許可すること。故に一應歸宅して公然吾家を出づること。以て前途の熟談をとぐること。相手に對するに常に相手を立つる心得あること。

悲しき事實。

といふ題の下に、一昨、日曜日の事より今日までに至る三日間の事實の悲しき記錄を詳細に留め置かんとぞ思ふ。

一昨。十二日は安息日なりき。余逗子より歸りて已に此の日まで十數日となれども、會堂に赴きたるは此の安息日が始めてなり。

午前八時頃信子を促して、收二もろとも三人にて家を出でたり。あくて促してと言ふ。蓋し信子は自から進んで教會堂に出づるの樣子なかりしなり。

朝飯の時、食卓の彼方に坐する信子に對つて余の曰く、「信子今日教會に赴くや」と。信子少しく笑みを含んで曰く「赴きても可なり」。余直ちに曰く「可なり所か、應に赴かざる可からず」と。

斯くて信子は衣裝を更むる爲めやゝひまどりぬ。綿入一枚を着し、羽織は余これをすゝめたれど着ざりき。片手にふろしき包を抱き、片手に蝙蝠傘を持ちたり。包みの中には余と信子との聖書一册づゝ及讃美歌一册なり。其の外に何もあらず。三人は先づ招魂社の櫻を見物したり。それよりして教會に出でたり。落花の光景、此の時彼の女の心に如何に映じけむ。余にはたゞ美はしくのみ見えたり。彼の女の多感にして、是等の感情少しも後の書狀に見えざるぞ不思議なる。彼の女は吾等の後へにのみ從ひて來り、今よりして想へば、言葉數極めて少なかりき。

會堂にては彼の女は女席の最も後ろのベンチに倚り、余は男席の前の方なる所の座を占めぬ。故に彼の女が如何なる形容を植村君の說教中にもらしたるか少しも知るに由なかりき。

十五日。

吾今机に向つてリンコルン傳を草しつゝあり。(夜七時)、されど吾が心の底に鉛の如き悲痛の沈みて轉ずるを感ずるなり。愛し愛する信子已に吾が家にあらざるなり。彼の女の笑聲已に吾が家にひゞかず。彼の女今何處にある。府下か仙臺か。吾等夫婦の行く末は如何。

たゞ此の際、男らしかれ。忍耐せよ。凡て愛を以てせよ。怒るなかれ。

悲しき事實　(つゞき)

植村師の說教はクリストの人物考なりき。クリストが人寰を脫して神に祈り、神と交はりし事、大罪人を喜んで容れし事。等なり。說教了はり、會衆散ぜんとして、余もまた出口に立ち出でたり。信子

の來るを待ちぬ。信子出で來らず、余は婦人席の入口に首さし出して信子を呼びぬ。信子出で來りつ、余に聖書の包を渡して曰く、「只今明治女學校の生徒に會ひぬ、これより直ちに同道して寄宿舍に到り星良子孃に會ひ彼の女を吾が家に連れ歸らばやと思ふ」と。余何心なく曰へり。「最早晝飯なり。早く歸り給へ」と。信子曰く「直ちに歸らむ」と。余此に於て外に出で信子復内に入れり。余は全く無心なりしが、此の時の信子の心中果して如何なりけむ。熱湯を呑むほどの苦痛ありしならむ。余收二と共に家に歸り、晝飯を了りて再び教會に到りぬ、これ青年會に出席したるなり。青年會散じて歸路富永氏の宅に同道し、午後四時過ぎ家に歸りぬ。信子あらず。余は一種異樣の感ありたり。何故にかくは遲きぞと。此の時已に夕食の用意出來居たれども余餘りに氣にかゝれば、父母に言はずして直ちに外出し、明治女學校の寄宿舍さしていそぎたり。寄宿舍は中六番町二十二番地に在り。路に星良子孃に出會ひぬ。余驚き問ふて曰く「信子今日御身を訪ひし筈なるが如何」と。良子孃顏色を變じて曰く、「不思議なる哉、今日先刻來訪ありしも直ちに歸り給ひぬ、顏色甚だ惡かりき。」と。此の答を聞きし余の驚愕如何ぞ。余の聲ふるひ、余の心波の如くに激しぬ。「こは不思議なり。まだ歸宅せず」と言ひ捨てゝ直ちに良子孃と分れ、家に歸りたり。信子依然在らず。

余は激する心を抑へ食事に對ひぬ。されど一口も喉に下らざるなり。今日は富永氏の宅にて菓子を大食したればとて口實にて卓を離れ、直ちに家を出でぬ。此の時暮色已に蒼然たり。余は半藏門のあたりをうろ就きぬ。若しや信子日本橋石町の親戚なる丹野氏を訪ひて已に歸路に就きつゝありもやせん

と思ひしが故なり。されど遂に耐ふる能はず、直ちに家に歸りて、信子の歸宅のあまり遲き不思議を父母に語り出でたり。

試みに丹野氏を訪ふて見る事に決心し、釘店に到りて先づ丹野氏の石町の番地を聞き、丹野氏に訪ね到りて信子のことをきゝたれど、「知らず」との答へに、一段の驚異を增し、歸宅したり。信子或は潮田氏よりなりとも歸宅しあらむかと空だのみを樂みつゝ。

されど信子依然家に歸り居らざるなり。已に夜は初更を過ぎんとす。途に潮田氏に向けて電報を發し信子の在否を問ひたり。此の時已に九時なり。十時返電あり。「コナイドヲシタ」と。玆に於てか余は殆んど絶望に泣き出ださんとせり。形容し難き恐怖の念全身の熱血を凍らしむるが如し。余主張して曰く、信子必ず染井の墓地に到りたる也と。蓋し余が染井の墓地に思を馳するは原因あるなり。信子嘗て三浦氏の宅に在りし時にも獨身飄然染井の墓地なる亡弟の墳墓を訪ねたる事あり、而して其の後しば〳〵曰く、染井の墓地に至れば精神寂然として極めて心地よしと。然るに此の日の說教の中、「時に人を離れて獨り神と交はる事をせざる可らず」との意あり。余こゝに於て信子必ず復もや染井の墓地に安息日の半日を送らむと志ざしたるならんと思ひ、かたく斯く信じたり。されど如何にまてども歸宅せざるなり。余の疑惑は遂に空しく信子を待つに忍びず。芝區なる潮田チセ氏に車を馳せつけ、事の次第を語りぬ。潮田氏また愕然たり。されど余が憂の十分一だも解せざりし。「兎も角も左程狼狽せずとも」と稱し、且つ曰く「或は最早や歸宅し居るやも知れず、されば速にかへり見られよ」と。

余もまた萬が一を思ひて急に潮田氏を去り歸路につきぬ。車上の感とても言語のつくし得る所に非ず。信子今頃は染井の墓地に卒倒し居らざるかなど考へ至る時は血の凍るが如くに感じ、氣も狂はん計りなりき。然るに此の夜は天曇りて北風吹き近來に稀なるさむさを覺えければ、余が心ほとんど暗夜をたどるが如く、未だ嘗てかくまでに天地の悲哀を感じたる事なかりき。

歸宅せしと雖も信子あらざるなり。時に已に十二時。

昨夜まで枕を並べて寢ねし床に獨り悲痛の心をいだき横はる時の吾が感を如何で說明し得ん。疲勞のため眠忽ち到り、夢現のうちに二時に至りて睡氣散じ悲痛憂懼交々起り、窓外の車聲と足音とを一々耳傾けて聞く時の吾が胸の苦しさ。忽ち車聲彼方に起るよと思へば、空しく吾が家の前を過ぎて、再び彼方に沒したるなり。女の足音にまがひなき音は吾を弄するが如くにして吾が家の前を過ぎ去るなり。斯くて三時をきゝ四時をきゝ、精神疲れ果てゝとろりとまどろみしと思へば五時なりき。此に於て吾が家を出でゝ染井の墓地指して搜索に赴きたり。收二は僅に一椀餘りの飯を食ひ得と雖も余の腹中には憂懼の冷塊みち〳〵たれば、茶を呑み得しのみなりき。花時に稀れなる曇天の冷氣身に沁み、天地暗澹の光景も余が心中の憂懼も、殆んど余をして堪ふ可からざる思あらしめしも、幸ひに弟の同伴ありしため、談話、慰藉、氣をまぎらすを得たり。

飯田町の電信局にて潮田氏に宛て「信子まだ歸らず」との電報を發し、水道橋の傍にて車に乘り、未だ見しことなき染井の墓地に至りぬ。墓守りの家にて訪ねたれども、昨日左樣なる年若かの婦人の一人

參られしを見ず、と。教へられて佐々城進(信子の弟)の墓に到り見しに、落花點々たるのみ、人の詣でし足跡だになし。況んや卒倒せる信子の死體をや。余と弟とは兎も角も多少の安心を得たり。

再び墓守りの家に入りて彼是れと尋ねきゝたれど、卒倒したる女子の噂あることなし。則ち墓地を辭して徒步歸宅の路につきぬ。途に交番所に至り、失踪者搜索の方法等を巡査にきゝたゞしなどせり。

歸路收二と共に萬一を僥倖せんとしたるは余等が不在の間に信子の歸宅し在らむとてなりき。されど歸宅し見れば信子の影だに在ざるなり。但し思ひきや、書狀到着し居らんとは。余の此の時の驚きと喜びと不思議の念と、今はすでに思ひ起すことすら能はざるなり。

已に書狀なり、信子の死せざるを知り得たり。これ第一の喜びなりき。此の書狀は此の記の終りに書き寫すべし。今は其の大意を記さんに、

「外側より余を助くる方、余の利益となる。」「信ずる方法に進まん。」「されど許可を得んと欲すれば余の許さゞるを知るが故に無斷にて家を出でたり。日下市外の舊友の許にあり。」「星良子孃にも一通を出し置きぬ。」等なり。要するに自分も勉强したく、余にも獨身者の精力を以て勉强させたしといふに在り。

此の書狀を讀み了はるや、先きの憂懼は一變して言ふ可らざる悲痛となり、餘りの事に暫時は怒氣も起りたれど、信子の悲哀を思ふて忽ち消滅し、一轉して大悲痛となりぬ。『信子何處にゆきたる』これ第一の念なり。市外の舊友の許とは誰なるか。書狀は本鄕區の消印にして十三日のイ便なり。然らば

昨夜投じたるなり。余の疑念に曰く、此の書狀は吾が家にて認めたるものならんと。母の曰く「先日汝が圖書館に赴きたる節、信さんは頻りに何か書狀樣の者を認め居たり。」と。されど兎も角も、疑念は疑念となし置きぬ。

星良子の許には如何なる書狀や到來したるぞ。其の所在に就き多少の手がかりはなきか。こゝに於て直ちに車を飛ばして中六番町なる明治女學校の寄宿舍に赴きたり。

良子は登校中ときゝ又學校に赴きたり。良子に逢ひて昨日來の事を語り、信子よりの書狀を示し、「御身にも到着し居る筈なり」と言へば、未だ到着ぜずと答へぬ。余問ふて曰く、「御身は信子に金を貸しはぜざりしか。」良子答へて曰く「一圓貸したり」と。抑も信子の最初吾が家を出でたる時は一文錢を持たざりし筈なりき。故に吾が家のもの悉く彼の女の如何にして一文錢なきに失踪し得たるやを疑ひ居たるなり。今や始めて多少の疑團を解き得たり。

「然らば仙臺に行きしに非ざるか」「一圓にては仙臺に行かれず」「然らば府下にあるなり。御身に心當りなきや」「今まで信子さんとは餘り交際せざりしかば、其の交友を知らず」兎も角も寄宿舍の方へ書狀到着し居るやも知れざればとて、余と良子とは再び寄宿舍へ歸りたり。されど未だ到着し居らざりき。余いたく失望す。已むことを得ず正午頃また來るべしと約し置きて歸りたり。

十八日。

午後〇時半此の筆を執る。

悲痛の事實、未だ書き了はらざるに、事は愈々悲痛に赴かんとす。窮極する處、一轉せざる可らず。一轉する時、通ずる處なかる可らず。事は今窮極に達せり。

昨十七日薄暮(六時十五分)、德富氏より來電あり、曰く、早く來れと。直に車にて馳せつく。佐々城本支氏より德富氏へ左の電報到着し居たるなり。「信子死を決す。十二日より絕食、委細潮田に聞け、賴む。」愕然たり。德富氏と相談の上、余直ちに車を潮田に飛ばし、此の電報を示す。潮田無論何の委細も知らざるなり。再び德富に歸り、德富の名にて左の電報を發す。

「潮田に樣子聞く、少しも分らぬ。」

余も亦同時に、

「信子居所誰も知らぬ、スグ知らせ。」

佐々城本支氏は石狩瀧川半開地オホイヅミ館にあり。

本支氏は如何にして斯る電報を打ちたるぞ。それにしても信子は何處にあるぞ。仙臺にあらぬ由豐壽氏よりの報知潮田氏まであり。然らば東京に在るか。然らば誰か本支氏に信子決心の由電報打ちたるか。又何故に豐壽氏、如何に病氣とは言へ、此の際歸京せざるか。茫々として少しも知る可らず。何の故に信子は死を決したるぞ。發狂したるか。然らば何故に發狂したるか。何故に絕食したるか。茫々として之も知る所あらず。

本支氏よりは今だに返電なし。如何にせん。

想像も何も及ぶ所に非ず。苦悶は鉛の如く血管をころがる。

人間とは何ぞや。憂苦其の者にや。吾とは何ぞや。天地已に茫々として倚る處なきに、人はたゞ地上に憂の器たらむとす。

嗚呼信子、信子、吾が愛足らざるか。面白くもなき世なるかな。哀れなる人の運命。今の今、此の心に希望と生命とを吹き込み得るものは何ぞや。神の愛か。然り、神の全智の愛か。クリストの道か。罪多き身なるかな。愚なるかな。

人生とは何ぞや。人生とは何ぞや。茫々紛々援々として知る可からず。人より人の迷出で、天より天の光來らず。信子果して死したるか。斷じて斷じて、斷じて死なじ。

死とは何ぞや。生とは何ぞや。愛とは何ぞや。死を包む此の地の神よ。吾が一生の命運！　何者か吾を導き、吾を誘ひ、吾を支配するぞ。人生、人生、これ何ぶや。人の一生の命運、嗚呼これ何ぞや。美はしき花も憂ふる心に何の力かある。今の今、此の心に希望と生命とを吹き込み得るものは何ぞや。

午前の中に本支氏よりあるべき返電、今まで(午後二時)來らざるなり。信子何處に在るぞ『十二日より絶食』。『死を決す』。何故に、何故に、吾と良子孃とに送りたる書狀の意は如何にしたる。

二十日。

朝七時二十分此の筆を執る。

十八日午後潮田よりの來狀に曰く、豐壽夫人歸京したれど、病氣の爲め、兩三日は面會相談致し難し

と。余此の事を以て理と情に於て不法となし、直ちに德富氏を訪ひ事の次第を語り、潮田を訪ふ。不在。釘店の佐々城を訪ふ。良子孃あり。豐壽氏に面談の事を申込む。潮田の宅ならば會はんといふ。乃ち潮田に到り、電報を以て豐壽夫人を呼び寄す。豐壽夫人來る。のぶ子浦島病院になること明白となる。歸宅す、今井君在り。信子より來狀あり。曰く離婚(表面だけ)致し度し。其方余の爲になると。直ちに浦島を訪ふ、一二時間の押問答の末、遂に面會す。信子病床にあり！

信子の曰く、かの願を叶へ給へと。余の曰く、情なきことを言ふものかなと。左右に醫士と後に看護婦とあり。何事も思ふこと語り得ずして歸宅す。

歸宅すれば午前三時。直ちに一通を認めて、昨朝投ず。

昨日午前德富氏を訪ふ。兎も角も潮田と相談致し度しとの事故、余より潮田に斯く申し遣る。

午後湖處子氏來宅。四時頃收二、今井氏を伴ふて歸宅。七時頃まで語りぬ。

信子より來狀あり曰く、逢ふはうれしけれど、亦更らに苦しと。

今日に當り余の決心は是なり。

信子をして其の判斷をひるがへさしむること。信子の愛さめ、信子余にそむき去るとも、余は決して怒らず。飽くまでも彼の女を愛すること。且信子の爲めよりすれば、今日の判斷は他日の後悔なるが故に、信子をして他日の後悔に入らしめざる樣、夫婦の義を今日に維持すること。如何なる場合來るとも、余の口より一度、離婚の言葉を放たざること。如何なる場合たりとも余は信子をせめざること。

二十一日。

リンコルン漸く脱稿せり。

昨日星良孃を待ちたれども來らざりき。五時より六時の間に來舍あれと申し來りしも悲痛のため、午後より床上に横はりて、之も果さざりき。薄暮信子に一書を出し置きぬ。

夜、德富氏來り、談話悲痛を拂ふ。尾間、大庭兩氏來る。圓座して來る二十五日開會の筈なる一番町教會男子部懇親會の相談あり。

二十二日。

今朝信子並びに星良孃に書狀を發し置きぬ。ダンテを讀む。

今や吾が心には名狀し難き一團の苦惱なり。信子の愛の行くへを逐ふ苦惱に非ず。否、それもあり。浮此の苦惱は今日まで經驗なきの苦惱あり。

世の名利に焦がるゝ苦惱にもあらず。否、それもあり。されど是等は其の苦しき湖水のなぎさに漂ふ雲影に過ぎず。吾は今や此の恐ろしき天地のたゞ中に裸體のまゝ投げ入れられむとするが如し。無窮の「時」に暗き雨降る。無限の空際に火の焰ゆる聲あり。

愛とは何ぞや。美とは何ぞや。生命とは何ぞや。死とは何ぞや。

吾に一團の苦惱あるなり。此の苦惱は吾强ひて醫せんとせず。

信子は全く利害を打算して愛の純潔を失ひたるなり。されど愛の純眞ならざるものは吾とても然り。

信子をのみとがめんや。信子もし其の心をひるがへすことなく、全く余を捨て去らば、余は其の苦痛を深く藏して此の世を進むべし。余は「愛」を全うせん爲めには苦痛を擔ふを辭せざるべし。利害名聞の惑聲、しきりに耳朶を打つ。屈することなく理想の天に進め。無窮の天地！　其の間の生死！　一生！　苦樂。眞面目の事實なり。

午後信子に與へんとて左の書を作る。

熟考の上の書。

第一、御身此の度の事は全く余の事業、利害、功名等を苦慮して遂にこゝに至りたる事と信ず。されど夫婦は人倫最大の事なり。之を失ふてまでも功名を握らむとするは下劣なる空想なり。夫婦は愛によりて永劫をちぎりたるもの、功名は此の世のつかの間の夢に非ずや。

第二、吾等夫婦は結婚する迄には非常の苦心を爲したり。死をさへ決したり。勿論水火をだに辭せざりき。況んや區々の功名富貴をや。其の爲め吾等が戀愛の事は交友間知らぬものなし。九州より北海道に至るまで朋友知人の住む所、悉くこれを熟知せり。且つ德富、竹越等の諸名士を煩はして牧師の下に結婚したり。故に如何なる口實あるにもせよ、未だ一回だも眞實相衝突したることなく、戀ひこがるゝ吾等が忽ち離婚する事は吾等一生の面目にかけて出來ぬ事なり。一生の間背後の嘲笑を擔ふを如何せん。否、われ等一生の希望達したる曉、われ等の事業の後世に傳はらむ限り、吾等常に不貞、不信、淺情、薄愛の嘲りを辭する能はざらむ。如何程の理由あれば、吾等此の大恥辱を受けて甘んず

べき。

第三、また假りに斯かる嘲笑的恥辱を忍び得とするも、吾等果して離婚後、心の底に何の悲痛もなく、今後を生活し得べきか。余には能はざるなり、御身の愛の深き必ず余をして其の心に必ず無限の悲傷を負はしめて今後を送らしむるが如き無殘なる事は爲し給ふまじ、また御身の多感多情なる、必ず又無限の悲痛絶えず胸間を往來して常に幽愁の日を送り給ふに至らん。これ明白なる事實なりとす。

第四、昨年十一月十一日よりの五ケ月間、斯くまでに相愛したる吾等、不思議にも御身をして突然ここに至らしめたる理由は、名も利も身も心も相さゝげて打込みたる戀の香、漸く消え、此の世の利害得失、私利私慾の念、漸くきざしたる矢先に、御身の身體に病氣さへ起り、兎角心の屈し勝ちに至りしより、遂に利害の念、御身の愛と忍耐とに打勝ち、以てこゝに至らしめたる也。

第五、經驗ある人の言をきくに、新夫婦の危險は結婚後半年の間に起る。此の半年を忍耐して經過せば夫婦の眞味はじめて生ずと。成程御身は五ケ月目に此の暗礁に乘り上げたり。有體に言へば人間は誰れしも弱點だらけなり。結婚後に至り、結婚前の空想の如くに參らぬは普通の事なり。空想の如くに參らぬとて離婚したら天下成立するの夫婦なかるべし。其處が忍耐なり。工夫なり、互の反省なり、互の奬勵なり、艱難苦樂を共にするとは外部よりの艱苦のみに非ず、互の弱點より出づる人性の惡所と戰ふにも共にせざる可からず。夫婦の眞義はこれに非ずや。故に實は吾等夫婦もこれからが忍耐なりし也。これからが夫婦の眞味なりし也。これからが愛の愛たる處を事の實際に現はす可き筈なりし

也。

第六、余は姦淫の故ならで其妻を出すことを禁ずるクリストの教を奉ずる者なり。余は嚴肅なる宗教上の儀式を重んずる者なり。故に終生、余の口より離婚の二字を言はず、また永久の妻を御身なりと確信し、神と凡ての人の前に公言することを止めざるなり。これ御身と余とが此の世に於ける神聖の義務なり。これ吾等夫婦の面目を神の前に保つ唯一の法なれば也。

以上說く所によりて最愛なる御身、必ず靜思熟考をこゝに致し給ふべし。就いては今日の策如何。

第一、益々事を面倒にして其のため佐々城、國木田兩家の父母等に此の上の苦慮をかけぬこと。

第二、あとへも先へもゆかれぬ樣に致さぬこと。

第三、事を餘り長引かして却て面白からぬ風說を傳播せしめざること。故に御身の病、少しく快くなりたらば、單身吾が家に歸り給へ。他人を煩はすことなく無斷にて家を出でしも御身ゆゑ、また獨斷にて歸り給へ。たゞ余を信じ余にまかせ、斷然余が言に從ひ給へ。余が切なる願はこれなり。御身熟考靜思の上、必ず余の此の切願に從ひ給ふことを確信す。

再言す、最愛の妻よ、斯くまでに御身にこがるゝ余の言を用ひ給へ。沈默のうちに斷然歸宅し給へ。御身の此の一擧によりて、凡ての人、悉く愁眉を開き、余の悲痛、一變して歡喜とはならむ。

義と貞と愛と信とを全うするは此の一擧に在り。決して利害に誘はれ給ふな。

最愛永久の妻信子様　　御身の哲夫認む

二十三日。

苦痛忍び難し。されど忍ばざるを得ざる苦痛なるが故に、愈々苦痛なり。此の世の苦しくもあるかな。信子、信子。われを許せ。われ實に御身を樂します能はざりき。御身のわれに注ぎし眞心のほど、ゝみじみうれしかりしぞや。今や御身遂にわれを絶えざる苦痛の墓に葬りて去りぬ。これもとより余自から招きたる事なり。

今後御身如何にするとも余に歸らずんば、余には無窮の苦惱あれど、余が御身に注ぐ愛は益々深かるべし。余は一生、御身を愛すべし。今後、信子遂に吾に歸らずんば、余は信子に關してはたれにも一言せざる可し。何事をも語らざる可し。萬斛の愛と悲と、これを沈默の中に藏せん。

余は永久、信子を愛すと感ずることにより一種の慰藉あるなり。

吾、浮世の浪にたゞよふ時も、依然信子を愛せん。われ死する後も信子を愛せん。これ詩的表明に非ず。余が信仰と希望はこれなり。

されど、されど神のめぐみ深きや、必ず信子の今日の第二の空想を破り給ふて余が家に復歸せしめ給ふことを信ず。これ眞に信子の幸なれば也。信子は離婚後の空想に誘はれつゝあり。此の空想の空に歸したる時、彼の女は如何にすべき。大苦痛其の心を襲はん。彼の女は一生悲痛の子ならむ。余、

悲痛の子となり、信子また悲痛の子となる。これ離婚の與ふる處なり。嗚呼信子は悲哀の子なる哉。信子、信子、來つて吾が愛に投ぜよ。浮世の夢を追ふて苦しむ勿れ。

二十四日。

余と信子とは今日限り夫婦の緣、全く絶えたり。昨日信子に遇ひぬ。信子の本意全く離婚にあることを確かめ得たり。本日午前、德富氏を訪ふて相談の上、離婚することに決し、其の通知書を認めて德富君に手渡したり。是に於て去年六月以後の戀愛も一夢に歸し了はんぬ。斯くまでに相愛したる信子、遂に吾と相離るゝに至りたる事、極めて悲痛の事なれど、人の心の計り難きを思へばこれも詮なし。

余は今やもとの獨身者となりたり。

德富君の曰く、發憤して布哇なり、亞米利加へなり行きては如何と。亞米利加へ行くなら百圓は出してやると。

未だ余の決心定まらず。母は賛成し、父は多少の不同意あり。

戀愛に破れたる此の悲傷の心、如何にしていやす可き。

余が心には尙ほ微塵も彼の女を夢み恨むの念なし。否。尙ほ戀々の情に堪へず。されどこれこそは未練と申すなれ。

亞米利加行！　大なる命運の分れ目！

二十五日。

午前十時過認む。

昨日午後、收二を伴ふて小金井の櫻堤に遊ぶ。途中にて大久保に下車し、つゝじ園等を散歩す。小學校の運動會などあり。

新綠もえん許りの郊外の風光は却て吾が心に無限の感傷を加へぬ。境の停車場に下車し、昨年信子と夫婦永刧のちぎりを約したる林に到り、收二に去年の事を物語れり。信子と共に紙を布きて憩ひたる林、今は悉く伐木せられしを見る。

松柏も一年立たぬ中に變じて薪となり、夫婦永刧のちぎりも一年ならずして一片回顧の情となる。

櫻堤をさかのぼりて里餘にして歸路につきぬ。

林頭已に月色の淡きあり。浮雲變幻、日光出でゝまた沒しぬ。

歸宅せしは八時近かりき、食後直ちに植村正久氏を訪ふて離婚一條を談話す。氏夫婦共に非常の同情を表せらる。余が今後の事に就き戒むる處あり。植村氏は北米行には先づ不同意の方たり。

余が現在の悲痛困厄につれて、過去を回顧し來れば、眞に悔恨の情に堪へざるなり。

十年の學問、何を學びたる。一個の堅固の志を立つる能はず、空々として經過せり。

一陣の寒氣、心魂に吹き入りぬ。少壯の猛氣忽然として冷却せんとす、何をなし、何をつとめん。

此の失神亡氣したる青年の活氣を再起せしむるもの何處にある。

一個の火、かすかに胸間にもえそめぬ。

「クリストの死」

余は一度死したる也。今や新生命に入りつゝあるに非ざるか。

二十七日。

午後五時認む。

二十五日の午後は一番町教會男子部の懇親會ありたり。

其の夜今井、田村、富永、尾間の四氏來宅。收二と六人、圓座して快談す。

余が北米行の可否の論、極めて盛なりき。富永、田村の兩氏は否とし、今井氏は可とせり。收二は賛成なり。

富永氏は余にすゝむるに忍耐して今日の境遇を續く可きを以てせり。余もまたこれを思はざるには非ず。今井君は大なる經驗を得んために、と稱して賛成す。

夜の十一時散じたり。

二十六日午前教會に出席す。植村先生の說教ありクリスト教に就ては人々大に進んで求むる處あらざる可からざる意を說きたり。

午後富永氏の宿處にて談話す。

夜もまた教會に出席せり。雨降る。

今朝快晴。

民友社に出社し久保田米齋君に挿入畫を托す。

嗚呼信子遂に吾を去りぬ。

兩三日前、收二、德富氏を訪ひし時、德富氏潮田より聞きし處なりとて傳へて曰く、信子は逗子に在りし時に〻兩三度逃亡を企てつる由。德富氏は是等の事實よりして、信子を魔物と罵り、狸と稱し、寧ろ此の度の事を祝すべしと言ひ、且つかゝる女は七度も姦通する女なりと熱罵せし由。

信子果して余を欺く斯くまでに深かゝりしか。余が斯くまでに愛したる愛には何の感動もなかりしにや。然らば余を戀ひたるは始めより左程にもなかりしにや。咄々、何等の悲痛なる話ぞや。

余は信子が斯かる心ありしを信ずる能はざる也。信子は深く余を愛し居たり。余は今も尙ほ信子を戀ひつゝある也。

二十八日。

昨夜宮崎君を訪ひ、相伴ふて月下を逍遙せり。

氏は米國行を賛成せり。氏は宗教家たらんことを余に望むと云へり。昨夜宮崎氏と別れて歸宅して後ヨブ記をひもときぬ。

二十九日。

夜十一時記。

午前七時家を出でゝ神田青年會館に至り丹羽清次郎氏を訪ふ。米國桑港青年會の事に就き、聞く處あ

らんためなり。丹羽氏未だ青年會にあらず。氏の宅、小石川第六天町に到る、不在。歸宅。

九時、吉田友吉氏來る。全力を美文に注ぎては如何といふ。星良子孃の葉書に返書を認む。晝食後出社す。午後二時過ぎ、今井氏と共にあたごの山に登り、バラ園の躑躅を見物し、麻布永坂のそば屋に到り、山王社を散歩し、共に歸宅して終に十時過ぎまで語り、氏を送りて麹町通近傍まで到りて歸宅したり。

△△△△△△△

神の道を求めよ。

吾と信子との間の愛情の餘りに儚なかりし事を嘆ずる勿れ。人間は暗き性をもつ。人情は發達の中途に在り。宇宙は暗と光との戰なり。人類は苦惱のうちに開發す。

三十日。

吾を光と强と柔和と勇氣と忍耐と、眞理と理想との器となせと自から言ふ。

然り。されど、吾が信子を戀ふる心いとゞ深く、彼の女なければ此の世に倦み疲るゝ心地す。

彼の女の遂に吾を見捨てたる今日。寒風一陣、心頭に吹き入りて、めぐり轉じて吾をなやます。吾が心、色と光とのぞみとを見ず。

信子、信子、汝と吾とは同じ東京市中の僅に里餘の地にすみ乍ら、汝の心、いかにしてかくも我より遠ざかりつるぞ。

今更ら言ふもせんなし。せんなきが故に苦し。苦しきが故に此の世うしつらし。

嗚呼、戀てふものゝ苦しきかな。冷めし戀の夢を逐ふ苦み、何にかたとへん。

永久にわれ信子を愛す。吾が心に信子益々戀し。

彼の女は最早、戀の墓か。然らば吾れ其の中に埋められん。

此の世の事に思ひなやむ吾が心。

曰く、何を爲す可き。曰く、如何にして身を立てん。曰く、われは貧し。曰く、無學なり。曰く、愚者にして怠慢者なり。曰く、文學者詩人たらんか。曰く、政治家たらんか。曰く、傳導者たらんか。曰く、凡て吾が長所に非ず。曰く、われは一個狂漢、絶望者、呪はれし者なり。

思ひなやむ心の苦しさ。

永しへに此の地上に長らふるものゝ如くにもだえ苦しむ。

少壯の時は去らん。忽ち老い、忽ち死すべし。生已にはかなく、其のはかなきつかの間の生すら此くの如くに苦し。

さりとて自殺もえせず。自殺は罪と思へば死の後のおそろしきかな。生已に苦しく、死もまた恐ろし。生は苦惱、死は恐怖、此の身は地獄の中央に立つ。火焔なき、劔槍なき、熱湯なき、何もなき荒野の如き地獄の苦しくもあるかな。

今の苦惱を逗子に於ける愛樂に比べ來れば、われは高山の絶頂より深谷の最底に投げこまれしが如し。

されど友義！　今日に當りてせめてもの心の避難所は、友義のあたゝかき情にぞある。吾をせむるも

の左の如し。

愛の破壞、貧困、無職業、自暴自棄、天地悲觀。

右の五個、此の一つだにあらば人は苦しきものを、此の五個相結んで吾を攻む。

信子の離婚は吾が愛を破りて無窮の悲痛を與へ、老父母を憂へしむる貧困は殆んど胸を塞ぐの思あらしめ、自信消え自から自己を呪ふに至りて殆んど何の希望もなく、これに加ふる神の愛を感じ永生を感ずる能はざる無信仰は實に此の天地を暗き世界と化せしむ。

此の五個のもの、未だ十分其の力を逞うせずと雖も、尙ほ且つ吾を苦しむるに十二分の力あり。

されど吾、此の五個を征服せずんは止まじ。

吾あに何時までか自暴自棄するものならんや。吾あに遂に神の愛を感ぜざらんや。吾あに業なくして止まんや。吾あに貧に苦むものならんや。貧しき他の人を見て憐れめ。自家の官を願ふものならんや。

たゞ愛、信子の愛、壞れしを如何せん。忍びて丈夫（ますらを）の如くに立たんのみ。

午前早朝星良子孃を訪ふて事の次第を語りぬ。

孃泣く。

二十九日に送りたる吾が書狀を讀みて良子孃泣きぬる由、傍に在りし友、孃を促して九段坂下の花園に到り、孃わがためにすみれを求めて歸り、これを吾におくらんと思ひ居りし由を語りぬ。余其の好意を謝し、自ら其のすみれを携へて歸宅し、今机上に在り。

五月

二日。

昨日午前内村鑑三氏より返書あり。曰く、

貴書正に拜受、御厄難の段御同情の至りに堪へず。若し小生にして貴君を見るを得ば多くの慰めを呈するを得む、そは小生も早年の頃、貴君と同一の厄難に遭遇したればなり。プロビデンス、プロビデンス、神に謝し給へ、神は貴君を普通人間以上となさんとの聖意なればなり。

御渡米の事は大賛成には御座候へ共彼の地に於て少くとも三四ケ月間に堪ふる兵糧を用意するに非ざれば如何ともする能はざる事と存じ候。日本人は今や彼の地に於て大に信用を失ひ居れば普通一様の事にては彼の國の仁人君子も日本青年の爲に資を助くるが如き事はあらざるべしと存候。

貴君にして少くとも三百圓位の資を整へらるゝならば小生は貴君が斷然彼の地に到り、貴君の欲する學校に入る事を勸む。而して先づ教頭教師の信用を博し、然る後貴君の眞情を打開き助力を乞ふを得べし。小生は他に方法を考へ付かず。

小生渡米の模樣は拙著に於て略御承知の事と存候。實に例外の洋行、今日より思ひ見れば自身の大膽に驚き入り候。彼の地に於ける小生の友人は大半死歿し、今は商賣人二三人を餘すのみに御座候、依つて貴君を紹介するに足るべき人物は今は一人も無之候。

若し萬止むなくんば西京に來り給へ。小生今は徐々とカーライル文庫を作りつゝあり。小生の書函は貴君の爲めに開かるべし。只失望し給ふな。又別に恥とするに足らず。今や日本の社會は虚榮とゴマカシとの故を以て腐死せんとしつゝあり。如斯社會の褒貶何れも意とするに足らず。實に憐れむ可きは日本國なり。一人の誠實者の彼の女の大弱點を指示するものなく、又指示するも之れを信ぜず、見す〳〵好望の國民は死滅に向ひつゝあり。國の爲めに泣き給へ。自身の爲めに泣き給ふな。舊約聖書何西（Hosea）を讀み君の厄難よりして我が國の運命を察し給へ。

四月二十九日

内村鑑三

國木田君

机下

此の書は余をして寧ろ奮つて渡米せんとするの念を愈々深からしめたり。余は金を得ることに沈思せり。遂に左の決心を爲したり。

少年傳記叢書を大至急完成せしむ可し。七册と號外一册と八册の收入八十圓を四ケ月にて得べし。四ケ月の經費を大節儉を以て六圓となすべし、或は七圓となす可し。故に五十圓の餘りを生ずべし。これ今にありては大金なり。

故に渡米は初秋九月と致さん。此の事を兎も角も德富君と相談すべし。以上の決心を父母にはかりぬ。

父母同意せり。

午後出社し、リンコルンを校正し夫れより神田青年會館に抵りて丹羽清二郎氏を訪ひ北米に於ける便宜を青年會より致しくれまじきやを相談したり。

兎に角にスイフト氏に相談致しくるゝ事になりて歸宅したり。

北米の神學校に校資を以て直ちに入學し得ることを希望す。

夜一番町教會祈禱會に出席したり。

昨夜は教會に在る間も、人生凡て暗澹たるが如く思はれ國事も何もかも希望全く絶えたる如くに感じたり。

今や生きて殆んど何の面白き事なしと思ひぬ。

昨夜もまた夢に信子を二回程見たり。信子悔いてわれに歸りたる夢を。一昨夜も信子を夢みぬ。夜々の夢に入るものは實に彼の女なり。友人父母皆な彼の女惡むべしと云ひ、彼の女欺きぬと罵れども、余は如何にするも彼の女を惡む能はざる也。彼の女が全く余を欺きたりとは思ふ能はざる也。

彼の女誤りたるのみと信じ居る也。

余は信子との愛を通じて永生の偈を見たり。

深き戀愛の中に永生の希望を感じたり。人性の美を見たり、人情の高を感じたり。

今や信子の愛、忽然として冷却し、吾を去りたる事に由りて、殆んど是等の事、一時の空想幻影なりしを見る。

天地俄然として疊をぬられしが如くに思はる。人はたゞ虚榮と我慾との池に浮枕する芥に過ぎざるが如くに思はる。

信子若し死せんか、これ肉の死なり、愛の勝利なり。されど今や肉の勝利となり、愛の死亡となり了はんぬ。

肉の天地、眼にあふれ、愛の世界、消滅し去りたるが如くに感ず。加へて吾が過ぎこし方の空しかりし事など思ふ也。

不可思議の天地、不思議の人生。

わが身、限りなき悲痛に入りしより、世間幾多の悲慘の出來事にのみ心注がれて、此の世界たゞ苦惱憂愁のものなるが如くに感ぜられ、看る處、聞く處、何の快味もなく、何の趣味もなし。

東京てふ日本の首府、これに何の趣味ある。

さればとて田舍山水の地とても今はわれを誘ふに力なし。吾は實に人の世にあきはてたるが如し。

希望もなく、勇氣もなし。

友と雜談でもするが第一の樂なり。其の次は讀書、其の次は書狀を書くこと、其の次は此の記を書く事。

睡眠も苦し。何となれば信子を夢みるが故なり。

されど。

丈夫らしかれ。苦惱に勝たるゝ勿れ。却て苦惱に勝て。

此の身は無きもの、神に捧げよ。いつまでも信子を愛せよ。神の愛を感ぜよ。神と共に住め。神とたゞ語れ。神の世界を見よ。神の御手のわざを見よ。神の力、美、善、愛を感ぜよ。クリストの品性の香を呼吸せよ。

寢に就く前に記し置く。

余は到底信子を忘るゝ能はざる也。道をゆく時も余が愛をみたす空想は多分は信子に關すること也。信子との愛の一たん破れ去りて吾が一生全く何の幸福なきものとなりしやに感ず。余は信子の愛に由りて生きたり。

如何なる困厄も貧苦も不運も、信子と共に戰ふに於ては何かあらんと感じ居たり。信子の愛は余に言ふ可からざる自由を與へたり。

而して今や無し。今や此の愛のかくれ家破れ倒れぬ。

余は世路風雪の中に裸體のまゝ獨身にて投出されたり。先さの愛を回顧戀々するも其の筈なり。

信子今は却て是等の苦惱もなく、過去の戀愛を回想して何等の感もなけん。彼の女の腦中には最早や永劫をちぎりたる國木田哲夫在らざる可し。冷却せる彼の女の心こそいたましけれ。

愛情は世に勝つ。彼の女は世に勝たる。彼の女に愛情の乏しかりしや知るべし。其の彼の女を愛する

余は不運なる哉。

されど愛とは交換的ならず。愛は犧牲なり。余は犧牲となりし也。余が愛は永久變らじ。

三日　夜十時記す。日曜日。

天地何の意味もなきかの如く感じ、自殺の念動いて止まず。

午前、會堂に在りて流涕少しも止まず。

愛破れ、希望滅し、猛氣消え、自信死し、死灰よりも冷然たり。自殺の念の動くも無理ならず。

四日。朝。

昨夜も彼の女を夢みぬ。彼の女後悔して余に歸り余に幾度となくキッスしたるを見たり。彼の女、如何に余を欺きたりと人々は言ふも余は信ずる能はざる也。彼の女なくしては余は世界に何の趣味なき心地す。

此のわれ、今は生きがひもなきものとなりぬ。神の愛もわれには餘りに遠きが如し。友のむつびも彼の女の愛に比べては余が苦惱をいやすに足らざる也。自殺、自殺、余は自殺を欲す。否自殺の外に、余には爲す可きの事なければ也。見るもの、きくもの皆な苦しみの種なり。昨日の聖餐式も余の苦しめる心には何の力もなきぞ悲しき。余は人にも神にも見はなされし一個の空影子に過ぎざるか。此の日苦し。此の生命苦し。信子信子、御身は樂しきか。樂しき御身ぞ羨ましきの至りなる。御身今何の苦惱もなくば余には益々苦惱あり。御身羨ましき至り。

されど今日となりては御身にも多少の苦惱あるべきを信ずるなり。或は否か。御身樂しきか。御身若し樂しく此の日を送りつゝ居らんか。此の日は惡魔の日なり。此の日は咀ふべきの日なり。御身の樂は咀はる可きの樂なり。其の樂を享有する御身の心は毒血の池なり。聖き高き深き戀愛の血を自から吸ひからしたる也。御身は自から知らずして一個の最愛せし青年を暗殺したる也。余は彼の女に暗殺されて死す可きか。否。彼の女暗殺せんとするも、余は自から生きざる可からず。されど彼の女なくして余は自から生くる能はざるを如何せん。余は到底苦惱の兒なり。信子、信子。來つて此の苦惱するわれを救はざるか。御身は何故に過ぎし日に於て斯くまでに余を愛したるぞ。余はまた何故に御身を斯くまでに戀ふるぞ。吾等が戀愛は咀はれし也。

余は苦惱のうちに在り。されど植村正久、内村鑑三、宮崎八百吉、富永德磨、今井忠治君等の諸友あり。此の點に於て余は幸福なり。余は此の度の經驗によりて余が精神を鼓舞し、奬勵し、慰藉しつゝあり。されど此の際彼の女を思へば如何。

依つて感情を高め、知識を加へ、品性を養ふを得んとす。

彼の女に眞の朋友ありや。絶無なり。眞の教師ありや。絶無なり。眞の慰藉ありや。絶無なり。彼の女の朋友たり慰藉たるべき筈の星良子孃は却て余の朋友となり慰藉者となれり。

彼の女の母は一個の高慢にして、無學、虛榮を好み、人間を知らず、神を知らざる壓制家たるのみ。

彼の女の父は溫和なる人なれども、下品なる人なり。彼の女は今や此の父母に歸りたる也。何者か彼の女を導きて高尙なる生活に到らしむる者ぞ。何者か彼の女を敎へて眞にヒューマニテイを解せしむ

る者ぞ。何者か眞に彼の女の靈魂の爲めに憂ふるぞ。彼の女は獨立して獨行すと自信し居るべし。されどこれ彼の女の不幸なり。彼の女は野心多き割合には德性足らざる也。

彼の女の前途、遂に如何あるべき。

彼の女だに辭せずんば、余は今にても直ちに彼の女の慰藉者、敎導者、眞友たらん。妻と呼ぶ能はざるを必ずしも悔まず。

彼の女若し余を目して眞友とたのみ得るならば、眞に彼の女の幸福なる也。されど今日の場合にては彼の女の心ひがみ、昨日の愛情すら冷却し、一個高慢なる野心家の卵となりはてしならむ。

余は如何にして彼の女を救ふ可きぞ。余は必ず彼の女を救はざる可からざる也。これ余の義務なり。

余は彼の女に與ふるに靜穩平和の家庭を以てせんと欲しぬ。

五ケ月の閑居、余に取りては如何に幸福たりしぞ。されど何ぞ知らん、彼の女は此の間已に逃亡を企つる、三回ならんとは。

彼の女は到底デイビニテイーを解し得ざる人なり。或は多少美妙を感じ得んか。されど彼の女は到底一個都會兒たるをまぬかれざるか。

彼の女と星良子孃と比較するに、彼の女は勤勉家、實際家、家政家なり。星良子孃は同情の人、人性を解せる人、感情の人、野心なき人、上品の人なり。彼の女は横着の人、良子孃は赤面する人、彼の女は實行の人、良子孃は默想の人、彼の女は政治家の妻たるべし。宗教家、文學者、詩人の妻たる可

からず。彼の女は得意の人、富貴の人の妻たるべし。失意の人、貧苦の人の妻たる可からず。彼の女を幸福にする者は僞善なる富貴の人、虛名ある高位の人なり。

余は今も尙ほ彼の女を熱愛すと雖も、有體に言へば余は彼の女の夢想を捉へ得るも、實慾を滿足せしむる能はざる夫なり。

兎に角に彼の女は余に比して、數倍の不幸なる人なり。

余には堪へ難き苦惱あり。されど彼の女には彼の女を光に導く先導者なし。余の心は苦しむ。されど靈は養はれつゝあり。彼の女の心はまた必ず苦しむ。されど靈は思ふに枯れつゝあらむ。

彼は不幸兒なり。余は彼の女を救はざる可からず。如何にして救ふ可き。『時間は經驗すべし』余の心だに益々彼の女を愛して眞に其運命を憂へ、靈魂を憂へなば、時間は必ず彼の女を救助することを余に托し來らん。

今日午前出社、午後十二文豪號外シルレルを讀みて、讀み了はる。夜富永氏を訪ふて大なる慰藉を得て歸り、「余は苦惱のうちに在り」以下を書す。

六日。

深夜床上に筆とる。

昨日午前早朝、德富君を小林(下宿屋)に訪ふ。不在。

十時歸宅、直ちに食事して植村正久氏を訪ふ。來客のため用事を果たさずして歸宅し、苦惱して遂に

橫に倒れ一時に至る。蹶起して出社、途中に德富氏に遇ふ。社にてまてといふ。乃ち其のまゝ出社す。午後四時頃まで今井君と共に築地近邊を散步す。歸社間もなく德富君出社、直ちに渡米の決心を語り、且つ橫井時雄君への依賴狀を依托したり。夜十時歸宅。

本日午前出社、午後五時歸宅。

植村正久氏は余の失望せざらん事を憂ひ居る由、富永氏より傳聞す。德富君、昨日余に告げて曰く、此の度の事、必ず復讐せざる可からずと。蓋し大に勉勵して佐々城家につらあてすることを意味せり。最早、信子の事、語るまじ。恥かしの至り。痛恨の至り、語るまじ〳〵と思ひ乍ら、友の顏見れば訴へたくなる。

七日。

信子は眞に冷却せしか。余は未だ全然、然りと答ふる能はざる也。

彼の女なくしては兎にも角にも吾が生活は趣味なき苦惱なり。何事も其の面白味を失ひ、其の色、其の香、其の力を失ひぬるなり。

何故に彼の女は吾を見捨てたるか。幾度か自問するも自答を得ざる也。余は眞に貧し。彼の女の意想外に出でしならめ。

余は眞に半狂人なり。彼の女もかくまでの變人とは思はざりしならん。有體に言へば、彼の女ほど凡心を外觀に現はさゞる人はあらず。此の點に於て余とは大正反對なり。故に余は何時の間に彼の女の

愛の冷却し居たるかを知らざりし也。

されど失踪後の二通の書狀及び星良孃への書狀によれば彼の女も決して愛を失ふて後、はじめて家を出でしには非ざるが如し。

今、彼の女は如何に思ひ居らん。余の事は何事も思はざるか。

過ぎし戀愛、夫婦間の眞情をかへり見て何とも感ぜざるか。

昨日、社にありて星良孃に書狀を出しぬ。今日返事あり。再び余より出し置きたり。

吾等は從兄弟なり。決して緣は切れずと申しやりぬ。

今夕よりイーストレーキ家塾に通ふことゝなしぬ。ハムレット講義と會話とあり。

八日。

余が過去の生涯は、決して眞面目なる者には非ざりき。決して謹愼なるもの、嚴格なるものにはあらざりき。一個放逸なるもの、浮薄なるもの、狂熱的なるもの、高慢なるものなりき。罪多く、德行少なく、忍耐薄く、怠慢多く、多く空しく思ふて、少なく弱く行ひたり。

余は吾が靈魂の偉大なることを知る。されど同時にわが情熱の餘りに放逸なるを見る。

余が吾子を熱愛すること今も變らざる也。されど余の彼の女を愛したる方法は決して完全の者に非ず。

余が愛は殆んど迷溺のものなりき。不健全なりき。

一言以て評すれば吾が今日までの生涯は決して科學的ならざりき。

余は吾が使命を重んずることをせざりき。

吾が生命其の者の神祕にして莊重なるものなることを知りて感ぜざりき。余が今日の苦惱は一個、天上よりの大戒なり。余をして余の過去の凡てを反省悔悟せしむる高丘なり。

自然の自由と人情の好和とを求むる詩的狂熱ありて、而かも自然に包まるゝ人間の世に立つ深玄の反省乏しかりき。

人には皆な其の靈性を殺すほどの狂熱あり。

殆んど狂熱の無きものもあり。狂熱は一種の力なり。能く導くに於ては人を肉以上に活動せしむるものなり。されどやゝもすれば人の靈性の眞の發達を殺すものは此の狂熱なり。余の如きは此の悲しき實例の一なり。

交はる處を見るに眞に高き人なし。眞に深き人、强き人、愛の人なし。玆に於てか、これを神の人に求むるの自然の情あり。余には此の情甚だ薄し。交はる人を以て滿足せんとはする也。

余が今日の道、一路眼前に通ず、忍耐して進むあるのみ。謙遜して進むあるのみ。

浮誇放逸の生涯は玆に終らざる可からず。苦惱の力、これを殺さざる可からず。今は余が生涯の回轉期なり。余は今日まで空しく叫びたれども、默して戰ふことをせざりき。

笑つて人と語ること餘りに多く、泣いて神に祈ること餘りに少なかりき。余が心は高尙なる鍛錬の足らざる熱鐵なり。

此の度の事は此の熱鐵を鍛ふ大槌ならずとせんや。愛の力の働き余には極めて薄し。要するに信子に對しても未だ愛の働の足らざりし也。余が胸の中は絶えず苦し。此の傷のいゆる時無るべし。されど思ふに最良唯一の療法は一段高き愛に入ることにあり。則ち交換的ならざるの愛に入るに在り。戀愛とても交換的なる以上は品高からず、誠深からず、涙薄く血濁れり。

信子と余とは深き戀に入りて、而して遂に辛苦を排して婚したり。而して今や、信子、余を捨てゝ去れり。されど余が彼の女を愛する點　於ては眞實、少しも劣らざる也。益々余が愛は加はらんとする也。されど今や決して交換的にはあらざる也。

余は彼の女の心の發達を望む。決して虚榮の夢を逐はざらんことを祈る。鬱悶に沈みやせんと恐る。其の品性の高貴なる發達を願ふて止まざる也。余は今日まで人に依賴すること餘りに多かりき。今後は神に賴るべし。正しきを蹈みて神に賴るべし。人に接するには神をのみ仰ぐ大膽眞率誠實の人として接せんことを理想とせん。

神をおそるゝは智慧のはじめなり。

余は自己を信ずるの力乏しく、而かも却て高慢なりき。眞に自己を信ずるものは人と接して謙遜且つ大膽なり。これ實に男子の最高の品性に非ずや。されど自己を信ずるよりも神を信ぜよ。

今日午前竹越君を中澁谷村に訪ふ。

午後出社。宮崎湖處子君來宅。

出塾。歸路祈禱會へ出席。歸路富永氏を訪ふ、病氣なり。

九日。

欺かざるの記の最初(二十六年二月)より今日まで三年三ケ月と九日なり。

余が生涯はこゝに一變せざる可からず。

回想記を書し、苦惱記を書し、日記を書し、獨語して慰藉せんよりも、凡ての過去を過去となして、一心不亂、前程に進むの生涯たらざる可からず。

故に筆をこれに擱き、此の記はこゝに閉ぢ了はることゝなしたり。

望は前に在り。過去よ、去れ。勉勵と活動と計畫と來れ。追想と低徊と獨語と、去れ。

明治二十九年五月九日

國木田哲夫誌

18837

大正六年十二月二十日印刷
大正六年十二月廿五日發行
大正八年四月三十日五版

（定價金六拾五錢）

◀繼愛日記▶

著作者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸　國木田獨歩

發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地中の丸　新潮社
電話番町（八〇九番 八九九番）

振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市神田區三河町一丁目七番地　三英舍印刷所
印刷者　斯波貞三

ユーゴー著　豐島與志雄譯　第一卷（再版）第二卷（近刊）

▪レ・ミゼラブル

全四册

▼總洋布箱入最上製
▼總紙數二千七百頁
▼一册價壹圓六拾錢
▼郵送料　一册　八錢

是れ佛蘭西近代浪漫派の巨匠ユーゴーの代表作にして、邦文に譯して堂々四千枚の一大長篇也。その抱懷をジャン・ヴァルジャンなる一人物に寓して、波瀾多き慘苦の生涯を曲盡するの間、當時社會の各方面に、炬の如き批評の眼を放つ。全篇を貫いて鏗鏘として鳴るものは實に作者が濟生愛民の大精神にして、人道主義の大理想也。或はワーテルロオの戰場に千軍萬馬を叱咤する大ナポレオンを描き、或はパリの陋巷に、命運の哀しきに泣く一賣春婦を描く。幾十の人物、幾百の情景、その結構の複雜にして、規模の雄大なる、近代小說中これに匹敵し得可きは、獨りトルストイの『戰爭と平和』あるのみならむ。新進作家の雄にして、少壯佛文學者たる豐島氏直ちに佛の原文より譯出せらる。我文壇、始めてユーゴーの眞面目を見るを得む也。

◎ユーゴー原作　徳田秋聲氏譯編

▪哀史物語

縮刷　再版　定價五拾八錢　郵送料六錢

『レ・ミゼラブル』の精髓を小形の美本二百五十頁の間に撮みて、一讀下、直ちに原作の大綱を知り、原作の妙味を味ふことを得せしむる、極めて便利なる書なり。

露國文豪アルツイバシエフの代表作

▪サアニン（縮刷）

中島清氏譯

中版總洋布▼價壹圓六拾錢　六百五十頁▼郵送料八錢

若き美しき處女と青年との一團の中に、大膽なる個人主義者サアニンを置きて、その相交錯せる戀愛生活の裏に、思ひ切つたる肉の福者を說く。世、斯くの如く性慾生活を描いて大膽なるものあるなし。而してその眩惑的なる濃厚の色彩と、その陶醉的なる芳烈の香氣とを以て、奔放なる新人生觀を裝ふところ、寔に、無類の作品也。基督教に比較されたる異端主義、習俗の固陋に比較されたる偶像破壞主義、而して凡庸に比較されたる超人主義――新しき露西亞が叫べる此の新しき聲を聞いて、自己現前の問題の一ヒントを得ざる可からず。

▪ランゲの死

原白光氏譯

中版總洋布▼價壹圓貳拾錢　三百八十頁▼郵送料八錢

一人の人道主義者の其の主義に殉じたる悲痛の死を描けるものにして、此作者の代表作の一つ也。月夜の逍遙、螢火明滅する闇夜の接吻、瀕死の病人の黑き呻き、若く美しき處女の肉の惱み、生活の蠱惑と冒險――その大體の構圖に於て、肉の香の高きに於て、最も『サアニン』に類似せるもの也。附錄に『惡人』『深淵』『死よりも强し』『不治病院』の四篇を收む。いづれも高名の作のみ也。

トルストイ著　相馬御風氏譯

■我が懺悔

トルストイ齢五十、藝術の榮光に輝ける前半生を否定して、宗教的精神の途に上らんとし、敬虔の涙を以て昨の非を懺悔せるもの也。

（七版）▼定價七拾錢、郵送料六錢

トルストイ著作

■人生論

御風譯相馬

極めて平明、趣味豐かなる筆を以て這の一大問題を縱横に說き去り說き來る。杜翁の根本思想は、本篇に於いて遺憾なく窺ふことを得べし。

■性慾論

御風譯相馬

性慾は最も嚴肅にして又最も痛切なる事實也。曠世の偉人トルストイは此問題につきて奈何に感受し、はた奈何に解釋せるかを看ざる可らず。

■光あるうち光の中に歩め

次郎譯阿部

初代基督教に關する見解を最も平明に、簡樸に、而して感情を以て美しく描き成せる小說にして、彼が戀愛觀結婚觀を端的に知ることを得べし。

一冊四拾五錢・送料六錢宛

■【脚本】復活（縮刷）

トルストイ原作　島村抱月氏脚色

藝術座の公演脚本として、カチューシヤの名天下に喧傳せしめたるもの。杜翁の一大雄篇『復活物語』として見るも亦可也。

▼縮刷新刊▼定價五十八錢、送料六錢